
正にその義は煌く拳

本間 一平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正にその義は煌く拳

【Nコード】

N7690W

【作者名】

本間 一平

【あらすじ】

私は変人である。だけど目指すは正義のヒーロー。どんな困難が来てもどんなに辛くてもそれをやめることは絶対に無いとここに断言しよう。

計画的なのか臆病なのかそれとも単なる思い付きでしかないのか分からない自他共に認める変わり者、木堂正志の奮闘記。

プロローグ

話をしよう。俺こと木堂 正志の形を色をそしてアホさ加減を、その脳裏に描いてもらうためのそんな話。

日本生まれで日本育ちな良き父と母のたゆまぬ愛の結果、俺は特に問題もなくポンツとこの世に生まれでた。その後もママ、ダダと初めての言葉を発して父に微妙な顔をさせ、ほふく前進と直立不動を経て、いたずらが恒例行事となった第一次反抗期も終えてすくすく育った俺。

まあ言ってしまうとどこにでもいる子供といえばそうなんだろう。順風満帆、このまま進めば平凡ながらも確実な幸せに向かって邁進すること間違い無しな人間だったに違いない。

しかしそれは小学一年生の夏休みの事だ。暑く素晴らしい休日を楽しむために俺は朝からテレビをつけて寝転がってアイス食べてグダグダと実に有意義に過ごしていた。そしてなんとなしに見ていたテレビだったのだが、ある番組が再放送で始まったのだ。その時のことを一言で表すならばそうだな……

「震えた」

まさに頭のとっぺんからつま先、指の爪から一本一本の髪の毛に至るまで全身全てに電撃が落ちたような衝撃と、全ての血管と心の臓が破裂するかと思うような興奮と鼓動が俺に襲いかかってきた。

その番組は古い特撮物でかなりの有名どころではあったが、物作りという唯一の楽しみを除けばそれ以外にまったく興味を持っていなかった当時のおれは名前すら知らないものだった。

今考えれば予め知っていればあれほどの衝撃はなかったのかなとも思う。100までしかない計測器がいきなり0から一瞬で上がってくればその枠外まで飛び出して限界を突き抜けてしまつて壊れてしまつのは仕方なかったのかもしれない。

そう俺は憧れてしまつたのだ正義のヒーローに。

その日から始まつたアホもとい自他共に認める変人街道快進撃。

ヒーローに憧れるどこが変人なんだよ、そんなの男の子なら割と普通じゃないのか？ という疑問をお持ちの男子諸君は多いだろう。

その感覚がわからない女子でも、小さい頃に一度はお姫様や魔法少女に憧れた事を思い出せばなんとなく想像はつくだろう。

確かにヒーローに憧れるなんてのはある種の本能レベルで刻み込まれたようなもので、ごくごくありふれた話だろう。しかし俺の場合憧れ方がそもそもおかしかつたのだ。

それは成りたいと思つたのではなく成ると決断してしまつたことにある。

テレビの向こうにいるミュージシャンみたいになりたいとかスポーツ選手を見てあんな活躍をしたい。そういう憧れはかなり悪い言い方になるかもしれないが一種の願望と言えるだろう。

俺はあろうことが初めて見て感動した架空上の人でしかないヒーローに成ることを自分の中で決定してしまつたのだ。……………自分

自身の事を振り返ってみてはいるが本当にアホだな、むしろ俺が親ならば頭おかしいんじゃないかと疑って病院に連れて行くほどだなこれは。

だが俺の両親はよっぽど懐が広かったのか底が抜けていたのか、いきなり体を鍛えだし、さらに物作りの趣味を眼の色を変えながら本格化させていった小学生を暖かく見守ってくれた。むしろ勤勉だと喜んでいたような気がする。初めて見た機械は直ぐにバラバラにして、庭に手製のサンドバック作って毎日パンチやキックの練習していたのを勤勉と呼ぶのは無理があったと思うんだけどなあ。

ある時なぜそんなに頑張るのかと母に聞かれた事があった。その理由については説明した記憶はあるが……もしかして見守られたたんじゃないくて遠い目で見ら　いや考えるのはやめておこう。なんだか触れてはならない物がある気がする。

そんなこんなな紆余曲折を経て、俺は迷うこと無く工業高校に進学。なぜ工業高校なのかといえば話は簡単。ヒーローといえば、スーッ！　ギミック！　そしてバイク！　有り体にいうならマッシーン！　が重要極まりないものだからだ。青春の大半を物作りに割いていた俺の技能と知識はすでにかなりの領域に達していて、一年生の間にはロボ研（ロボット研究会）の先輩からは『機械の鬼』なんて呼ばれるほどになっていた。ゆくゆくは自衛隊の開発部あたりに入ってパワードスーツや装甲バイクを作っていきたいと真剣に計画していた。

ちなみに俺はヒーローになるという事に関してだけは無理という言葉は一切使わなかった、というか欠片ほども思いもしなかった。

スーツが無ければ作ればいい、体が弱けりゃ鍛えればいい、正義なんて幻想だ？　なら本物にすればいい。まさに一心不乱な男であった。だが友人曰くそれって盲目で言ったほうがいいんじゃない？　と返されさらに。

「普段そんなに喋らないお前はヒーロー絡みの話になると途端にテンションがマックスまで駆け上がる。端から見てたらまるで二重人格だぜ。おもしろいけど」

盲目に対しては一言物申ししてもらったが、二重人格の部分は……心当たりがなくもない、というかなりある。分類で言えばあまり目立たない方に入る俺だが、ヒーローや特撮物の話になった時の長舌ぶりでドン引きされた事は数知れず。いじめの現場やカツアゲ恐喝なんかを目撃し不良をぶん殴る様子を見た知り合い達の「お前誰だ!？」という一様に変わった同じ顔など何回見たことか。

まあ驚かしたのは悪かったとは思うけど、いやこの程度の刺激はむしろ人生のいいスパイスではないだろうか？　そうだ！　そうに違いない！　自分を貫き、かつ人まで喜ばしてしまうなんて俺は良い奴だ！　はっはっはっはっはあー……ははは……。ホントすみません心の底から反省しております。だがしかし後悔はしていない！

人生を道に例えるならば、人はよく変人は他の人とは違う道を行くなんて表現をする。みんなはまっすぐ歩いているのに一人だけ右

に向いて歩いていくって感じでね。でも人の人生なんて様々だ、360度どんな方向に向かったって同じような人生を歩んでいる人はどこかにはいる。右や左を向いたくらいでは変人なんて呼ぶのはまだまだ甘い。

変人は道を曲げてるわけでも、ましてや踏み外しているわけでもない。

俺たちは自分の道を空に向けて新たに作っているのだよ。空中を歩く発想をして、さらに実行してしまうような奴こそが本物の変人だ。

順風満帆であつた船を魔改造し、空飛ぶ海賊船にして乗り回した人生を送ってきた俺に大きな、それはそれは大きな転機が訪れた。乗り回したというよりは転がして遊んでたともいえなくもないかもしれないが。

高校二年生になった17歳の俺は健康優良児に育つた。身長は175センチとやや大きめ、体は幼少から習っている空手のおかげで引き締まったものだ。無駄に多くの筋肉を付けたくないと思いつながら鍛えたものだが希望通りそこまで太い腕と足にはならず鍛え上

げられたその四肢には、我ながら絶賛したい肉体だった。髪型は黒髪で前髪を残してオールバックにして頭の後ろで結んでいた。もしかしてオシャレさん？ と思った人、残念！ ぶっちゃけ散髪に行くのがめんどくさいだけです。限界まで伸ばしたあとは見事な坊主への早変わりが見れます。

そしてお顔はというと……まあ上の下つてとこじゃない？ いや自分採点だから更に一段下げて中の上かな。色恋沙汰やら服装とか流行なんてもものにはまったく興味を示さず生きてきた俺には正直わかりません。時折

「優しそうな顔をしてるわ」

っていうふうに褒められることはあったな。近所のおばちゃん達からだけどな！

そんな俺は高2の冬休みを使い家族と共に海外旅行へと繰り出していた。行き先は某ハンバーガー大国にある国立航空宇宙博物館。もちろん俺の提案である。歴史において革新的な発明品やら乗り物などが展示されたあの場所は機械オタクの俺から見れば誇張抜きによだれ物である。実際パンフレットを見ているだけでヨダレが垂れた。

もうすぐ眼の前にお宝の山が現れる！ なんて欲望を滲み出しさせていたのかいけなかったのかもしれない。

「全員手を頭の後ろに回してその場に座れ！」

某国に降り立った空港でなんと空港ジャックに巻き込まれた。おまけに逃げ遅れた俺は人質になってしまう。ちなみに両親はその時離れた場所にいたので逃げ延びていた。

ここでヒーローの出番か！？　なんて思ったがさすがに銃を装備した10名以上の手練を相手に素手で勝てるわけもなく、無抵抗のままにおとなしく従っていた。だいたい30名ほどが人質に囚われていたが、そんな中でにいた小さは少女、たぶんまだ小学生であろうその子が震えて俺の隣うずくまっていたわけだ。

自分でいうのもなんだが俺は無類の子供好きだ。おっとロリータコンプレックス、略してロリコンでは決してないからな。違うからな！！　絶対違うからな！！　男であろうが女の子であろうがヤンチャであろうが根暗であろうが、俺は子供が好きだった。そして元から持ちあわせていた正義感も相まって強盗達の支持した位置から手を離して俺は少女の頭をそつとなでていた。一瞬驚いたのかビクツと体を震わしていたが、なるべく優しい笑みを心がけていた俺の顔を見て安心したのか、綺麗な金髪の少女は俺に抱きついてきた。ああよほど怖かったんだろうな。当たり前な話だけどね。

だがその様子を強盗に見つけられ咎められた……と思うたぶん。いやだってここ日本じゃねえし、相手は英語でしかもすっげえ早口で迫ってくるんですよ？　わかるわけないじゃん。

「　　！！！」

しかしわからない為に無言だった俺をシカトされたと勘違いしたのか、激昂した強盗はその手に持った拳銃で俺の頬を思いっきり打ち付けてきた。いわば鉄の塊で顔を打つ叩かれたわけだから、かなーーーーり痛かった。その衝撃で2つほど歯が折れるくらいだったしね。

俺のうめき声に周りの空気が静まりかえっていた。その静かな場

所に隣にいた少女の泣き声が大音量で響き渡った。まずいと思ったよ。目の前にいる強盗の男は実に短気だ。そして今は更に緊張も相まって子供だからなんて言い訳すら通用しない状態だろう。おそらく「黙れ」とか「静かにしろ」と何回も言い放っていたけど、少女は更に泣き続け、男は平手までかましやがった。

いやいや痛みで子供が泣き止むわけないだろう。と意識朦朧としていた俺はツツコミを心の中で入れていたが予想通り少女の泣き声は絶叫の域にまで跳ね上がった。当然の結果ではあったがなんと強盗は拳銃を真上に発泡してその銃口を少女に向けてみせた。

「
！
！！」

錯乱する少女に恫喝なんてしても黙るはずないだろうに。だが焦りを見せる強盗はその引き金を引いてもおかしくない。いまだに激痛走る体を起こしておれは少女を抱きしめる。子供をあやすには万国共通、抱擁が一番有効だろうことは明白だ。母親の愛を忘れてしまったであろう強盗ではおもいつきもしないのは仕方ないのかもしれないがね。

俺は左手で少女を抱え、右手を強盗へと突き出して牽制する。これ以上しても少女が泣きわめくだけだと悟ったのか舌打ちを残して強盗は離れていった。

ああダメだねって心底確認できたよ、悪はやっぱりだめだね。

こういう大きな人質事件は時間が掛かってしまうものだが、なぜかその日の夕方には話が付いたらしく俺たちは開放されることになったらしい。どうやら強盗達は身代金を受け取りそのまま飛行機で海外に逃走するようだ。人質もすでに何人か開放されており、残りには老人と子供の10名ほどとなっていた。この残し方から察するに犯人の首謀者はかなり頭が切れるらしい。もしも警官が突撃を敢行した際にろくに動けない老人は助けづらく、指示も聞けずに混乱するであろう子供は邪魔にすらなる。

開放されていく人質達と、逃走の用意をする強盗たちを俺は隣の少女と手を繋ぎないで見つめていた。助かると思ってたやっとな堵していた俺は周りの様子を気にかけられるほどには緊張をほぐしていた。そして気づいた、強盗の内の一人の視線が隣の少女に度々向けられているということ。

その目の色を見た時、あることを思い出す。おみやげに買った評判のショートケーキを食い入るように見つめる母の目を。そうあれは欲望に駆られてそれを見ずにはいられない、獲物を狙う目だ。完全に肉食系の顔をしていましたよ母上。

それに気付いた時、その男はリーダーらしき男と何かを話した。リーダーがこちらを一瞥し首を縦に振ると、男はこちらに向かってきた。

ああわかる、わかってしまった。こいつがロリータでコンプレックスなお方で、今まさに隣の少女をその歯牙にかけることを決めたことが。迫り来る足音に動悸が早まり、流れ出る汗が冷えていき、口の中は一滴も残さず乾いていた。

「スタンドアップ」

ゆっくりと立てと少女に命令しその腕を掴むロリコン野郎。それ

を見て俺の脳裏には少女にとって最悪の結果が浮かび上がる。

そして俺にそれを見過ごしてしまうなんて選択肢は無かった。

「うおおおおおお」

自分を奮いたたせる為に吠え、男の顔面に鉄拳を食らわせてやった。なかなか良いあたりを出したはずだったが、男を気絶させるには至らなかった。急な痛みにも焦りながらもこちらを認識した強盗は右の腰にぶら下げた拳銃を引き抜こうとする。すぐさま俺は接近し左手で男の右手を持って構えようとしたピストルを押さえ込んだ。そして右手で相手の襟首を持って体勢を崩し3メートルほど向こうにあった壁へと走る速度で押し付ける。銃への恐怖で無我夢中であつたが背中を強打した男はその衝撃に僅かに怯むのを見て、その隙に掴んだ右腕の手首に親指をめり込めせる。あまりの激痛に男は思わず拳銃を地面に落とした。

絶好のチャンスに空手の奥義、超短くではあるが息吹をあげて右手を引き戻す。

「セイヤッ！！！」

全身全霊渾身の正拳突きは男の喉に命中し、その生命活動を停止させた。残心を取る俺の目の前の鬼畜野郎は地面へと崩れ落ちた。それは開始から5秒ほどの出来事だったはずだが、俺にはまるでスローモーションな世界に迷い込んだようだった。

そして3発の銃声が響き渡る。

人一人、その身一つでできることなんてたかがしれてる。そして俺が出来たのはこのロリコン野郎を再起不能にして少女にせまる辱めを退けるので精一杯だ。

わかってたさその結果、死ぬことになる。

仲間をやられた他の強盗はすぐさま俺を拳銃で撃ちぬいた。急所には当たらず、即死はしなかったものの右胸と左足に二発命中して俺はすでに一応立ってはいるが瀕死の状態。まあ満足……かな、目的は達成できたさ。俺に銃口を向ける男を睨み返す。止めを刺すために引き金を引く様がとてもスローモーションに見えていた。

（これが走馬灯ってやつなのかな）

両親と友人に謝罪の念を抱きながら目を閉じて行く。しかしその寸前に男との射線上に金髪の少女が立ちはだかる。

いやいやいやいやいや、せつかく助けたのに何やってんのよこの子！ 終えようとした思考と消えかけた体の力が一瞬にしてマグマのように湧き上がる。細い腕を引いて体の位置を入れ替える。最後に放たれた弾丸は首を僅かに削っていった。知ってた？ 銃で撃たれるとすごい熱いんだぜ。ちなみに俺が首を打たれた瞬間に考えていたことは

（女の子って柔らかいんだな）

である。さっきまでロリコン野郎死ね！ って頑張ってたはずだが俺にも疑惑が……。もはや半死半生の身にしてはやけに心に余裕があるな。

抱きしめていた少女の無事を確認して映画のワンシーンとしては悪くない位置だな、なんて思いながら笑顔でその場に倒れる俺。

「

！？

「！！」

いやイタイイタイ痛いよ若者よ。少女が俺をゆすりながら何かを必死に叫んでいる。すまんもつと英語の授業真面目に聞いてりやよかったな、まったくわからん。

そんな声と一緒に遠方からけたたましく銃声が聞こえてくる。この量からして、たぶん警察がさっきの銃声を聞いて突撃してきたかな。よかった、どうやら少女は無事に帰れそうだ。

意識が消えて行くのを感じる。終わり、それを実感して心配そうに声をかける少女の頭を撫でて最後に先に逝く者から言葉を送っておこう。

そう、偉大な偉人が残した俺の好きな英語の格言。

「Boys, be……ambitious……（少年よ、大志を抱け）」

そうやって俺こと木堂 正志の第一幕は終了したのである。

「って相手は少女やないかーーーーーい!!!」

最後にやってしまった大間違いにエセ関西弁風にツッコミを入れた場所は真っ白でありながら揺れているのがみてとれる不思議な空間だった。

ブローグ（後書き）

思いついて書き出したら二日間の記憶が消えたでござる。

第一話 木堂と愉快な神様

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「拍手をやめい！ 拍手されながらおめでとうとか俺はどこぞの人造アニメの主人公か！」

死んだはずの俺は謎の白く揺れる謎の空間で馬鹿でかいおっさんやら女性やら爺さんやらに囲まれていた。

「おお、死んでからツツコミの才能が開花するとはおもしろい」

何が流石なのかわからない。というか今のツツコミを褒めたということは確信犯かよ。あつなるほどこれは夢か、にしてはリアルだ。夢だとすると俺はもしかして助かったのか？

「ざんねん！ わたしのぼうけんはここでおわってしまった！」

「心を読まれた！？ あと俺の声真似でゲームのモノマネすんなよ………てかデイーブだなおい」

この若そうに見えるチャライ兄ちゃんは実にさつきから楽しそうだな、というかなぜか全員楽しそうだったり興味深々で俺を見ているがどういうことだ？

ちなみに特撮つながりから俺の趣味はアニメ、ゲーム、小説から映画に至るまでコンテンツ産業系は名作有名作などはほとんど網羅している。

「ではまず貴殿の疑問をお答えしよう。簡潔に言えば君は死んだ」

まあそうだと思ったさ、あの時死んでいく感覚があつたしな。にしてもこの爺さんだけは真面目そうだな。他のやつはソワソワしすぎだろマジで。

「そして我らは君たちで言う所の神だ」

「え、あ、もしかしてこれから天国か地獄かを決める的な？」

さすがに神様の名を出されたらビビる。そういう系統かなとは予想してたけどまさかご本人とは。

「まあよく似たものだがその話はまた後だ」

いやゝさすがに神様。風格も言葉も威厳があるな。ってその他大勢がこつち見てクスクス笑ってやがる。オラなんだかむかついてきたぞ。

「地球の神よ、そろそろ本題に入ろうではないか。我らはそろそろ待ちきれんぞ」

さつきかなりのオタクネタを飛ばしてきた兄ちゃんが満面の笑み

のままこちらに乗り出してきそうな勢いだ。いや軽く見て30メートルはあるからね君たち。こっちにきちゃったら私は踏まれてお陀仏ですよ。あれ？ 死んでからも死ぬのかな？

「まあわからんでもないな。では木堂よ、此度このように呼び出した事には訳がある。貴殿が最後に成し遂げた偉業についての話だ」

「最後に成し遂げた？ …… あっ！ あの女の子どうなりましたか！？」

「そう、まさしくそれだ」

どれだよ。

「君は命を賭して彼女を救ってみせた自己犠牲の精神は素晴らしいものだ。しかしそれだけでは偉業とは呼ばない。無事帰還した彼女は自分を守る貴殿の姿をその身に焼付けて人生を歩んだ」

そうか無事だったんだ…… 本当によかった。

「その結果、あの少女は世界平和機構のトップにまでなり、世界紛争や飢餓、病疫を解決し、さらには第三次世界大戦をも未然に防いでみせ聖女と呼ばれる存在にまでなったのだ」

なん……だと？ 俺の目指した先とは少し違うがまるで正義の味方。ヒーローじゃないか……。ん？ あれ？ なぜに過去形？

「おつと言い忘れておったな。今は君が死んでからすでに100年が過ぎておる」

「……………」

「まあどうでもいいじゃないか！ 確かに少女へと多大な影響を与えた事は偉大な功績だ。しかし我らアトレアの神々は君そのものに賞賛を与えたい」

むむむ、よくわからないことになってまいりました。あとゲーオ
タ臭いあなたは自重を知ったほうがいいのはってあんたも神かよ
！ てか衝撃の事実を軽く流された！

「地球の神はかの少女の始まりであることを褒めたが、我々は君自身の人生を諸手を上げる喝采を送るほどに感動しているのだよ」

アトレア？ 地球？

「そう我らは君の世界とは違う場所の神だ」

薄々感じてたけど心読まれています？

「神ならそれぐらい当然だ。とくにここ神界ではな」

「オウフウ……恥ずかしい……」

「まあここまで我らを喜ばした異界の民である君に、褒美を上げた
いと思つてな」

「あげるって俺死んでますけど？」

「そう、だからその先の人生を歩んでみないかな？ 我らの統べる
アトレアで、だ」

「……アトレアとはどんな世界ですか？」

「いきなり乗り気になったわ、思ったとおり面白い男ね」

「期待に胸が高まるな」

「一緒に酒を酌み交わしたいわい」

やる気的一端をみせたためか今まで会話に加わっていなかった、グラマラスでセクシー路線の姉ちゃんと髭モジヤの酔っぱらい爺と筋肉隆々なやたらと怖いおっさんが話に加わりだした。いやだから乗り出さないでってば近いよ顔が！　でかくて怖いわ！

「怖いとわ失敬ね。えっと私たちの世界がどんな場所だったかしら。そうね中世ヨーロッパ風で剣と魔法の世界って言えばあなたなら判るでしょ？」

「オK把握した」

満足のいく死に際ではあったが、やり残したことはいくつもある。もし剣と魔法の世界ならばそのやり残しは地球よりも叶う可能性は高いんじゃないだろうか。

「そうじゃの。科学はそこまで進歩したらんが魔法に関してはそこそこ進んだ物を持っておるからお主の願いは叶うかもしれん」

「受けます」

「うっひょー！　即決とかオットコマエー！」

「ほんといい男ね」

「危険度さえ聞かんとは潔し」

「今夜の酒は美味そうじゃ」

なんだろう俺のイメージする神様からどんどんかけ離れていくぞこの四人。

「では」

グラマラス姉ちゃんが手から光の球を俺に飛ばしてきた。それが俺の手の中に収まると何かが握られている感触が現れる。

「えー!? この後ろに羽根がついて前に針があるこの形状は……」

「それではーールーーーレットオオーーー!」

「『スタート!』よ」だ」じゃ」

えええええええーなーなにこれなにこれ!?

「アテレアの世界にはオレら神からの恩恵としての力を受ける奴がけっこういるんだよね。それで君に似合いそうな者を四人で選出してルーレットで決めることにしましたー」

なんか重要そうなことだけどいいのかこの決め方。

「ちなみにタワシは当たりません」

「あんた日本に詳しくすぎだろー！！」

ほとんどヤケクソ気味にダーツをルーレットに投げつける。不覚にもツツコミの勢いで投げてしまった。ルーレットが止まり、ダーツの刺さった部分が見える、のだが読めん!? 向ここの文字なのだろうかまったくわからない。

「ほほっ」

「へえ」

ふむ

「フォッフォッフォ」

それを注視していた四人の神がそれぞれに反応を示しているのだが、その様子を見ても良いのか悪いのかすら想像がつかない。なんか怖くなってきたな。

「じゃあこれとは別に我々4神からそれぞれ特典をあげるけど……説明がめんどくさいから向こうに行ってから自分で確認してね」

おいちよつと待てダメ神さま。なんだよこの雑い説明っぷりわ。
一から十までの一すら説明してないじゃないか。あつ、目から星な
んか出して誤魔化そうとするんじゃないやつて、うああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
あ。

「おお我が世界の子羊よ、そっちの世界でも達者でな」

奈落の穴に引き込まれながら一つ気付いたよ。アトレアの神は完全
に面白がって俺を呼び込んだってことがな！　おお、神は死んだ。

第二話 仕様なの？ ワザなの？

はいどうも、神々に弄ばれた木堂 正志だよー。

「はあ」

いやため息の一つも出るっしょ普通。確かに悪くない話で願ったり叶ったりなわけですがまさかあんな大雑把なままの説明でボツシユートされるとは思いませんでしたよ。もしこの世界にあの神様の像があつたら絶対ラクガキしてやる。

まあ切り替えよう、もし今度話せる機会があつたらなにかせびつてやるとしてだ。

「どこだよこっ……」

ボツシユート最中に気を失い、次に目を覚ましたのはどこかの森の中。アトレアに無事着いたのはなんとなくわかったよ、だって紫とかなり黄色い太陽が空に2つ見えてますからね。だが地理の知識も世界の常識も知らない状態でこんな深い森の中に居るのは。

「遭難スタートとか難易度高いよ……」

無闇に歩くのも体力消耗の危険を伴うのでとりあえずそこらにあった岩に腰掛けて思考する。地球ですらアウトドアに行ったことがない俺にとってはまさに大ピンチ。持ちうる知識を使って解決策を導き出す。

考える像そっくりなポーズで考え出してからだいたい20分くらいしてだろうか、近くにあった茂みが揺れ動く。瞬間に立ち上がり準備していた木の棒で構えをとる。

剣と魔法の世界なんて単純に説明されたが、俺の知るなかではほぼ確実に魔獣やらモンスターなんて呼ばれる人を襲う化物がもれなくセツトでついてくるのがごくあたり前だ。その危険性を一番先に思い立ち、先の尖ったそれなりに太さのある木の棒と幾つかの大きな石をポケットに忍び込ませてある。元から体を鍛えていたから大型犬程度ならなんとかなる……はず。だがなるべくなら今は出会いたくは。

「グルルルルル」

なかった。てかデケエ！　なんか頭が妙にでかいが熊っぽいそれは茂みを出た時には既に俺のほうに視線を向けていた。俺の美味しそうな匂いがしたから来たんですねわかります。

こいつを体長2メートルの熊と同じ戦闘力と仮定して一瞬でシミレーションしてみるが、ダメ。まったく勝てる要素が見当たらない。

「難易度高いどころか無理ゲーかよ」

脳裏に俺が四神に囲まれていじめられている図が浮かびがるが、信憑性が妙に高い可能性があるものの直ぐに否定しておく。あの神

様をデイスツた回数ごとに不運度が上がっている気がする。ならも
しかしてあの神様達を崇めれば幸運度が上がるのでは……とおもっ
たがあの神様を崇める部分がないので諦める。

「グオーーーーー！！！」

組み易しとみたのか熊公がこちらに迫ってくる。獣の見た目ほど
は早くないなこいつと思いつつ右側に大きく回避。命のやり取りで
緊張したのか踏み込みすぎて若干よけるものの回避は成功。熊に
目をやるとおれに向けて放った右爪が座っていた岩を砕いていた。

「熊ってレベルじゃねえ！」

それを見てすぐさま木の入り組んでいる方の森へと逃げこむ。こ
いつはパワーのわりには早くは見えない。ならば足の速さと小回り
さを活用して逃げきるまでよ。

「あばよ、とつつあゝん」

人生で一度は言ってみたかった俺語録第4位の台詞を置き土産にスタ
コラサツサですよ。5分ほど走った後であることを思い出す。無闇
矢鱈に走るのがまずいからあそこで留まって考え事をしていたとい
う事を。

ということとで現在崖にぶつかり、しかも二匹増えた熊さんが前と
左右を見事なチームワークで塞いでおられます。

「無理ゲーどころか詰んでるじゃねえか……」

もちろん愚痴が言えているあたりはまだ若干の余裕がある。この
熊の攻撃は俺からすれば遅く、避けるだけなら簡単だったからだ。

まあ一匹だけならの話だけど。そこでおそらく同時にかかってくるであろう熊の右手側の顔面に石礫を投擲、ひるんだところでその脇から再び逃走する算段だ。え？ 倒さないのかだって無茶言っとなよ人間が素手で熊を殺せるか！ 手に持った木の武器はつてか？ そんなもんはさつき走りだした時にまっさきにぶん投げたわ！

「グワツ！！！」

予想通り三匹同時に掛かってくる瞬間に右側に全力で石を投げつける。よшついいコース直撃間違いない。

カアアアアアンと厚めのガラスが砕けたような音と共に右の熊さんの頭が跡形もなく弾け飛ぶ。

「は、はいいいい！？」

投げつけたと同時に走りだすつもりではあったのだが、あまりにもショッキングな映像に足を止めてしまう。

「グワアアアア！！」

俺と同じように真ん中の熊も驚きのあまり動きを止めていたが、左側の熊はそれに気付いてないのか俺に襲いかかる。隙だらけではあったが熊の攻撃は所詮のろくて単純、軽々と避けてみせる。

投擲のともない結果とさつきから感じる壮大な違和感を照らし合わせて、その答えを得るために避けたあと熊の横に回りこみ速さを重視して軽く突きをはなってみる。触れたと同時に即退避。だがその軽いはずの突きで俺の体重の数倍はあろうという熊の体が僅かに揺れた。

「うっわぁマジですかい」

「グウウウ」

苦悶の表情を浮かべてこちらを睨む熊。その隣に気を取り戻した中央の熊が並んでこちらに身構える。あっちも驚いた様子だが確実に俺の方がおどろいてるから！ だってさっき熊を揺らした正拳は俺の全力からみれば2割程の突きだ。さっきから熊が遅く見えることと、走ってきたのにまるで切れない息。そしてさっきの石投げと突きから考えるに……。

「いや答え合わせはこいつらで試すか」

ニヤリと笑って見せると足元にあった拳大の石を持ち上げる。そして全力で振りかぶって熊の片割れに投げつける。受け止めようと腕を突き出すがそれごと熊は数メートルふっ飛ばされていた。

「はい大正解でしたー」

ふつとぶ熊に振り返ってしまったもう一匹の熊の足元に駆け寄り、その胴体に正拳三段突きをお見舞いする。殴られた場所が風呂桶ほど凹んで血反吐を吐きながら熊は転倒していった。

「これは……神さんの言ってた特典の一つか？」

非現実的である身体能力であるにも関わらず今の今まで違和感なく受け入れられていた事を考えるにこれが神の仕業と考えたほうが辻褄が合う。正直度肝を抜かれたがまあそのおかげで助かったんだ感謝はしとこうかな。なーんて思いながらニヤついて手を開いたり閉じたりして異界で不思議な魔法の世界。元の世界でいえば有り得ない事が平気で起こる世界なんだという実感を確かめていた。

がそれが油断大敵雨あられ、って古いか。

「ウキヤーーーーー」

熊の血の匂いに釣られてか崖の上から大きな猿型の怪物が襲いかかってきた。気づくのが遅すぎてその爪が体にあたりそうになる、正直こんな森では軽傷だって下手をすれば命取りだ。

「ヤバッ」

しかし猿はその爪が俺の服に当たった所で細切れに切り裂かれた。……おうショッキング映像の次はスプラッター映像かよ……今空腹でよかった。胃酸だけ逆流しそうになったがしっかり飲みましたよ。

「油断大敵雨あられ、遅らせながら風の妖精フィリー主の名によりここに馳せ参じました」

こっちも古い。血の舞い散る森の中、羽根の生えた手乗り少女が満面の笑みでおれにお辞儀をしていた。スプラッター+美少女……これはまさかヤンデレフラグか！？ やだー。

第二話 仕様なの？ ワザとなの？（後書き）

八白万の神々の中にもふざけた神様っていらっしやるんだろっか？

第三話 本当に大丈夫なのかこの世界

「大変遅くなつて申し訳ありません。なにせこの広大なヨルガの森のどこかに居るとだけしか主人は教えて下さりませんでしたので」

何だか申し訳なさそーに俺に謝る自称妖精。頭を下げて真摯に謝罪する少女を360度グルグル周りながら観察する不審者極まりないおれ。

「あの～なにをなさつてるのでしょうか？」

「いや、ごめんね。妖精って言われてついね」

なんせフリーーは見た目は幼い少女だがその大きさは十センチほど、薄く透明な小さな羽根を四枚背中を持ち、フリフリの可愛い服を着たまさに可憐な西洋の昔話に出る妖精そのものだ。

「あはつ。つまり一目で私の可愛さの虜になつてしまったわけですね。うっふっふどうしましょ」

中身はどうやら若干残念なようである。

「おつと自己紹介を改めてさせてもらいます。私は風と歌の神ナーブ様が使徒、春風の妖精フリーーでございます。この度は主の命により木堂様のサポート役として遣わされました」

風と歌の神……いやそもそも神様の知り合いなんてあの四神しかないし、すると風……歌……ああ、あの軽そうで一番喋ってた兄ちゃんか。弦楽器っぽいもの持ってたしな。

「それってもしかして、えーっとナーブ様？　が付けてくれた特典ってことなのかな？」

「それに関してナーブ様より伝言が「事情を知って、なおかつ理解する子が一人くらいいてもいいじゃない」だそうです」

軽っ！　ほんと軽いわあの神様。でもまあ氣をつかってくれた事には感謝しとこうかな、明日の朝ぐらいまでは。

「じゃあサービスっばいね」

「それとご質問や疑問は多いと思いますけど、その前に」

何やら背中を向けてゴソゴソと何かを探すフィリー。

「はい。この世界で初めての達成記念です」

大きな球を取り出し嬉しそうに笑いかけてくれる　のはいいけどどう考えてもその球の体積あなたの体より大きいよね！？　どこから出した！？

「私が支えますので、ぶら下がった紐を引っ張ってくださいか？」

「え？　これ？」

パッパカパーン、とどこからとも無く聞こえるラッパのファンフアーレ。

「おめでとunggざいます。木堂様は一つ目の特典に気付かれました

「――!?」

くす玉から垂れ幕が降り、金と銀の紙吹雪が綺麗に舞い散る。ル
レットにくす玉とか俗物すぎるぞこの神は――！――！――！
！ という心の声は純粹に祝ってくれているフィリーの手前、心の
泉に沈めておく。

「なになに、『よくぞ我が特典にたどり着いた。我、火と武の神で
あるバーダグノミスの特典は肉体強化常時三倍である。これを使い
こなし一層の武の励みとせよ』か……うむ計算が合わんぞバーグさ
ん」

さっきの戦闘から肉体が強化されたのはなんとなく想像はついて
はいたが、元の肉体の三倍程度ではあんな芸当はとてでもないが
できない。

「あつ納得できませんか？ その場合の伝言を地球の魂と肉体の神
様から承っています。『地球とアトレアの人間では元から三倍ほど
肉体に差がある、そこで元の肉体から換算してそっちに合わせて作
り替えてあるから安心するように』だそうです」

ああ成程、3倍ではなく3×3で九倍なんですね。………確か空
手で瓦割りが最高で12枚だから9倍だと108枚か……八八八
……………って笑えねよ！ 怖いわ！ やりすぎだろこれは！ ハッ
今気づいたが他の特典もこれ並みなのか？ 例の特別な力はもつと
上？

「よし俺は考えるのをやめます」

「ど、どうしました!?!」

「気にしないでいいよ」

神様の上でコロコロ遊ばれてる気がするが心労が増すだけなので忘れる事にする。うん、それがいい。そんな問題の先送りではないじゃないですか！ と問責されそうな話だが決して俺のせいではないと弁解しておく。

だつてさ、死んでしまつてからこつち驚きとか衝撃とかで心労がかかつてない時のほうが時間的に短いんだよ。死んだと思つたら神様がいて、なんだかよく分からないままに居世界へと飛ばされ、森で熊さんとお猿さんに会つたらヒヤッハーですよ！？ いいじゃないかちよつとぐらい現実から目を背けたつて。こんな力オスすぎる状況は変人の俺でも噛み砕いて飲み込むにはすごく時間がかかりますよ。

「さてそれでは質問に答えていきましょう」

「…………じゃあまず一つ、アトレアの言葉つて地球とは全然違うよね？　なんで俺は君と会話できてるの？」

神様ルーレットに書いて会つた文字は見たこともない文字だったし、言語形体が一緒なんて偶然は流石にないだろうし。

すると質問を聞いた妖精さんは、パツと花が咲いたように笑顔なり再びくす玉を取り出した。

血生臭い場所で会話をするのもアレだし、夕暮れも迫って来ていたよなので今晚を過ごす場所を探して移動する。幸い熊と一戦かました近場に縦穴の洞窟を発見してそこに陣取ることにした。ちなみに発見した後、あの熊を一匹引きずってきて石切包丁を作って皮を剥いで焼いて食った。正直なかなかのグロテクスな作業であったがフリーがバラバラにした猿の映像のほうが遙かにすごかったのか吐かずにはすんだ。身につけて来た常識と倫理観が音をたてて崩れる音が聞こえてきそうだった。しかし俺は目的の為に苦労も心労も厭わない男。これぐらいわ……いややっぱちよつとキツイわ。

そしてこの日の夜と、次の日一日を掛けてフリーとの問答は続いた。その結果いろいろとまずいになってことがわかって直ぐには人里には向かわず、しばらくこの森で生活することになった。

あつ、ちなみにさっきのくす玉は風と歌の神ナーブからの特典でこの世界の言語を理解できるようにするというものだった。コメントは正直むかついたので略してやる。

問題点その1。戦闘力の安定化。

身体能力と空手の技である程度はなんとかなるが、ここは剣（拳）と魔法の世界。それだけはまだ半分だ、そこでフリーに魔法の基礎を学ぶことになった。魔法ってのは簡単に言えば生命に流れる魔力をつかって火の玉を飛ばしたり水をどこからともなく出したり風を起こしたり地面の形を変えたりする、そうあれだ不思議パワーだ。まあ一応科学で代用出来るのがほとんどだな。『発達した科学は魔法と見分けがつかない』なんてのは誰の言った言葉だったか。まあこの世界はそれなりに魔法が発展していて科学では代用できないような事もできるらしいが実際見る機会は来る日はあるだろうか。フ

イリーの説明は感覚的な話だったのでいつかその構造やらの詳細を調べてみたいものだ。早速自分で使ってみたら小石ほどの炎が出たので才能が無いわけではないようなので安心した。

問題点その2。金が無い。

完全無一文の俺が人と生活をしていく上では金が必要不可欠となる。もちろん俺の目標を達成するためにも金はあればあるほど都合だ。てか絶対いる。そこでこの森で取れて、金に成るものがある程度集めることにした。どれぐらいで売れるのかまではフィリーも分からなかったが。間違いなく金に成るものはなんとなくわかるらしいので協力してもらおうことにする。あの熊達の毛皮はいい値段になってくれるといいなー。

問題点その3。常識が無いどころかマイナス値。

常識が無いのは当たり前なのだが、俺には地球での常識が存在しているわけで、それをこちらの常識などと捉えればどんな問題が起るか分かったものではない。おそらく悪いことだらけのイベント盛りだくさんなのは眼に見えている。まあ妖精であるフィリーも人間の常識を持ちあわせているかと言われれば、あんまりではあるけれど最低ラインはあるらしいので参考にさせてもらおうことにする。

これらにある程度までクリアーしてから街に繰り出すことと相成ったわけだ。西洋ファンタジーに突入したのに最初のイベントが山簗りとは色気がないなーと思いつながらなんとかフィリーの癒し成分で耐えることにしよう。しかしずっと熊ばっか食うのは辛いなーと零した翌日にフィリーが食べれる果実やきのこを持って来てくれた時は彼女が女神に見え、俺の中ではあの四神よりもランクが上になりました。傷心の魂が清められるー！ー！ー！。

「ひれ伏せって言われれば喜んでひれ伏しますよフィリー様！」

って心の声が漏れてしまい、フィリーにドン引きされ。

「そんな趣味があつたの？」

と聞き返されたのはクリティカルヒットで俺のハートを砕いていました。

はい、そんなこんなで30日が経過しましたー。えっ修行風景は？
ねえよそんなもん。俺様のパーフェクトかつなんの困難もない華麗なる風景を延々と見たってつまらないだろう？ フフン。

はい嘘です。正直なところ問題点2と3は順調だったんですがね。1に問題がありました。魔法の習得は大分難儀しましたよ。フィリー曰く。

「想像力は凄い！ 全属性をここまでのはつきりイメージできるのは大したもんだと思うよ。でもって覚えもいいしね。でもキドーは魔力の制御が下手すぎるよ」

だそうです。ちなみに敬語と様付けは気持ち悪かったんで初日に変えてもらいました。フリーも慣れない言葉遣いは気持ち悪かったそうです。まあ向こうの世界には魔法が使えるゲームなんて腐るほどあったからイメージはしやすかった、使い方もなんか儀式とか円陣を書くやつとか難しいのがあるらしいが、習ったのは初級だけ。イメージと魔法の燃料である魔力を頭で編み込んで呪文を唱えるだけと至って簡単なものだった。

しかしおれは魔力を注ぐ行程がかなり下手というかめちゃくちゃで、一滴の水でいいのにコップ一杯の水を汲んでくるほどだそうです。自分でもアホだと思うよ。だが魔力は感覚で操る物でいまだその感覚はあやふやなままだ。この世界基準で言えば生まれた時からこの感覚をもっているのだろうが、おれは残念なことに一ヶ月前にそれを持ったばかりだ。年季が違うのだよ年季が！ 悪い意味でな！ 赤ん坊にお箸を持てとか無茶ですよ奥さん。なんでも中級に進むには魔力制御を完全に身につける必要があるそうなので道はほんとうに遠そうだ。

だがなんとか初級の魔法はいくつか治めることには成功した。だがその消耗度の問題から連発とか広範囲にばら撒くことはできていない。

「まあ慣れたな、慣れ」

魔法は今後に期待である。期待して、期待できる？ いや期待しよう。……現実としてはどうなるのかからんの一言だ。

そんでもって俺の様相も凄じ変わりようだった。最初は向こうで死んだ時に着ていた長袖のシャツにパーカーとGパンといった格好で過ごしていたのだからいかにせん汚れやら傷やらが目立って仕方ない。正直なところこれが地球を思い出す唯一の品だけに破損とか捨てるという状況は意地でも迎えたくはなかった。つまりその結果、森で倒した鹿っぽい何かの皮で作った服を来た原始人ルックな男の

完成なわけですよ。フィリーがいたのももちろん上下完備である。毛皮を来て石を投げたりして戦う俺の姿はまさに教科書に載っていた北京原人そのものである。俺的にはこれが一番きつかったよ、精神的な意味で。

さらに俺らは10日かけて人里に降りる準備を整える。フィリーがナーブから託されていた地図によりここから最も近い村は判明していたが、そこに立ち寄るつもりは無かった。東にあるその村から更に東南東にある大きな街、ブローナスそこが俺の目的地だ。理由は色々あるのだが、最も大きな理由はそのブローナスが現在居るブローニアスという国の首都で最も大きな街であるというのがその要因だ。

もしも、せめて、もしかして、であるならば、かもしれない。俺なりに色んな可能性を考えての一案である。まあ何か問題を起こしてしまってもまたこの洞窟まで逃げればすむ話しさ。40日をすごした洞窟は既に入り口が設置されており、中には木で作ったベッドと熊の皮で出来た布団が設置されたちよつとした小屋状態になっていた。やっぱ野宿とはいえ人間なんだから環境がいい方がいいじゃない？ 夜の間は暇だったからついつい凝ってしまいましたよ。やっぱり趣味、物作りは魂の洗浄だね。カオル君バりに一人夜中に越に

浸りながらの作業風景は一度見たら毎晩うなされること請け合いの光景だろうね。俺にはごくごく普通の日常の光景の一つなんだけどね。

さて全ての準備が整いいざ出発の時が来た。これまた木で作った背負籠にありったけの荷物を積み込んで背負い込む。その形はそうだな、二メートルくらいのごついタンスってのが一番近い形かな。重さは80キログラム弱ってところだと思う。大きさのわりには大分軽いのは獣の皮と薬草の類が大半を占めているからだ。体積的に一番思いのは道中で俺とフィリーが食べる食料だろう。しかも80キロと言っても筋力が9倍に膨れ上がったおれには9キロ相当の荷物でしかないちょっとおもいくらいにしか感じない。

さて目的地のブローナスはここから大体馬車で10日はかかるらしい。俺的予測に基づいた計算によるとだいたいその距離300キロの道のりのはず。もちろん俺は馬車など使う予定はない。というか金が無いのが問題点なんだから買えるはずもないしそんなゆくり旅をする気も毛頭ない。この世界を知りたいという知的欲求はすでに限界を超えて精神全体を両手で揺らし続けている。

そこで俺は自分で走ることにした。実験的に同じくらいの岩を担いでジョギングのペースで走ったところ問題なく走れた。しかもジョギングといってもおなじみ強化がついて回るのでその速度はかなり速い。そしてフィリー直伝の森の薬草から作った疲労回復薬を補給しながらだと、たぶん一日6間くらいは走れるはずだ。おそらく順調にいけば5日程でブローニアに到着するはず。

だが問題点もあった。フィリーにこの重さの物を持って走り回れるのは普通か？ と聞いたところ。常識の勉強やり直す？ と聞き返されてしまった。まあなんとなくそうだと思っていましたとも。俺だって自分の身体能力にはドン引きしているんですから。そこで俺は舗装された街道はから外れて直線上に平原や森を突っ切る予定だ。ちなみに川はフィリーの風の魔法で運んでもらう予定だ。この重量を風で運べるフィリーの魔法も大概なものだと思うんだけどな

「でもフィリーからすれば最初に猿を細切れにした風の魔法もまるで本気ではないらしいのでまさしく可愛い顔して怖い奴である。」

「……………街に着いたら飴でも買ってあげようかな。」

「さあしゅっぱーっ！！」

フィリーは最近定位置と化しているおれの右胸ポケットに入って出発の音頭を取っていた。

「ヨッシャー……冒険の始まりだ……！！！」

苦節40日、長いようで短いようなお試し期間を乗り越えて遂に俺の念願を叶える冒険が始まった。

「おお、やっと出発したか。サバイバル生活もなかなかよかったがやっぱり君は波乱万丈な人生が一番輝く男だよ。さあしゅっかり活躍して躍動して奮闘して僕達を楽しませておくれ正志君、いや僕達期待の正義のヒーロー」

第三話 本当に大丈夫なのかこの世界（後書き）

いい意味でも悪い意味でも適当です。

第四話 ややしやー

さて道中は問題もなく進行した。人に会わない場所をあえて通つて来たのだ問題があつてもらつてはこまるが。あえていうなら化物、この世界では魔獣と呼ばれるやつらに何回か襲撃されたがヨルガの森にいたやつに比べれば実に雑魚極まりなかった為戦闘シーンは大幅カットだ。

そして目的地プロニアス王国首都、ブローナスに二度目の侵入を出発して3日目に行った。

なにを言つてるのかわからねえと思うが俺もなんでこうなったかわからない。

まず問題としては俺のジョギングのペースは体感よりかなり速かったというのが一点。あと疲労回復薬が予想よりかなり優秀で一日八時間も走れたのが一点。問題及び迷子の可能性を考えての日程だったのだがそれらもほぼ無しでの行程となったのを合わせての合計三点だ。これらのことからブローナス到着はなんと二日目の夕方に

なつたのだ。正直街が見えた時は違う場所に出てしまったと勘違いしたほどで、フリーがその姿を知っていなければ通り過ぎてしまふところだったほど信じれなかったよ。

まあまあ速いことは悪いことじゃない、むしろ良い事だろうからとりあえず置いておく。そして俺は街から少し離れた森に荷物一式を隠して街へと向かった。なんでそんな面倒な事をするかというと、俺には一つの懸念があった。それはフリーにも解決し得ない事でもあった物価の把握だ。

俺が持ってきた荷物はそのほとんどを金にするために運んで来たものののだが、それが安い場合は問題ない。しかし高すぎた場合が問題だ。そうで合った場合出所を聞かれたり、有名になってしまふ危険性があるが、それは今は全力で回避したい。街道を逸れて走ってきたこともそうなのだが俺は極力目立ちたくはない。これは性格的な問題ではなく、俺が叶えたい目標のためにはわりと必要なことだからだ。そして俺が持ってきた中で魔獣を倒して得たものはフリーの常識でいうならば安いとは全く思えないものだ。

その内約はクマ型の魔獣の皮4爪5、猿型の皮と爪8セット、狼の皮が21に虎の皮が1だ。常識的に言えばたぶん熊と虎はかなり強い部類で希少性も高いはずだ。熊の皮はかなりの強度を持っていた、俺の全力の投球にも頭の部分以外だと破れることもなかった。まあ衝撃を受けてめきれずに内蔵がひどい事になってたけど。そして問題の虎だ。こいつは森で会ったなかでもダントツで強かった。正直なところ魔法を習得し切れていない俺ではかなりの苦戦を強いられ森で唯一フリーの助力を借りて倒して獲物だ。その見た目は虎を二回りぐらいでかくして、その頭からは1メートルほどの曲刀が生えていると言った魔獣だ。しかも俺命名のサーベルタイガーは見事にその大木をバターののように切り裂く曲刀をつかいこなして攻撃してくる厄介極まりないやつだった。爪、噛み付き、曲刀の三段攻撃まじめんどくさい。

え？ サーベルタイガーは安易すぎるって？ いや曲刀を使う虎

とかそれ以外ありえないだろ、ネーミングセンスの問題じゃなく見たらそう思っつて。

ちなみに剥ぎとったその曲刀は森での私生活に大きな実りと幅を俺にもたらししてくれた。おもに工作的な意味で。

「問題が山積みになっていくのが見えてくる」

そうフィリーにこぼしながら街に入り一日を掛けて街を練り歩き物価を調査してたぶん問題ないとふんでいた狼の皮を売払い宿を確保。ちなみに狼の皮も予想よりは大分高かった。そして改めて荷物をとりに戻って現在にいたるのである。

調査の結果俺の心配は杞憂に終わ　　らなかった。狼と薬草の類は大丈夫そうだが、その他は軒並みやばかった。猿と熊はそれなりに流通しているが、個人でまとめて売りに来るやつなどほぼいない。商団が他の街で買い集めて売りに来るのが普通だった。そして懸念どおり虎はやばかった。素材どころか倒しただけでもかなりの懸賞金が得られるほど凶悪な奴だったようで、その懸賞金2万デイクス、曲刀にいたっては5万デイクス（1デイクス約100円）という合わせて700万円相当の破格さである。あぶないあぶない、この腰に下げた刃を売ったらたちまち有名人の仲間入りしてまうとこだったぜ。確かにあいつは強かったな、フィリーと協力してなければ俺もやばかったし。

「さて忍び込みますか」

現在みなさんは夢の中へと旅立った丑三つ時の真夜中だ。なぜ忍び込む必要があるのかといわれればこの街は城壁に囲まれており南北東西にそれぞれ大きな門が設置されており、街の人以外の人は入国審査ならぬ入街検査が行われるのだ。つまり荷物もチェックされてしまう。そうすると荷の内容がバレる可能性があるのだ。今思え

ば腰に下げた虎の曲刀は一回目の審査でよくバレなかったものだ。まあ元からのレアさに加えおれはそれに柄と鞘を作って加工しているのだぶんわからなかったのである。ただおれの服装を見て奇異の目を向けていたのはどうかと思う。

森の頃の原人ルックは勿論卒業している。現在はGパンになぜか袖が無くなってしまったシャツとその上に原人時代にお世話になった鹿の毛皮で作ったベストを着ている。一応この世界で違和感はない感じにしたはずなんですけどね。

もしかしたらまた俺の常識が合っていない部分があるのかも知れないし、いつか調べておこう。

「ではフィリー頼んだよ」

「ぬっふっふ。首都に忍びこむとかなかなかスリルがあつていいね」

敬語をやめるようになってから気付いたがフィリーはかなり遊び心がつよい、といか満載だ。イタズラやら遊戯といった物に目がない。さすがあの神にしてこの妖精ありだな、と凄く納得できるものがあつた。

「見つからないようにね」

「大丈夫よ。私くらいの妖精だと許可した相手か、よっぽど特別な力を持った人以外には私の姿は見えないもの」

ほほう実に妖精っぽいすな、てか実際妖精なんだけどね。

「じゃあ、風よ吹き荒れよ！ 『ワールウインド』」

呪文を唱えてフィリーは街壁の方へと飛んでいく。ちなみに現在

フィリーさんの呪文により一部街壁が暴風圏に陥っており大変危険です。一般市民の皆様はおとなくお家に帰りましょう。

「よし、行きますか『ライトプラス』」

俺が使った魔法は光を強化するものだ。簡単に言えば元からある光を更に明るくするという至極単純なものだ。この世界の魔法は、こうこうこういう効果がこういふふうに掛る。なんていうふうに決められているのだが、対象とか出力とか例えば飛ばす時はどれぐらの速度でどこに飛ばすかなどの効果以外の部分はわりと自由だ。どこまで自由なのかフィリーに聞いた事もあるのだが「さあ？」なんて可愛く首を傾げて返されて壮絶に悶絶せられた。

うむ、話がそれたね。ええつとフィリーの可愛さについてだっけ？ よろしい三日三晩語り明かしてくれる。え？ 違う？ チツ。

とにかく俺は初級の魔法しかまだ使えなかったものでそれらを色んな方法で工夫を凝らして使っている。そこから生まれた俺式ライトプラス。プラスシリーズは元からある火とか水なんかを多くしたり出力を上げたりするものだ。ライトプラスの場合マッチの光を松明替わりにしたりするために使われる魔法なのだが、俺は俺の目に入る光を少しだけ強化するように使った。

「うむバッチシ見えるな」

目ってというのは光を取り込むことで風景を見てるわけだ。暗い所でなにも見えなくなるのはその光の量が少なくなっているわけで、しかし基本的に全く光がないなんて場面はそうはない。だからほんの少しだけ目に入る光を増やしてやれば真夜中だって結構視界は良好だ。

準備万端整えて俺は南西の街壁を登りロッククライミングよろしく登りだした。事前調査の結果ここがわりと手薄な警備でこの時間

が最も忍び込み易いと予測した。まあほとんど勘ですけど。

そして作戦はまず強めの風を起こすことでおれの足音とか背中
の荷物の音を悟られないようにする。そしておれの進路に合わせてフ
イリーが兵隊の持つランプの灯をそつとけしていくというものだっ
た。文化的にも進んでおらず明かりが街を一日中覆っているわけ
でない。ちなみに正門とお城は明るかった。たぶん高いんだろうな色
々と。ましてや今夜は三日月。例えば地球と違ってその数三倍もある
突きではあるがそこまで大きくはないので明るさは大したことがな
い。そんな中で手元の灯りを消されては足元すら確認するのは困難
だろう。

さすがに隠密行動なんてやったことなかったのである種の力技で
押し通ることにしたのだ。……気配を察知するなんてスキルを一般
兵が持つてないでしょうね？　ないよね？　大丈夫だよな？

すでに二人ほどやり過ぎして現在壁のほぼ上段。そんなとこまで
来て若干の不安を抱いていた。

「我ながら大胆なんだか臆病なんだかな」

この間抜けめ！　と自分を^{なぶ}蹴りつつ上辺に登り着く。左右確認を
すると、少し距離のある場所で兵士が急にランプが消えてしまっ
てあわてて火種を探している様が見える。どうやら上手く行きそう
だ。

「あーあー、えーつと南西ブロックの1区画になにか入ったぞ
周辺の兵は至急確認求む」

突然周辺に誰からかの声が響き渡る。学校の校内放送を思い出す
それではあったがそれが俺の事をさしているのはすぐに察しがつ
いた。

「探知魔法とかあったりするのかな」

さすがに首都の街壁に容易く侵入できるというのは公算が甘かったかな。よし、うむ、仕方ない。必死に自分を鼓舞する。

「ソ
――
イ」

高さ30メートルの壁から飛び降りなきゃいけないかったからだよ！

「ぬおおおおお」

身体は強化されてるが現在巨大な荷物を背負い中。下手すりゃ両足骨折の見るも無残なことになること受け合い、良くても背中のはバラバラチリジリなのは目に見えてるぜ。だからおれは奥の手、プランBを使うぜ！

「『ウィンドボール！』」

下級魔法のボールシリーズの風版。それは各種の属性の球、サッカーボール大のそれを相手にぶつける攻撃魔法だ。いや光属性のライトボールは単なる光の球だから攻撃はできないか……まあいいや。それをなぜ今だったかと申しますとこれも俺式に工夫もとい魔改造して使うわけですよ。

俺の下方方向にそれを出現させ俺はそれを四肢を使ってガッチリキヤッチした。つまりウィンドボールはぶつかった相手を吹き飛ばす風の塊。その力で俺の落下速度を相殺、吹き飛ばされる力は俺の四肢で抑えこみ、それでもつておれが球を地面まで移動させれば万事解決だ！

「ぐおおお」

なんとか着地に成功した俺はその直ぐ近くに予め取っていた宿へと向かい、予め開けておいた窓から侵入もとい帰還を果たす。

「ハアハアハアハア、いやゝなんとななるもんだ」

そう一息付いているところにフィリーがやってくる。なにやら機嫌の悪そうな顔をしているが……もしや俺の身を案じてくれているのか!? 「無茶ばかりして心配したんだからね」的な。

「……………私は今まで風の魔法は優雅で綺麗なものだと思って生きてきたけど……………キドーの風術は無理やり過ぎてなんだか汗臭いよ」

どうやら自分の属性の魔法のイメージを傷付けられたらしたための不機嫌さのようだ。確かに力技極まりないのははたから見てもそうだろうし何よりダサさは自分でもどうかと思えるレベルだったしな……………あれ? 目から汗が溢れてクルヨ。

ちなみにプランBの意味は何も無いだ。

第四話 ややこしやー（後書き）

頭の良さとしてはいいところと悪いところの差が酷い木堂君でした。

第五話 想定外デース

さて侵入劇から一夜あけ、傷心な俺は激痛と共に目が覚めた。

「おお、これはひどい」

昨晚のプランBで俺はウインドボールに掴まるという凶行に出た。成功したから良かったものの本来ウインドボールは風の衝撃波で相手を吹っ飛ばす魔法だ。それに触れ続けるという

ことは衝撃波をくらい続けるということになるわけで。

「一見まるで病氣のようだ」

「わー気持ち悪いー」

素肌で触れていた腕の内側の部分が内出血の為青い斑点がアチラコチラに浮かび上がっていた。多少ましだろうが服の下にも何個かはあるだろう。だってすでに痛いんだもん。気持ち

悪いといいながらもフィリーがおもしろがって斑点をつついてくる。その嬉しそうな表情は傷心の俺への最高の妙薬ではあるが。

「ヒギイ！」

壮絶に痛いのだよフィリーさん。空手で打ち身などは数えれないほどしてきたが、これはそれの中でもひどい部類に入る。それが全身にあるのだ、一つの痛みが連鎖的に全身を駆け巡

る状態はさすがに苦悶せざるおえない。

「キャツキャ」

フィリーさんもしかして俺が痛がるのを見て喜んでる！？　いかん！　俺の癒し系妖精がDS系妖精に様変わりしてしまう！　俺は痛みを堪え立ち上がり、食事にしようと話を逸らした。

「ねえキドー」

「なんだいフィリー」

穏やかな笑顔でフィリーに振り向く。そんな仕草も激痛が走り、笑顔の反面服の中では冷や汗が吹き出していた。

「なんで傷薬飲まないの？」

「あ」

以前疲労回復薬なるものの作り方をフィリーに習ったと言ったと思うが、その他にも幾つか薬の作り方を習い実際に作り置きしてあるものが幾つかある。その中でも森の中で重宝した

傷薬。傷の治りをよくし、痛み止めの効果も持つ大変便利な薬だ。いやいや修行期間の前半にしか結局使う機会が無かったからすっかりしっかり忘れていた。

気合で宿の食堂まで降りて水をもらうと粉状になった傷薬を口に流しこむ。飲んで数分で痛みがかなりマシになり、まるで口ポットみたいな固い動きはしなくてもよくなった。走るの

はやばそうだが歩く程度なら問題なさそうだ。

しかもこの薬は効果抜群で血が流れるほどの切り傷も3日でふさがるほどの良薬だ。内出血程度なら3日で跡形も無くなっていることだろう。

「回復魔法が使えたらいいんだけどね」

傷を瞬く間に癒していく回復魔法なるものがあるらしいのだが、光属性の中級以上にしかないらしく今の俺ではとてもじゃないが使えない。なんでも神様に仕えて加護を受ければそれ

に属する魔法が割りと簡単に使えるようになるらしいが、正直この世界の神様がアレであつたため信仰する気はさらさら無い。

ないものねだりをしてても虚しいだけで、今は今朝の朝食への期待で胸をふくらませようじゃないか、痛さもましになったしね。そうして待っていると厨房のほうから食事を載せたお盆

がひとりでにこちらに向かって来るのが見えてきた。これは……お盆の下に何か居る!?

ゴトツとお盆が俺等の待つ机に置かれる。そしてその下から現れたのは。

「ハニワ?」

そう若干等身が短くデフォルトされているがまさにあの土で作られたハニワそのものだった。

「違うわよお客さん、それはミセスハニウエイトよ。家事専門型の自動人形^{ゴレム}だけど見るのは始めてかしら？」

「ああ、俺はこの街には昨日着いたばかりだし遠くから旅をしてきたもんでね」

「じゃあ後でもう一体のつがいなミスターハニエスがどこかで見れると思うから楽しみにしておくれ」

なるほどこいつは一応主婦型でもう一体旦那方のハニワがいるわけだな。たしかによく見るとエプロンを付けているし、なにやら少しだけ胸の膨らみがある。しかしハニワだ。

「どうしたのキドー？」

「いや、実にファンタジーで俺としては喜ばしいのだが、なぜか釈然としない部分もあるんだよねこれが」

だってハニワって和風じゃん！ デザインした奴出てこい！
考えても仕方ないので……なんか最近思考を投げ出している感じがいなめないが、異世界に来たんだ問題何てぶっちゃけ全部なんだ。いちいち考えていては切りがないので、まあいいや

で済ましておく。

朝食は実に満足のいくものだった。焼きたてのパンとカボチャっ

ばいスープに玉子焼き。そして見たことがない形状の野菜が色々入っていたサラダも実に美味しく頂けた。パン主体の

朝食としては満点ではないだろうか。昨日露天で食べた食べ物も軒並みおいしかったし、どうやら食文化はなかなか進んでいるらしい。メシマズの生活は元日本人としては耐えられないの

ではないかと心配していたので一安心だ。

さて俺としてはこのブローナスの街を拠点にしていきたいつもりなので午前中は街を散策という名目の観光をフィリーと一緒に行った。昨日は露天に並ぶ商店通りしか歩いていなかった

たので色んな発見や情報が次々と見つかって非常に楽しく有意義なものになった。

まずあのハニワシリーズは結構な場所で見つけることができた。どうやら単純労働力として人気なようで建物に入ると大体のところで使っていた。露天しか回っていなかった俺が見て

いなかったのも仕方ないな。あともっとでかいゴーレムも警備隊の

詰所らしきところに鎮座していたが、さすがにハニワではなくこつ
い人型だった。まったく動かないので兵隊さんに聞

いたら有事の際は動くらしい。あと警備兵さんが見回りの時に連れ
て歩いている探索型のハニワが兵隊さんの後を数体がトコトコ歩く
様子はなかなかの鼻血ものだったよ。

こつちにきて気付いたが俺はどうやら可愛い物に割りと目がない
らしい。もしかして子供好きもそこからきてるのか!?

そして昼飯を済ませて俺はかなり大きな商館の前に来ていた。服
装は午前うちに買った長袖のカッターシャツと皮のベスト、そし
て綿でできたつばい長ズボンに着替えていた。わざ

わざ着替えたのは目利きのできる商人さんにあのGパンとパーカー
を見せるのはまずいような気がしていたからだ。見た目に痛い腕の
痣を見せるわけにもいかないし、商談って格好でも

ないしね。

そう商談なのだ。

午前中に狼の皮だけはそれなりの商人に売りさばいたのだが、問
題の猿とか熊の売り物は扱いは難しいが金に成るのも確かだ。そこ
で俺が考えた答えは、この街で有名な商人に直接売

るといったものだった。有名で腕の立つ商人ならばこちらの秘密を
他に漏らすような信用を失って損をする真似はしないだろうし、値

段も正当な額で引き取ってくれるだろうと踏んだか

らだ。露天や宿屋のおばちゃんに聞きとった情報では、この街には五商家と呼ばれる国王認定のとても大きな商家があるらしい。その中でも評判が良くて手腕も確かなのは、傾きそくに

なった商家を僅かな期間で立て直した若手のホープ、ボライアズ家のジーニー・ボライアズのような。

そんなわけで現在ボライアズ家の前に到着しております。是非とも一度直接噂の彼に会ってみたかったので在宅中に訪ねようと思っていたが、偶然今日は家にいるはずだという事を小

耳に挟んでいざ即刻直談判ですよ。

「お待たせしました。ジーニー様がお会いになるそうです」

取次を頼んだ門番君が帰ってきた。こんな名も知らぬ一般市民に会うのかどうかなんて期待は薄いと心配だったが、門番君に持たせた売却リストに興味を持ってくれたようだ。目録は

傷薬などの材料になったフィラリア、ヌスス、ミラーゼという薬草を15束づつ。これもかなり希少らしいのでこっちに回した。後は猿の皮と爪セットが2と熊セットが1である。さす

がに有名な商人であっても熊や猿の商品を一気に売るのは危険だと判断して期間をおいてちよつとづつ売ることにした。目の前に崖が見えてるのに突っ込むのは単なる無謀ですから。

商館の中はかなり豪華な内装を想像していたのだが、あまり装飾に派手さは無かった。しかし色んな所にセンスを感じる配置や家具の数々にその手腕の高さが伺えた。

「いい仕事してますね」

商人の手腕なんてのは測れないが、物の良し悪しは存分に計れま
すぞ！ この匠の技が込められた家具を選ぶ商人が出来ない奴であ
るわけがない！ この色、ツヤ、芸術的な曲線、あ

あいいなあの椅子……いやあの机もなかなか……。

応接室に案内されて良質な家具にお花畑を咲かしてトリップして
いると一人の若者が入って来た。

「お待たせしました。私がジーニー・ボライアズで御座います」

俺に丁寧な礼をするジーニー。

「あ……ああ、ご丁寧にも」

若っ！ いやいや若いって聞いてたけどこれは予想外に若すぎる
！ 頭首ではまだないらしいけどその手腕と実績から、すでにそれ
と変わらない働きを見せてるらしいじゃん？ なの

に目の前にいる青年はたぶん俺よりちよい上の二十歳前後ってところ
だ。若すぎるだろ！ 街の人から褒めちぎられるような男だから
若いと言ってももっと上を想像してたわ！ というか

その若さで国で有数の頭首クラスってどんだけだよ！

と内心のツツコミを全力で隠しつつ挨拶を交わす俺。

「すみません。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「失礼致しました。私の名はキドーと申します。今日はよろしくお願いいたします」

フィリーによればキドウやマサシは、ちとこちらの言葉では発音しにくいらしいので普段はキドーと名乗ることにしている。

「いえいえこちらこそこんな若輩ものですがよろしく申し上げます」

はい、内心バレバレなんですな完全に。なんか怖くなってきたよ。

「それでは早速商品のほどを見せていただきたいのですが」

俺は持つてきた包みを机の上で開いて見せる。

「これはリコステの爪と皮ですでね……こちらのハッグベアーの皮なんて久しぶりに拝見しましたよ。おやこの薬草は……」

ひとり言をブツブツいいながら品物を鑑定していくジーニー。真剣なんだか目の輝きが半端ない……なんだかちよつと俺に似ているような気もしてきた、自分の分野に夢中になるって

所で。10分ほど時間を掛けて隅々まで鑑定し終えたのか長く息を吐いて姿勢を正すジーニー。俺の予想に反して薬草の鑑定に一番時間が掛かっていた。なにかまずいところでもあっただろうか。

「それではハッグベアーの皮が一万二千ディスクと爪が三千ディスク、リコステの皮が二千ディスクに爪が八百ディスク。あと各薬草がかなり良質でしたので少しおまけして千ディスク

で買い取らせて頂きたいと思います」

合わせまして二万千六百かふむ、高いな。日本円で216万円か……ばねえ。

「はい問題ありませんのでその価格で結構です」

さすがにこの金額を釣り上げる商売根性は持ち合わせてねえよ。

「ありがとうございます。付しましては一つお聞きしたいのですがよろしいでしょうか？」

やべえ！？　もしかして身元とか出所とか聞かれちゃう！？　この人なら聞かないと思ってここにきたのに――！！

「……何でしょうか？」

「この薬草の根を包んでいるものは何でしょうか？」

んん？　根を包む？　ああ草が枯れないように俺のなけなしのシヤツの袖を破って根っこを土ごと巻いて水を含ませてたやつね。おかげで俺はノースリーブのお兄さんに進化出来たぜ

、大事な服の袖を泣きながら破ったおかげでな。

「ああそれは　」

普通に答えそうになってあることを思いつく。この人程の方が態々俺に聞いてくるということは、もしかしてこの草を日持ちさせる

方法を知らないのでは？ 俺の婆ちゃんの園芸知識

からだからそこまで専門的な知識ではないはずだけど……。計算だけは早い俺の頭脳がそろばんをはじけさせる。

「さすがジーニー様。それに付きましても商談をしたいと思っただのですよ」

今思い付いたんだけどね。

「と、いいますと」

「これからその包みに関する話をさせて頂きますが、その詳細を買い取っていただきたいのです」

たぶん情報を買収取るなんて事は概念としても薄いだろうからこれはかなり部の悪い賭けだ。確率は低いがうまく行けばリターンはデカそうだ。

「ほう、話を買うというのはおもしろい事をおっしゃる。しかし聞いてもない話に値段付けられませんがるしいのですか？」

そうこの話は聞いてからしかその価値がわからない。なので聞いた後で金銭をジーニーさんが払わなくても何の問題も無いのが痛いところだ。

「はい、私が全てお話した後でジーニー様のご采配で値段を決めていただいて結構です」

「……………わかりました。お聞きしましょう」

さて、この若い商人さんの器はどれだけでかいのかな？

そして草の根を土ごと保存することで劣化を防ぐ方法の詳細を俺なりに詳しくジーニーに話し尽くす。ちなみに獵師であつた実家の秘伝だということにしておいた。

「素晴らしい」

まあ喰いつくよね。この方法なら取ってから10日は完全な状態で持ち運びできるからね。今までそれをしてこなかった環境だったのなら、これからの薬の質の平均がガラッと様変わりするだろうしね。

「実に有意義なお話を聞かせて頂きありがとうございました。つきましてはこの話の値段なんですが……」

敬語で取り繕った感謝ではなく、心からの感謝だと目を見て感じ取れた。まあこれだけ感謝の気持ち伝わって来ただけでも話した

価値は結構あるな。人に感謝されるのはこの世

界でも実に気持ちいい。

「20万デイクスでいかがでしょうか？」

「へ！？」

「ああ、お気に召しませんでしたか！？ それでは25万で！」

「ウェイ！？」

「ええ更に上！？ 仕方ありません28万でお願いします！！」

あまりの金額に言葉も出なくなり首だけカクンカクンと縦に降る俺。

「いやありがとうございます。キドー様とはこれからも長いお付き合いをさせて頂ければ大変ありがたいと思っております」

ここぞとばかりの輝くほどの営業スマイルを携えておれの右手を両手で握って握手を交わすジーニー。

すまん、見誤った。この御方の器のデカさはとんでもない大きさだったようだ。

度肝を抜かれて半分魂がはみ出た状態な俺だったが、あの後も話を詰めて俺は商館を後にした。

とりあえず28万デイクスはその金額が金額だけに銀行で受け渡しをすることになった。この世界にはしっかりと銀行制度がある。しかし俺は手続きも何もしていないので利用するこ

とはまだ出来ない。

持ち込んだ皮や薬草の代金だけ受け取り。そしてジーニーに話した薬草の保存方法は他には漏らさないことを契約書を作って約束し、そんでもっていつでもジーニー及びボライアズ家

の誰かと交渉できるようにこの商館への入館証をもらった。ただのペーパーの俺に対して破格の条件なんだろうことはジーニーのはしやぎようからなんとなくわかった。商才に乏しい俺

では、あの話でどんな儲け話が生まれるのか分からないが、彼にとつてはとんでもない価値があったらしい。

持ち込んだ品と話の価格を合わせて30万デイクス余りの現金を手にした俺。
どうしよう。

第五話 想定外デース（後書き）

価値観の違いとはいつの世も大きな実りと戦乱を呼んで来るものです。

第六話 どこにでもいるやつ

実りがありすぎて圧死しかけたボライアズ家からの帰り道、俺はなんとか理性を取り戻しホクホク顔で食事処や露天を練り歩いていた。

「フリーー今日は好きなお菓子なんでもおごってやるぞ！」

「ほんとに！？ イヤッホー！」

超甘党のフリーーはなんでもというワードに興奮して商品を決めるためあっちにフラフラこっちにフラフラしていた。俺もせっかくだから晩飯は豪華なところで食事しようと周りの店を

涎を堪えない状態になって見まわってる。なんという食欲という煩惱に弱いコンビなんだ俺らは……。

満足いくまで食べた俺らは宿への帰路についた。おみやげのお菓子まで買ったことに興奮してフリーーは俺の周りを飛び回り続けている。普通の人には見えないがもし見える人が男の

周りを妖精が跳び回る様子を目のあたりしたらどう思っただろうか。腰を抜かす？ 俺に詰め寄る？ それとも苦笑い？

明日は色々装備品とか物資調達に買い物に出かけますかな。いまだ魔法が不完全なおれでは有事の際に対応できない場面があるかも

しれない。そのための対応策は一応考えてあるので

武器屋か防具屋でもいつて検討してみよう。これだけ金があれば結構融通効くはずだしね。いやゝお金って大事！

そつえば銀行の口座も作らなきゃだめなんだよな。あんまりジーニーさんを待たせるのも悪いし宿の女将さんに聞いてみるかな。

順調すぎる未来図に浮かれて、まあなんだ俺は油断していたんだろうね。いいことあったから。

「ぶつからないように気を付けろよフィリー」

フィリーに注意を促した時、後方から俺に向かって注がれる視線に気がついた。危険と隣り合わせの森で過ごしていた俺は、気配というより敵意みたいなものに敏感になっていた。こ

のしせんはまさに獲物を狙う肉食獣のそれだ。だけどここは街中で俺が獲物に見えたとするならば。

「フィリーごめんな、ご機嫌などこ悪いけどさ俺等付けられてるみたい」

「えっ。あつほんとだねゝ顔の怖いお兄さんが三人ほどついてきてるよゝこの街つてああいうの多いよねゝ」

少し上空に上がって目視で確認するフィリー。おう三人もいるのかよ、聞き捨てられない話も飛び出したがまた今度にしてどうするか……。走ってまいちまうのも手だけど付きまとわ

れて宿の場所がバレるのも嫌だし、ほっておくには俺の主義に反するな。

宿には向かわず、むしろそれとは違う方向にしばらく歩き、薄暗い裏路地に入り込む。

「おつと兄ちゃんそこで止まりな」

周り込んだのかつけて来ていた男の一人が正面に立ちふさがる。こんな分かりやすい誘いに乗ってくるとは三流なのか俺を甘く見るのか、ってどっちも当てはまりそうだなこの駄目

さが溢れる顔からして。

「……なにか御用でしょうか？」

「あんた今日なかなかいい稼ぎがあつたんじゃねえか？ それを俺たちにも分けてほしくてよ」

むむ？ 稼いだことを知ってるってことはこいつらボライアズ家あたりから付けて来たのか、気が緩みすぎたる俺……………商館のあるあたりでほくほく顔ででかい硬貨入れをぶら下げ

てりや、アホでも儲かったってわかるだろうに。しかも今は町人風の一般市民的な服を着ている。悪党からすれば夜中に歩いている俺は丸々太った旨そうなブタさんに見えただろね。

「稼ぎたかったら汗水垂らして得たお金の方が気持ちよくつかえると思うけど」

「はっそんな馬鹿なことより、てめえみたいな間抜けから頂いちゃったほうが俺らは酒がうまくなるのさ！」

「ほほう。苦労してお金を稼ぐのが馬鹿ですか。そうですかそうですか」

どうやらこいつらは遠慮のいらぬゴミのようだ。今の発言にはピシリと眉間に来るものがありました。

「お断りします。てめえらみたいなクズに恵んでやる金は一ディクスも持ち合わせておりません。とっとと大人しくママのいるお家に帰ったらどうですか豚野郎」

すっごい見下した目線で挑発してやる。

「このガキほざきやがったな」

強盗どもは眼の色を変えて獲物を引きぬく。

「せいぜい悲鳴を上げて後悔するんだな！」

三人同時に俺に斬りかかる。もうほんとキレやすい最近の若者はこれだから困る。まあ俺のほうが確実に若いけど。

俺は振りかかるその手を正確に狙って拳を放つ。持っていた獲物が三つ飛んでいき、それぞれの指は見たこと無いような方向に曲がっていた。

「ぎゃあああああああああ」

痛みに絶叫するのはいいけどお前ら、なんで手を抑えるリアクシヨンがまったく同じなんだよ！ ゴウトウ倶楽部って呼んでやろうか！ 痩せ、丸、ごついと見た目もちよつと似てる

しな！

人が集まるのも困るので全員の顎を揺らして意識を断つ。すぐさま三人抱えていつも通りスタコラサッサですよ。

「こいつらなんだか汚いね」

ある意味では正解なんですけどフィリーって結構口悪いよね。

「さて確かこの辺に……いたいた」

じゃあこいつらを君たちのご主人様のところまで引きずっていつてね。

翌日、巡回に当たっていたワニワゴーレムが縄で括られ、額に「このひと泥棒です」と書かれた紙が貼られた三人組が運ばれてくる事件が起こったらしい。

ハニワ君って凄いね！

第六話 どこにでもあるやつ（後書き）

ハニワ回？

第七話 職人たちの晩餐

ものを言う事もできず大した戦闘力も持たないハニワゴーレムが強盗をしょつ引いてきた一件は、しばらくの間酒場とかの話題にはなったものの、結局俺のところまで辿り着く事は無

かった。目撃者が話もできないハニワでは無理もないし、あの小悪党ではあの暗い中で俺の顔をしっかりと見えていたとも思えないので大丈夫だとは思っていたんだけど。

翌日の朝、宿屋の女将さんに早速銀行の口座の開き方を聞いてみた。なんでも身分証明書みたいなものがあれば誰でもすぐに作れるらしい。

「おう。無いよそんなの」

「ならどこかのギルドに金を払って登録するといいいんじゃないかい？」

ギルドってたしか地球という総合協力組合みたいな？ 学校でいうなら委員会だな。ただ地球での団体よりこちらのほうが権限も強く、金をやり取りする額を大きいらしい。どうやら

そこへ登録すれば身分証明書のなものをくれるらしい。金には余裕

があるし、元から入るつもりでいたからこれは好都合だ。

「じゃあ生産ギルドに入りたいんで本部がどこか教えてもらえます？」

フィリーからの予備知識により大事なところはバツチリ覚えている。

「生産ギルド本部は西門のところからもうちょい北に行ったところにあるからここからは少し近いね。西門まで行ってそこの兵隊さんに聞いた方が早いとおもうよ」

「ありがとう女将さん」

「なにいいつてことよ」

この女将さんまじ男前！ 勿論ほめてますよ？

朝食を堪能した俺は生産ギルドにさっそく赴いた。フィリーはお菓子を食べ過ぎたのか俺の腰に付けたポーチで眠っている。この街の服には胸ポケットが付いていなかったため急遽買

わされたのだが、ゆくゆくはお気に入りの服には全部胸ポケットを付ける予定だ。

俺の胸ポケットからヒョコツと顔を出すフィリーはマジで鼻血も

んだからね！ 俺としても是非これは叶えておきたかった。

さて生産ギルドの本部に着いたわけなんだが、この街の建物はほとんどが石造りか木造の家がほとんどだ。そんな中ギルド本部は全面を黒鉄で覆ったとてつもない建物だった。

「要塞かつ！」

とツツコミながら中へと入場。中も外に負けないほどに鉄だらけ。粗相でもしたら地下に設置されてそう拷問部屋に案内されるんじゃないかっていうくらいなぜか圧迫感のある様相だった。

。

「ようこそ生産ギルドブローナス支部へようこそ！ 本日はどんな御用でしょうか？」

「ごく一般的な接客なのに建物のせいで今日はやけに眩しくみえるぜ。もしかしてこれが狙いか！？」

「えーと、新規の登録をお願いしたいのですが」

「はいありがとうございます。ギルド規約のほうはお知りでしょうか」

「いえ、説明お願いします」

なんでも階級が別れており最初は銅から始まるらしい、そして鉄、鋼、ミスリル、オリハルコンとランクアップしていくようだ。しかし義務として半年に一回査定が行われ実績及び成

果を一定以上示さないよランクが下がり、銅の状態で半年を過ごすと即除名になるらしい。

階級によって特典があるらしいがそれはあがってからでいいか。あとは製作依頼とか仕事の斡旋を回してくれることがあるらしいが、基本生産ギルドの面子は自分で仕事を探すのがほ

とんどでギルドから回される仕事はかなり特殊なものがほとんどらしい。しかし成功の際にはかなりの高評価が得られるらしい。

それにしても魔法鉱石ミスリルと神が人に与えたと言われる鉱石オリハルコンって実在するんだ。いつか手に入れてみたいものだ。というかこの世界は魔法があるし神様が実際にいる

わけで、なにやらちよいちよい干渉してるようなのでそれがあつてもそこまで不思議なことではないのかな。

「それでは登録料千ディクスとこちらの容器に少量の血を入れてくださいませ」

用意された針で指先を突いて容器に血を垂らす。なんだか血を垂らす所を美人のお姉さんに見られるのは、いけないことをしているようでなんだか恥ずかしい。

「では証明書となるカードを発効致しますが、作成にやや時間が掛かりますので明日改めて受け取りに来て下さい。それではキドー様のご活躍をご期待しております」

銀行の為に証明書が欲しかったのだがどうやら明日まではお預けのようだ。予定がなくなったので午後から行こうと思っていた武器屋へと足を延ばすことにする。ラッキーな事に武器

屋多い一角は生産ギルドに使い場所にあつたのでついでは都合がよかった。

「おじゃましてーす」

店の前に並べられた武具を見て品定めし、良さそうな店を見つけて入店する。

「いらっしやい。何をお求めですか？」

愛想良く迎えてくれた妙齡の女性。

「えーと武器とか防具を見にきたんですけど」

「どんな物をお使いに？」

「おれは拳闘を得意にしてるんで拳につけるナックルなんてのがいいですね」

ナックルはこっちでいえばヤンキー御用達のメリケンサックみたいなもんだな。

「ほう珍しい客が来たもんだ」

奥の方で無表情のまま本を読んでいた爺さんが会話に入ってきた。目付きが鋭いが見た感じおそらくこの人がここにある武具を作った鍛冶屋なんだろう。

「まさかそんな体で魔獣にまで拳闘で挑むつもりじゃあるまいな」

「そのつもりですけど？」

「ハンツそんな細腕じゃ殴った腕のほうが先に壊れるぞい」

カッチーンときた、職人さんには敬意を払うと決め手はいるがそこまで侮られては黙ってられない。

「昔気質の職人は武具を作る技量はあっても使い手の实力を見抜く目は持ち合わせていないんですね」

「抜かせ小僧が！ 過信をし過ぎると早死すると言っとるのだ！」

これは説得しないと売ってくれなさそうな空気だな。

「お義父さんお客さんにそんな喧嘩腰にならなくても」

「うるさいわい！ ワシが売った武器を使う奴がみつともなく死んでいくなど許せるものかよ」

いい志ではあるが、おれには傍迷惑な話でしかない。しかし個々の武具はかなりの良質で、予算的にも手が届くこの店で、是非武具なんかを手に入れたいし仕方ない、実演といきます

か。

「お姉さんこの紙ちよつと使っていい？」

「あらやだお姉さんだなんて。いいわよ一枚くらい」

40手前っぽい女性にお姉さんは無理があるかと思ったが効果は抜群だ。

「爺さんその閉じかけた目でよく見てな」

俺は紙を空に投げ出し構えを取る。胸の高さまで落ちてきたそれに貫手を放った。

「どうよ、これで信用はできたかい？」

落ちたその紙には俺の放った指一本の貫手によって穴が開いている。紙に穴を空けるのなんて子供でもできそうなことではあるが、宙に舞う紙は軽すぎるため空圧で飛んでしまいあた

っても破ることも難しい。それを俺は速さと鋭さを備えた貫手でど真ん中に丸く穴を開けて見せたのだ。力、速さ、そして技量を伴っていないとできない芸当である。

その紙をみて爺さん目を限界まで見開いてしばらく凝視していた。

「おんし何者だ？」

「そこは企業秘密です」

「なんのことかわからんが聞かれたくないのなら聞かんわい。だが確かに腕はあるようだ、わびを兼ねてどんな奴でも一個だけ半額にしてやるう」

この爺さんの職人としての意地はどうやら清く正しいらしいね。間違ったことを素直に認めて謝罪も忘れない。いい職人の必須条件ですぜ。

「じゃあさつきから気になってたこのナックルの右手側を一個下さ
い」

「なんでい左手には装備しないのかい？」

「はい右手は攻撃を左手はなるべく防御に回すため軽めの鉄甲をつけようかと」

「なるほど、悪くない選択肢だ。それならあの奥にあるのはどうだ。四肢を守る為の鉄甲と脚甲のセットだ。速さ重視の戦士の為のかなり軽量に気を割いて逸品だ」

左手の鉄甲を試しに付けてみる。手の上側だけに鉄をしつらえてあるそれはかなりの軽さながらその強度も期待できそうだ。脚甲も前面はプレート入だがその他は丈夫な皮で作られた

軽装だ。かなりいい感じだし、俺の希望していた条件ともピッタリと合う。いい仕事してますねー爺さん。

「じゃあ後はお前にあわせて調節するからちよつと待ってる」

返事も待たずにナックルと防具を抱えておくに引っ込んでいく爺さん。

「あ、値段聞いてない奥さんお幾らになりますか？」

「はい、ええつと全部で5千2百デイクスですね」

予想通りなかなかのお値段。しかしこの質でそれならばむしろ安いかもしれない。よし決めた！ 他の武具もここで全部買ってしまうおう。

「えつと他にも欲しい物があるんですけどこんなのでありますかね？」

爺さんが裏で金槌を鳴らす音を響かせる中で俺は奥さんと相談しながらさらに多くの品を買い上げることになった。

結局あの爺さんの店『ビート&ガッツ』で大量の買い物をした俺は大風呂敷で荷物を背負って宿屋に帰還中だ。なんだか最近背負ってばかりな気がするな。そのうち子泣き爺も背負う

んじゃないだろうか。いやいやそんなの想像したら背中中の荷物が重く感じてきた。

人通りの多い中央通りのテクテク歩いていると、またあの視線が向けられたかなり弱々しいそれだったのだがどうやらスリだったよううで俺の腰に下げた皮袋に伸ばされた手を掴みとつ

た。

「いやいや二日連続盗みに合うとか狙われすぎだろ俺」

呪われてる、もしくはとても間抜けな鴨にでも見えるんだろうか？ 視線も向けずに掴んだ犯人に体を向き直す、だが何だか違和感があるぞ。細さとか高さとか手触りとか。

「なにすんだよ！」

そこにいたのは盗人もとい小さな子供だった。

「人の物に手を出すのはいただけないな」

見るからにボロを来て顔もいつ洗ったのか分からないようなほど汚れている。そして何よりガリガリだ。いったいこいつの親は何を考えているんだ。

「うるせえ！ まだ触ってもいいいだろ」

「まあね」

暴れて逃げようとする少年を掴んだままやり取りしている中にグ
ウーという少年の腹の虫が鳴り響いた。

「なんだ腹が減ってるのか、俺も減ってたしついでだ少年、お前も
なんか食うか？」

「え？」

奇っ怪な物を見たような顔で俺を見つめる少年。ふっふっふ変人
と呼ばれた俺にはその目線は慣れすぎて何も感じねえよ。それもど
うかと思うのは無しにしてくれ悲しくなるから。

少年をそこらにそこらのベンチに座らせて露天から肉と野菜を挟
み込んだ大きなパンを二つ購入してくる。特製ソースが自慢の一品
らしいがそのソースの香りは俺の食欲をいつそう際

立たせていた。待たせている間に逃げるかと思っていた少年はちゃ
んとベンチに座っていた。どうやら周りの露天から匂う香ばしい香
りに食欲が勝てなかったらしい。帰ってきた時お腹

を抑えてこつちを睨みつけてきた。

なんだろう。待て！ お手！ ちゃん！ って言いたくなつて

来たけどこっちで通用するのかなこの話。

「ほれ出来たてホヤホヤだ、急いで食って喉詰まらせるなよ」

パンを受け取った少年は一瞬だけ悩み唾を飲み込んだ。まあ見も知らぬ他人から食べ物なんかもらったら疑うのが当たり前だよな。なかなかこいつはしっかりしているようだ。

五秒ほど悩んで意を決したのか少年は一心不乱にパンを貪り出した。見た目そうだな10歳くらいかな。歳のわりにはちょっとデカすぎるかなと思ったがこの調子だとあっさり完食で

きそうだ。

無言で食べる少年の横に俺も座ってパンを食べだす。うむ、この間に挟まれたソースはケチャップっぽいがかなり酸味が効いていて肉と抜群の相性を發揮している。露天で買った食い

物の中では一番の当たりだなこれ。

俺が食い終わって少年の方を見ていると下を向いたまま固まっていた。

「なんでだよ……」

「なにがだよ」

「なんでおれに食い物奢ったのか聞いてんだよ!」

少年の顔には涙を流した後が見れ取れた。あーなんだろうチクチクしてきた。

「お前腹がへって腹がへって仕方なかったから俺の金を盗もうとし

てたんだろ？」

「……そうだ」

「でも俺はさすがに全額取られるのは困るんだわ。だから間をとって晩飯を奢ることにしたわけだ」

少年に全力のドヤ顔を披露する。しかし少年はなんとも言えない表情をしていた。あつれーツツコミ待ちだったんですねー。

「ウザさが凄い」

フリーさんツツコミどうもー。

「わけわかんねえ……わけわかんねえよ………」

そりゃわからんだろう。だって思い付きだしね。

「ん？ パン全部食べなかったのか？」

てつきり完食したものと思っていたパンはその半分が少年の手の中にまだあった。

「これは帰って妹たちにやる……」

おいおいおいそんな劣悪な環境にまだ子供がいるのかよ。明日になったら殴り込みにいつてやろうか。

「オーケー分かった。だがそれは俺がお前にやったんだ全部お前が食え！」

「でもっ！」

「そのかわり」

俺は腰の革袋から中銀貨を一枚、百デイクスを少年に差し出す。

「これで土産でも買って帰ってやれ」

こういうのは偽善なんて呼ばれるんだろうね。自覚は無くはないが、見逃す選択肢はもつと無い。

何も言えなくなった少年はボロボロと泣きながら残ったパンを頬張り出した。

この時俺は今だ想像が追いついていなかったのだ。生まれた国が豊かすぎて平和ボケしていたのだろう。この世界の果てしない厳しさと理不尽さを、そして悪意持つ者たちの多さを

第八話 愛と影

あのボロを着た少年と少しだけ話しをして俺は宿に戻った。彼については思うところが多々あったが、何かあったらこの宿を訪ねて来いと言っているので大丈夫だろう。苦労したのか幼いくせにしっかりしてたからな。

「キドーってホント変わってるよねー」

「だがそれがいい」

「私も面白いからそれでいいけどね」

自他共に認める変人が妖精にも認定されたよ！ やったね……いややめとこう。

とりあえず今日買い込んだ物を自分の部屋の床に並べる。爺さんに調節してもらった意外のものは俺なりに改造して使うつもりでいるからだ。買ってきたのは皮で出来たポシエットと小さな手投げナイフ30本とそれを収める皮の入れ物10個だ。徒手空拳で戦いしかも魔術が不完全なおれではどこかでリーチのなさが問題に成ることがある。実際ヨルガの森のサーベルタイガーにはフィリーの援護無しで触れる位置まで距離を詰めることが出来なかった。

そこで投げナイフだ。森では石を投げて代用していたが、それが

鉄でしかも刃物であるナイフならば更に殺傷能力は上がるだろう。他にも色々応用が効きそうだし俺の肌にもあつてと思うので戦闘スタイルに取り入れてみる。

ポシエットは腰を一周して腰の位置に小さなカバンを固定するものだ。カバンといっても拳が丸々一つ入るほどの小ささなのだがそれが右側に設えてある。そこには武器屋で買ったナックルを収納しておく予定だ。定位置に設置しておけば手をつまむだけで装備が完了するという手早さはなかなか魅力的だ。

次にポシエットの皮と同質のもので出来たナイフを頑丈な糸で五つ一組で斜めにして組み合わせていく。皮加工は社会見学で一回だけ体験した事がある程度だったが、繋ぎ合わせるだけならなんとかなるだろうというよくわからない自信で行っていた。まっ結局成功したんですね。そしてお次にそれをポシエットの腰巻の後ろにあたる部分に金具を使って固定していく。そして左側のスペースには細い筒が入るように皮を6箇所追加してそこへ買ってきた小さな試験管のようなガラスの筒を指し込む。試験管の中身はフリー直伝の水で溶いたものを入れる予定だ。疲労回復、傷薬に解毒薬を二本ずつだな。そんでもってその腰巻には更にズボンのベルトとも連結出来るように金具を追加して完成だ。

「できたー！ー！」

作業に集中していた為に時間の経過をかなり無視していたらしい。喉がカラッカラに成っていたので机に置いておいた水を飲み干す。

「ぷっはー！ 作業の後のこの一杯」

昔からおっさん臭いとかよく怒られた恒例行事だが、この時に飲む水はどんな飲み物よりもうまいんだから仕方ない。

「おーおー」

夢中で作業する俺を黙々と見つめていたフェリーが完成した俺式ホルスター（収納するのは銃ではなくナックルだが）を近くによつて輝く瞳で観察している。期待の眼差しに答えるために早速自分の腰に装着してみる。しつかり固定されているかチェックしてみるのがどうやら問題は無さそうだ。

「よしよし、一から作ったわけじゃないがこっちに来て作った作品第一号だな」

ヨルガの森で壁やらベッドは作ったが俺的プライドにかけてあれは作品と呼べるものでは断じて無い。

ここまで言えばわかるだろうがつまり俺は必要な装備を手を使わずに収める場所を皮のポシェットを改造して作ったわけだな。これに鉄甲と脚甲を装備すれば第一段階としては完成だ。本当はホルスターの前部分にも付けたい物があつたのだがそれは後日にする。

もちろん第一段階なのだから第二段階もあるがその完成は大分先になるだろう。今のところ目処すら立っていないわけだしね。

「それにしても……」

鉄甲と脚甲、ホルスターを装備し武器も全て設置した状態で部屋に用意された鏡の前で自身の姿を確認する。

「……………いい」

特撮ヒーローというよりはどつちかというところと忍者だがその姿は大いに俺を悦ばせてくれる。

「うれしそうだね、キドー」

「おう！ フィリーに会えた次ぐらいに今感動しているぞー！」

俺はしばらく色々なポーズをとったりしてニコニコ顔で動作チェックを繰り返す。今の状態を他人に見られたら俺はこの街を出ないといけないかもしれないくらい恥ずかしい様相だったが今は完成の喜びが上回っているので考えどもやめられない。

だいたい十分ほど鏡の前に立った頃には既にフィリーが目を擦ってオネムの状態に成っていた。もうそんな時間か、確かに外からの音も全く聞こえなくなってきたな。

この世界に来て最も困った事は時計が無いことだ。太陽とか星とかを観察すれば大まかな時間がわかるのだが室内ではまるでそれがわからないのだ。

いい感じに疲労したし俺も眠ろうと装備を外そうとしたその時、宿屋の階段を駆け上がりこちらへと走ってくる音が廊下から聞こえ出した。襲撃！？ とっさにナツクルを装備してドアへ構えを取る俺。

「兄ちゃん！ 助けてくれ！」

ドアを開けて現れたのは昼間に泣きながらパンを食っていたあの少年だった。

騒ぎに飛び出してきた女将さんに事情を説明して謝り、取り乱す少年リッキーをなんとか落ち着かせた。少年の話を聞いて俺は愕然としてしまった。

俺はてつきり家庭内暴力、そんな程度の問題だと思っていた。あななんて甘い、なんて大馬鹿鹿野郎なんだ俺は。

彼はストリートチルドレン。親も家族も家もなくその日その日を路上で暮らす孤児だったのだ。一人でなんとか生きてきた彼は最近ストリートチルドレンが集まって暮らす集団に仲間入りしたらしく、妹達といったのは彼の年下の女の子のことらしい。彼等にとっては共に生きるのは家族同然の信頼関係があるのかもしれない。

俺に100デイクスを貰った少年はありったけの食料を買い込んで仲間の待つ場所に帰ったらしい。うまい飯を腹いっぱい食べたことと、彼等にはこれ程嬉しいことはなかった。もちろん仲間たちは大いに喜んで食べ物に飛びついて食べていった。その嬉しさのあまり一時はお祭り状態になった。

そんな騒ぎを彼等の住むスラム街のボスが通りかかった。大量の食料を食べる子供たちを見て彼はこう言った。

「ほう今日は大漁だったらしいな。なら三ヶ月たまつてる場所代を払ってもらおうか糞餓鬼ども」

なんでも彼等がボ口家に不法滞在しているのを黙つといてやる替りに毎月スリなどで稼いだ金の一部を払わされていた。しかし三ヶ月前に一人の女の子が病気を患ってしまったためその金は滞納してしまっていたらしい。

「違うんだ！ これは貰ったものなんだ！ 本当なんだよ！ だからおれが稼いだ金じゃないんだ」

スリで稼いだ金じゃないんならそのボスの取り決めには違反してはいないので当然の言い訳だろう。

「ああん？ 誰がてめえらみてえな汚いガキにこんだけの食いもん恵んでくれるやつがいるんだよ！？ それに百歩譲ってそうだとしたてもその金をオレ様に献上しない理由はないだろうがっ！！ なめてんのかテメエ！！」

ボスに近寄り懇願していたリッキーは殴り飛ばされてしまう。それを見て一人の少女がリッキーに駆け寄る。

「まあいいや。予定より少し早いが攫っちまうか」

ボスが指を鳴らすと周りからゴロツキが十人以上現れた。

「あなた最初から私たちを売るつもりだったのね！」

リッキーを介抱していた少女がボスに言葉で噛み付く。

「相変わらず乞食の癖に頭がよろしいなトウカ。この俺が態々警備兵に金を握らしてまでお前らを庇ってやるわけねーだろー」

がよ。やつとお前らを奴隷として売る算段がついたんだ。しつかり今までの恩をたつぷりの金にして俺に返してくれよ？」

トウ力と呼ばれた少女にボスが手を伸ばしたがそれを少女は全力ではねのける。

「触らないでこの外道！ あんたに触られるくらいならここで舌を嚙んで死んでやります」

「そんなこというなよつねえな」

今度は油断なくトウ力の襟首を掴んで片手で持ち上げるボス。

「おんやゝお前今までそのなげえ髪と顔の傷で気づかなかったがなかなかいいモン持つてんじゃねえか。湯浴みでもして綺麗に着飾れば美人になるぜ。そうだ今夜は俺の相手をしてくれよ、最近色々溜まって困ってるんだよ」

その時トウ力は舌を突き出して嚙み切るために口を開ききる。

「おつと死ぬのはいいが、さつき殴ったガキの確かゝリツキー？ だったか、お前が寂しくないようにあいつも一緒に道連れにしてやるがそれでも死ぬか？ それにお相手してくれるなら一人くらいは見逃してやつてもいいんだぜ？」

宙吊りになりながら増える少女。

「あんたは地獄すら生温いわ！」

「商談成立だな。野郎ども一人残らずかつ攫え！！！」

そこで気絶したリッキーは次に目覚めた時は奴らのアジトに連れ込まれる寸前で、自分はどうかやら気絶していた為拘束されずに肩に抱えられていたので、必死にもがいて逃げ出し、ここまで一心不乱に走って来たのだ。

「もう兄ちゃんしか、兄ちゃんしかいないんだ。警備隊のやつはグルだし俺たちみたいな乞食なんて騎士が助けてくれるわけない。むしろ居なくなれば清々するだろうさ。でも……でもアイツらはおれにやっとできた家族なんだ！ 仲間なんだ！ 頼むよ……頼むよ兄……ちゃん……俺なんでも……するから……死んだって構わない……だから……たすけてください」

俺は泣き崩れるリッキーを抱きしめる。

「よくここに来た。よく逃げ出してきた。お前は偉い、本当に偉いぞリッキー」

頭を撫でてやると体の強張が解けていった。

「後は任せとけ。愛を守って悪を砕くのがおれの役目だからな」

立ち上がり用意してあった赤いバンダナを頭に巻く。ああ力が溢れてくる、まるで尽きることはない無限の如く。

「フリー」

「わかってるよ。付いて行けばいいんでしょ」

「いや君はここにいてリッキーを守ってくれ」

「……一人で平気なの？」

「大丈夫さ今夜の俺は誰にも負けない」

力が体の外にまで溢れ出して空気が揺れているような気がした。

「わかったよ。お土産期待して待ってるわ」

本当に今日彼に会えてよかった。本当に今日装備が整っていてよかった。本当に彼がここまで辿り着けてよかった。

不謹慎だがこれは幸運、運命かもれない。心の底から感謝してやるよ神様方。

今日俺は成りたい俺になる。そう正義のヒーローに俺はなる。

第八話外伝 トウカの覚悟と叫び

私はトウカ。１１歳の頃、理由もわからずに親に捨てられてストリートチルドレンになった。絶望と理不尽への憎しみに苛まれて消えてしまいそうになった私ではあったのだけれど生存本能ってやつは思ったよりも強くて、気が付けばご飯を探して街を彷徨うストリートチルドレンの仲間入りを果たしていた。

最初の一年は本当に酷かった。私が女で乞食って知った悪人顔の男が私を狙って拐かそうとするなんて日常茶飯事で、ほんとうにこの寸前までいったことも結構あった。だけど幸か不幸か、結局私はなんとか変態どもの手から逃れる事に成功して生きていた。

ある雨の日、例によって私は男に襲われ命からがら逃げ出して下水の入り口で座り込んでいた。

「なんで……なんで私ばかりこんな目に………」

夜には泣かない日の方が少なかった。そして憔悴しきった私は本当に心が折れてしまいそうになっていた。終わらない飢餓感、安寧のない暗闇、襲い来る欲望に汚れた手。一人の人間の心を砕いてしまうにはどれ一つとっても十分なものだと思うわ。

「寒いよ……誰か助けて……」

自らの命を断つ事を思考に浮かべ出した私が聞いた声は下水の奥から聞こえてきた。

まるで私自身の気持ちを代弁したその声の主を探すため私はヨロヨロと立ち上がって下水の奥へと進んでいった。そこで見たものは闇で覆ってしまった私の心を見事なまでに打ち砕いた。

私と同じストリートチルドレンだというのは人目で分かった。で

もそこにいた彼女は私より遙かに年下、六歳ほどしかない少女だったのだ。なぜかさつきまで弱音を吐いていた自分がン情け無くて下唇を噛み締めていた。

ついさつきまでは私は世界で一番私が不幸で恵まれていないと思っていた。そして恨んでもいた。なぜ誰も助けてくれないの？　な　　んで私はこうなってしまったの、と。だが今出会った少女は同じ環境に六歳の身で過ごしている。

それがどれだけ辛い事か、どれだけの恐怖に怯えて暮らしていたのかを私は想像することが出来なかった。だけど既に骨と皮だけのよう　　に痩せてしまった体がその壮絶さを私に物語っていた。私は普通であつた頃の知識を使つてなんとか生き延びている。だけどこの子は……。

「大丈夫、大丈夫よ」

別に何かを考えたわけじゃなかったけど、自然と体が動いていた。

「私があなたを守つてあげるから」

きつと私と似ていたから、暗闇の底に囚われた私たちには助けという光が必要だった事を知っていたから。

誰も助けてはくれない世界。絶望がどれだけ恐ろしいのかを知っている私だったから。

だから決めたんだ。私が助けようつて。世界中の人が私を助けて

くれなくつても私が誰かを助けようつて。

それが私なりのささやかな世界への復讐だったのか、それとも希望だったのかは自分でもまだ分かってはいない。

私は街にいた子供達を集めることから始めた。一人が弱々しくても一つになれば少しはマシになるはずだ。それに私たちには誰かの助けが必要だったから。

歳の小さな子はすぐに合流したけれど、大きな男の子達は反発する子が多かった。理由はその目を見れば直ぐに分かったしまった。信用できないのだ。騙し騙され、裏切ることでなんとか生きてきた子には「助け合おう」なんて言葉は一番信じれない言葉だったと思う。分かるわよ、私だってそうだったから。

だからこそ無理強いはずに根気良く説得し続けたわ、話を信用してもらおう前にまず私を信じてもらうために。私がどれだけ本気なのか知ってもらうために。

一年もかかっちゃったけど私はなんとか街中のストリートチルドレンを集めることができた。総数で34名の大所帯になったのは驚いたし、何より15歳になった私が最年長っぽいというのがすごく意外だった。

集めたのも私なら引っぱって行かなきゃならないのもどうやら私のようで。心に決めた決意はさらに強みを増していった。彼等彼女等を守る為には私が居なきゃいけない。信頼を預けてもらったんだ、最後まで責任をもたなきゃだね。

だから私は人であつたころの最後の嬉しかった思い出を消すことにしたんだ。

今だに私を狙う男は少なくなつたけども居なくはない。そいつらから狙われなくなるために私はボサボサに伸びた髪を留めていた紐を解き、捨てられる前に父様にかわいいと褒めて貰った顔に傷を付けたのだ。家族になれた子達を守る為ならなんだって喜んで差し出すわよ。

その日から私を狙う男は居なくなつた。

相変わらず苦しくてひもじい日々ではあったけどなんとか一人も欠ける事無く一年を過ごす事ができた。きつとこれは順調だと私は胸を撫で下ろしていた。でもそんな安堵は悪意によって叩き壊された。

突然スラム街のボスが私たち全員を売りさばくために攫ってしまったのだ。

そして今、私はボスの無情な条件を飲み込んで守り続けた貞操を引換にたった一人だけを救える契約を果たそうとしていた。5年ぶりに湯浴みをし、破れていない綺麗な服に袖を通す。本当ならば喜ぶべきことのはずなのに私の心は死んでしまったように動かなくなってしまった。

やっと……やっと小さいけれど幸せを感じれるようになっていたのに、笑顔で誰かに笑えるようになったのに、助けることが出来たと思ったのに。

男たちの集まる部屋へと私は足を踏み入れる。一番嫌いだった肉欲の目線を全身に浴びたがそれでも私の心は揺れもなかった。

「へっへっへ、見る俺の目は確かだったろう？　ほんともうちょい肉を付けて傷を隠せば超が付いてもいい上玉だぜこりゃ！」

私が守ってきたものを全て奪う男が自慢気に語る様を見て私は憎

しみの目で睨んで見せた。死にかけた心が最後に選んだ心の形が憎しみだったのは残念だったけど。でも終わり。ここで終わり。決意で闇を切り裂いたつもりだったのに、私の心はまた絶望に沈んでしまう。次こそ耐えられないだろう。私の心は粉々に砕けてしまう。でもっ。もう自分の意志で動かせないでいる体に一滴だけ残った心を注いで唇を動かす。

「タ……ス……ケ………テ」

絶望に飲み込まれるその中で、それでも私は手を伸ばして天を仰いだ。

誰も助けってくれないと思っても願わざる負えなかった心の叫びを叶える者が天から舞い降り、最後まで諦めなかった彼女に奇跡を与えた。

第九話 正義の鉄拳

リッキーに聞いていたアジトは直ぐに見つかった。荒廃したスラム街にそびえる旧ナーブ教会。しかもきっちり強面の見張りまで立たせているんだ目立ち過ぎにも程がある。そしてそこまできた俺は最後の装備を装着する。鼻と輪郭を隠すマスクのような鉄の仮面だ。仮面と言っても目は見えているし、口も影になってはいるが少しは見える構造だ。これは露天に売っているのを一目見た瞬間に衝動買いしてしまったものだ。せつかなので改造して顔に装着できるようにしていた。これで完全に見た目は忍者ルックそのものである。別に狙ったわけではない。気に入ってはいるけど。

さて作戦はどうする？

誘導？ 一人じゃ無理。

ちよつとずつ奇襲？ 時間がかかり過ぎる。

人質だけ救出？ 30人超えは敵しすぎ。

ならば？

「悪党に小細工無用！ 正面突破あるのみよ！！」

小細工も嫌いじゃありませんけどねー！

隣の建物の屋上に上り全力疾走。そんなもって建物に見えます大きなガラス窓に向かって全力ジャーーーーーーンプ！

ガラスを見事に突き破り着地に成功！ つとしまった！？ 今の大ジャンプで窓を壊す時はヒーローらしくキックにするべきだったか！？ 次の為の課題にしとくか。

「デメエ！ フザケてんのか！！！」

どうやら敵の集まる広場のド真ん中に降り立ったらしい。これは

ラッキー。おや？ この目の前にいる女性は……顔に傷があつて16歳くらいでうつすら赤くて長い髪……。

「もしかしてトウカさんでしょうか？」

「はっはい！」

なんだ、この麗しの生物は……。

「しばしお待ちを。あなたを蝕む闇を今から掃除しますゆえ」

うむ我ながらキザすぎた。いつの間にこんな齒の浮く台詞を言えるようになったんだ俺？ 初ヒーローで興奮しすぎたか？

謎が残るが取り敢えずはまず悪党退治だ。おれはボスが座りそうな椅子に座る汚い野郎に体を向ける。

「ええつとここのボス、名前はたしかゲ……ゲ………ゲロ？」

「ゲイロスだ糞野郎！」

「一応一回だけ警告してやる。いまから一切合切の犯罪行為をやめる。そんでもって明日からは真っ当に働くなら見逃してやってもいいが、どうする？」

「はああ！？ 貴様頭いかれてやがるのか！？ この人数相手にてめえ一人でどこに見逃す要素があるんだよ！」

「まあ了承するなんて思つてはいなかったさ。お前ら性根の底まで糞みたいだからな」

騒ぎを聞きつけて他の野郎も姿を見せ始める。

「ほざいてやがね。じゃあ俺様からも聞いてやるよ。今から泣いて命乞いをするなら両手で勘弁してやるぞ?」

「ん？人数は百人くらいか」

「残念だったな！ もっと少ないと思ったかあ！？ ゲイロス様を作った組織は巨大で無慈悲な極悪集団なのよ！」

「ああ実に残念だ。千人くらい居るかと思つて来たが、がっかりだよ」

喋り終わった瞬間一番近くにいた二人に自分でも見えないほどの速さの突きを放つ。かなりの巨体だったが見事に吹っ飛び体の半分くらいが壁に埋まってその勢いはやっと止まった。

「警告は終わった。生きるか死ぬかは運次第」

腹に全身の力を溜めて解き放つ。

「だがてめえら外道に手加減する気なんて一切ねえから覚悟しやがれえええええ！！！！！！！！！！」

建物が震えるほどの大声で宣戦布告に近い死刑宣言をかましてやる。全力で叫んだのはこっちにきて始めてだった。がこれもすごいわ。遠目に見える窓ガラスにひびがはいってやんの。

殺気を隠すことをやめた俺は全力で攻撃を繰り返すしていく。突進しながら正拳突き、そこから隣へ回し蹴り、着地と共に前蹴りを放ち、再び目標に駆け寄っていく。凶悪な攻撃が次々に悪党どもを

壁へ天井へ地面へとめり込ませていく。

「ハッハ！ 自慢するだけはあつて鍛えてるじゃないか！ なかなかいい殴り心地だ！」

びっくりすることにこいつらはハッグベアー並の耐久力を誇っていた。ほぼ全力で殴つても手や足は簡単にひしゃげたが体を突き抜けずに耐えていた。ただし衝撃を殺せずにはほとんどが吹っ飛んで無残な結果に陥っているわけだが。流石に皆殺しにする気は無かったのでナツクルは装備してはいない。それでも生きてるかどうかは怪しいところだろうけど。

開戦して僅か三分でその人数が半分まで減ったクソツタレ共。阿鼻叫喚の地獄絵図になりつつあったがどうやらボスゲロが指揮した部隊が隊列を整えていた。

「なんだあんた名ばかりのボスじゃないんだな」

ちよつと感心。

「うるせえこの化物が！ これで死んでしまえ！」

どうやらボスゲロが集めた野郎どもは魔法の使い手だったようで六人ほどがファイヤーボールを俺に向かって放ってくる。避けるのは簡単だが装備というか奥の手の試運転には丁度いい。俺は腰に挿したナイフに手を添える。

「『ウォーターコート』」

コートシリーズは今まで出た魔法とはまた系統が違う付加魔法だ。物体にその魔法の効果を与えるつてのが単純な説明だが、ウォータ

「コートを含みにナイフに付加させると水でコーティングされたナイフが出来上がるわけだ。魔法の面白い現象として、なぜか使用者には生み出した魔法の影響を及ぼさないことだ。水に包まれたナイフなのに俺は水に濡れることなくナイフが掴めるし、火であつた場合も熱くもないし燃え移ったりもしない。服は燃えたり、濡れたりするだろうと思うが、そこまで魔力を流しておけば大丈夫のようだ。

威力が無いなら足せばいい。筋力だけは有り余り、投擲の威力はかなりの物だったのでそれを魔法に応用して相手の魔術のぶつける。無駄に魔力のこもった俺の魔法は威力こそ上がりはしないもののやたらと頑丈なんだそう。つまり同じ威力の魔法に当たった場合

「相手の魔術が先に壊れる」

「ぎゃああああああああ」

しかもボールシリーズの魔法は直線で飛ばすのがオーソドックス。ナイフを魔法に向かって投げればその向こうの術師に当たるのは必然なわけだ。

まあ精度がまだいまいちなんで術師にまで当たったのは3人だけだ。しかしこれはスプラッタ。腕やら肩がすっ飛んでいる。これは付加魔法がすごいのか、ナイフがすごいのか判断に困るところだな。要実験だな。今ので最低でも隙を作り出せる算段だったのか中級魔術を構築しようとしていた奴がいたのでそいつの足には直接ナイフをお見舞いしておいた。結構な深手を負わせたので、痛みで集中力を保つことはできなくなつたろう。

「うわあああ。あああああああああ。ちくしょう畜生。そうだお前その女、なかなか美人だろ？ そいつをやるから手を引か

ねえか。なんならもつと美人の奴隷を何人だつて攫つて来てやるさ。なんならお前の好みの女でも構わないぞ」

ああこいつホントに俺の神経を逆撫でさせるのがうまい。

「今決めた、お前は間違いなく最後に殺す」

俺は逃げようとするものから攻撃を加えて行動不能にしていく。運悪く死んだ奴がいるかもしれないが知ったことではない。ボスゲ口の一言で更に容赦なく攻撃を開始した俺は残り殆どを始末した。

「ハアハアハア、さて……残りはお前だけだな」

流石にこれだけの数を捌くのは疲れるな。息が切れるなんてのはこの世界に来てからはなかなか無かった現象だ。

あえて最後まで残したボスゲ口はガタガタ震えながら腰が抜けているみたいだ。さあどんな恐怖をさらに刻んでやろうか。なんて吟味していると後方から新手が出現する。

「動くな化物。お前この女の知り合いか何かだな？ 最初なんかしゃべってたろお前」

新手と言ったのは訂正、どうやら余りの恐怖に気絶して倒れていた奴が復活したようだ。男はトウ力を羽交い絞めにして捉えていた。

「動いたらどうなるんだ？」

「見りゃわかんたろ！ こいつの命がどうな

」

男が言い終わる前におれは渾身の速度で右の突きを放ち、その指をトウカに突きつけられたナイフに引っ掛ける。それを引きつつ、驚いている男の顎へと手刀を放った。脳を激しく揺さぶられて男は、紐が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「すまん。怖い思いさせちまったな」

「いえ、ありがとうございます」

「じゃあもうちょっとで終わるから部屋の隅のほうで待ってて」

「……はい」

いい度胸してるよ実際。人間離れた戦う俺を目の前にして物怖じ一つ見せないなんて。

今にもションベン漏らしそうなボスゲロに見習わしてやりたいぜ。

「さてどうやって死にたい？」

「ひひひひひ来るな来るなああああああああああああ」

ゆっくりとした足取りでボスゲロへと近づいていく。

「頼む許してくれえ。金ならいくらでもやるから、なっ？」

「もう薄々気付いてんだろ？ 俺は悪は許さんが別に殺しがしたいわけじゃない。なのに俺が殺気を抑えきれない理由は

」

ボスの襟首を掴んで片手で持ち上げる。

「お前が俺を怒らしたからだ」

そのままボスを壁に投げつける。それを追って接近して俺が放つのは一本指貫手。それで足と腕の神経がある部分を突き刺し四肢の自由を奪う。

「があああああああああ」

「どれだけの人を不幸にした？」

続いてわかりやすく血が出る頭部を手刀で僅かに切り裂く。飛び出るように流れだす血液。

「ああ、あああああ」

「どれだけの人生を狂わせた？」

さらに手刀で右腕を吹っ飛ばす。

「はひやあああああ、たす……たひゅへへ」

「お前がばら蒔いた絶望、そっくりそのまま返してやるよ」

止めはその目によく見えるようになるべくゆっくりと正拳突きを

放った。最高に嫌な感触を残して種族人間、性別男、スラム街のボスであったボスゲロはこの世から消えた。

金の玉を殴り潰すなんて嫌すぎる経験をしてしまった。なんだか自分のも痛い気が……。

第九話 正義の鉄拳（後書き）

仮面ラ イダー的に言つとまだショックカーしか出てない感じ。

第十話 オーハレルヤ

大乱闘スマッシュヒーローズを開催した後、捕まっていた子供たちと一緒に捕まっていた何名かを解放して俺たちはアジトを脱出した。帰り道にまだボスゲロの一味がリックを探すためかうろついていたが速攻でぶん殴って眠らしておいた。

40人弱に膨れ上がった大所帯をどうするもんか困ったのだが、取り敢えずリック達が滞在していた廃屋に留まることにした。

そうだ、話を進める前に説明しなくちゃならないことがあった。

前回傍若無人に全力で暴れまわった俺に対して「この鬼畜！」とか「やりすぎだろ！」とか感じた人が多くいたんじゃないかと思う。

たしかに誘拐が初犯だった場合ぶつコロはやり過ぎだとは俺も思う。個人的には子供を攫ったその時点で万死に値するが。しかしおれはブローナスに入ってからというもの情報収集には余念が無い。主に常識を身につけるために、だったのだが。物価とか国の情勢、噂話しに最近あった出来事に今の流行。取り敢えず思いつく限りの話題を色んな人から聞き出す事をこの三日間費やしてきた。

そんな中でも悪い噂が問題だ。それを全体で10としたら8がゲイロス一味に関しての黒い噂だった。しかも話される事件はほとんど別件で、その裏や実行犯がゲイロス一味に違いないというものだった。札付きの悪の集団なら、こんな憶測の飛ぶ噂の一つや二つはあるようなもののだが、いくつかといってもかなりの数だがどう考えてもゲイロス一味の仕業とは思えないものが多々あったのだ。

場合によっては目撃情報まで飛び出してきた。

ここまであればそれを知るものはなんとなく気付くだろうさ。警備兵がグルなのではないかと。俺の推測ではもっと上にも共犯者がいそうだが。

そしてゲイロス一味の悪行は殺し、誘拐、強盗に強姦。酷いので一家虐殺なんてのもあった。ここまでやって共通の容疑者になっているのにもかかわらずゲイロスは世にのさばっていたようだ。

ぶっちゃけリックに頼まれるまえからおれの悪人ノートには第一筆頭になっていたので、遅かれ早かれ同じような結末になっていたはずだ。

殺した罪悪感？ その質問良く聞くよね。でもさ、俺から言わせれば救いようのない悪人に、欲望で人を食い散らかすような奴に殺意を抱かない。そっちの方がどうかとおもうぜ？ もちろん殺しに嫌悪感はある。でもそれを天秤にかける重さが圧倒的に悪を許さない事の方が重いつてだけなのさ。

今回は……たぶん死んではないと思う。結構おもいきり殴ってしまった時もあったので瀕死なのは確かだが。皆殺しなんて選択肢も無くも無かったりもしちゃったりしちゃったんだが、まあ生きて捕まった方が後々役に立つ時もあるとおもふのさ。余罪が追求されれば間違い無く絞首刑だろうけどね。

さて困った。そろそろ夜が明けるのだろっ、東の空が白い光がさしだしてきた。もしかしたら危険がまだ残ってるかも知れない懸念から、朝まで子供たちと一緒したのだが。……距離が遠い。

まあね！ まあね！ 物騒な格好に、今だにマスクは外さずにいる完全な不審者スタイルだし、おまけに色んなとこ血まみれだしね！

「お、やっとご出勤か」

逃げ出した時に一緒に捕らえられていた女性や男の人は俺と同じくらいの歳だった。その人達には警備隊の詰所に行ってもらい事情を説明してもらったことになったのだ。グルの警備兵のところに駆け込んで嫌な結果になりそうだったんでそれぞれ別の詰所に駆け込んでもらった。指示を託して送り出してから大体三時間は経ってやっと警備兵らしき多数の足音がスラム街に聞こえ出した。おっせー。時間の目安はもちろん俺の腹時計である。

「さて、それでは俺はこれで」

子供たちをなだめていたトウカが去ろうとする俺に急いで駆け寄ってくる。

「あ、あのありがとうございました。本当にあなたは命の……いえ心の恩人です」

「いや……勝手にやったことだ気に

」

朝日が上り建物の隙間から光の筋が溢れ出す。その光がトウカを照らし出しその見に纏った白いドレスを煌びやかに輝かせていた。衝撃。そうこれはまるで始めて特撮ヒーローものを見た時に匹敵する衝撃だった。

なぜならその幻想的で美しい光景よりも彼女の目に宿る輝きの方が優っていたからだ。

なぜそうしたのかは分からない、もしかしたら正気を失っていたのかもしれない。俺はマスクを取り外した。

「俺はキドーと言います。改めてあなたのお名前を聞いてもいいだろうか？」

「えっ？ あっはい！ 私はトウカといいます」

ヒーローを見た時の衝撃で俺は歓喜の渦に飲まれた。そして今もそれに似た歓喜に包まれている。しかし熱い力が漲るわけでもなく、震えるわけでもなく、俺は涙を流していた。そして力なく膝をトウカの前で地面へと付け跪いて手をトウカに差し伸べた。

「いきなりですまないと思う。でももう俺には止められないんだ。

どうか俺の愛を君に送らせてもらえないだろうか？」

心の中では感動の反面、嘘だろっ！？ と叫んでいるほどに自分でも信じられなかった。恋愛のレの字にも興味が無かったし、可愛いや美人だなという感覚こそあれど異性としての意識なんかしたこともなかったのに。いや確かに惚れましたともさ！ 認めましょうそこは。でも俺は自分的に理性ある人間で自制心の強い男だともってましたよ！ この時までではな！！

「.....え？ え？ へえ！？」

ドン引きなんですわかります。私もドン引きです。長い長い、本当に長い沈黙。凍りつく空気。混乱と未体験のプレッシャーで死んでしまいそうです。

「……はい」

トウカは指し伸ばした手を握り返してくれた。

「……」

「……」

目と目が合う　　ってマジかよ！？　混乱したまま取ってしまった行動の結末が自分でも信じられなくて信じられなくて信じられなくて頭が真っ白になって固まる俺。そんな空白の脳裏に浮かんだのは。

（血濡れの戦士が純白の姫に誓いを立てる……か。絵にしたらい価値がつきそうだ）

なぜか現実逃避の末、魂が抜けて第三者視点でその情景を見ている、という設定の感想だった。

第十話 オーハレルヤ（後書き）

主人公は変人に見えるアホですね。努力家と言う名前の猪突猛進でもあります。

第十話外伝 オデットの眩き

私はプロニアス騎士団が一つ紅玉の騎士団副団長オデット・ポレヴァンヌ。若くして栄えある騎士団の重役に任命されている。普通ならありえないことなのだが、貴族が幅を利かせるこの国に置いてもそれらを優遇する気が欠片もない事でも有名なほどに我が騎士団は実力主義の塊だ。そんな事をすれば疎まれて妨害や嫌がらせの嵐にあい、場合によっては人事すら上からの命令に従わされる事になりかねない。しかし我が騎士団の団長を動かせる者はこの国には国王様以外には存在せず、国王様も団長に全幅の信頼を置いているためにその自由奔放な意思は例外として扱われている。

どうやら戦の才能があつた私は、その団長に師事されたお陰でここまで駆け上がる事ができた。その役職における責任を果たすために、私は警備隊の戦闘指導を連日行っていた。はつきり言つて我が騎士団に比べればこの北西区の警備兵は素人同然で、まるで教い甲斐がない。やる気はそこまで無かつた指導ではあつたが、それも明日で終了する。そんな事を思いながら警備隊の宿舎で就寝していると、外がざわめく音で目が覚める。

「何事ですか？」

素早く身を整えて下で装備を着込んでいる警備隊の一員に声をかける。寝起きだから少し機嫌が悪かつたのだろっ、若干ではあるが威圧するような態度な私に隊員は萎縮しながら答えだした。

「突発的な大捕物が始まるらしいので、北西区の警備隊は全員出動のことです」

全員出動しなければならぬ大捕物とは初めて聞くな。……面白

い。この連日飽き飽きしていたところだし、指導の成果を確認するにも丁度良い。私達も見学と洒落こませてもらおうか。

問題の場所は大捕物が行われる修羅場というよりも、まるで野戦病棟の様だった。警備隊が通報されて急いで人数を集めて踏み込んだ時にはすでに悪党一味はほとんどが瀕死の状態で転がっていたらしい。今は応急処置のために兵とかき集められた治療師が奮闘中であつた。

私達騎士団は基本的に国防と大規模な魔獣討伐などが主な任務で街の治安については警備隊に一任していた。おかげで治安や犯罪に関する情報はあまり知る所ではなく、側にいた警備隊の隊長格をひっ捕まえて状況報告と事情説明にあたらせる。

「……不可解過ぎる事が多い話だな」

「はい……まさかこの人数を誇るゲイロス一味が一夜のうちに壊滅するとは……」

「そんなレベルではないがな……」

殲滅された云々の話しどころか、このゲイロス一味に関わる資料

そのものが不可解な部分だらけだったが、その場では呟くだけに留めておいた。まずはこの惨状を誰が起こしたかを探るのが先だ。

中へと入り、最も被害が多かった中央広場へと踏み入る。元神殿を悪党どもが根城にするとは度し難い話である。だからこそその天罰が下ったのかもしれないが。

「意識を取り戻した者からの話では、信じられない事に100名からの一味を壊滅させたのはたった一人の人物だったそうです」

なんでもその戦力の高さゆえにこの一味へは迂闊に手出しできなかったと汚らしい言い訳していたが、戦力自体は本当に高いのである。ろく事は倒れていた男たちの体つきを見れば分かる。しかし、この人数を相手取る事が出来る、いわば怪物呼ばわりされる類の人物は私を知るかぎりでもかなりいる。もちろん私自身もその内の一人だという自負はある。

「……………さらに信じられない話なんです」

「言ってみろ」

「相手は素手だったそうです」

「魔法師なのか？」

「いえ、補助的に使っただけです。がまさに拳で戦っていたようです」

訂正する。この人数の武器持つ相手に徒手空拳で魔法もほとんど使わずに圧倒することは私には無理だ。おまけに、これは予測ではあるが首謀者は手加減をしている。本当にギリギリ助かった者もい

たが、結局死人は出ていないのがいい証拠だ。皆殺しで良いのであれば魔法を使えば私にも殲滅は可能だが……。

とにかくこんな芸当が出来るものなど国内には片手で数えるほどしかない。私の師匠である団長の仕業か？　とも一瞬脳裏をよぎった。天然かつ生粋の女好きの団長のお気に入りを目にでもあわしたのなら考えられない事だ……。實力としても、素手どころか裸であろうと三分もかからず仕留めるだろう。他の規格外の者達も同様に性格や行動原理が飛び出ているので、気まぐれでこの状況を作ったというのは有り得なくは無い話だ。

だが。

「容疑者は探すな。そしてその容疑者の情報の一切を隊員に口止めしておけ」

「え！？　いいのですか！？」

「こんな規格外をプロニアスの敵にするつもりかお前は？」

「い、いえ……」

心当たりのある者たちは全てあらゆる方面の超が付く重要人物達だ。悪党をのした事で彼等を法で裁こうものならどんな問題が発生するか考えるだけで頭が痛くなる。もしもうちの団長だった場合であれば国が割れかねない。そして警備隊から取って寄越したゲイロス一味に関する資料を見る限り明らかに国の一部と結託していると思われる、確実にこちらに落ち度があるのは直ぐに明白になるだろう。後ほど私の部下を配置して洗い出しておくが、だからこそあまり表沙汰にはしたくない。

重い気持ちを口から吐き出して下を見ると、なにやら手投げナイフが地面に突き刺さっている。その刃の先には紙が留められている。

「『悪よ闇を恐れよ　我はシャドーフィスト　悪の天敵なり』」

それを読んで私ははっとした。まったく思いもしていなかった可能性を思い付いてしまったからだ。この惨状を作り出した者が私、いやいまだ世に知られていない者だという可能性だ。

なぜなら私の知る者たちは気まぐれでこのような事態をしでかすことはあっても、確固たる意思に基づいた理由を持って勧善懲悪を行うものなどいなかったからだ。もちろん断定などできはしない。この紙をその本人が書いた確証もないし、可能性は限りなく低い。規格外の者たちの誰かが心変わりして正義に目覚めたという場合もある。

だが私はなぜか期待、いや僅かな願望を抱いていた。

「シャドーフィスト……フッフッフいつか会ってみたいものだ」

期待を胸にして、その紙を私は胸へとしまい込む。謎の事件として処理させ有耶無耶にしまった事件であったが、一つだけゲイロス一味を壊滅させたのはシャドーフィストと名乗る者だという噂だけを街中に流してやったのは好意の表れでもあり、ある意味挑戦状でもあった。

第一話 幸せ家族計画

なんだろうこれ、足元がおぼつかない。幸せすぎて体が浮いているようだ…………。

というノロケからスタートのみんなのヒーロー木堂です。

あの後血まみれの装備を取り敢えず外して布に包んで警備兵の目を掻い潜って宿屋に帰還。帰ってきた俺を見て安堵したのかリッキーは俺に抱きついて泣き叫んでいる。よしよしもう心配ないからな、だから落ち着け。おれの服が鼻水だらけになってすでに腹に直接感触が伝わってるんだよ！

泣きじゃくるリッキーをなんとかだめて落ち着かせる。心配のため一晩中緊張していた糸が切れたのか立っているにも関わらず、リッキーの頭がユラユラと宙を彷徨い出した。まだ年端もいかないうちが全力疾走した上で徹夜していたのだ、眠気の限界に来てても仕方がないだろう。むしろよくここまで頑張れたと感心してしまった。すでに半目になって意識朦朧とするリッキーを俺のベッドに運んで寝かしつける。

さて俺は急いでこの宿を出る準備に取り掛かる。理由としては色々あるのだが、なによりも昨日のリッキーが駆け込んできた騒ぎで

俺の装備の一部を見られてしまっているのが大きい。ヒーローで在り続ける為には正体不明をなるべく守らなくては。

なぜここまで俺の戦闘力を隠しなるべく目立たないように計らっているのかという疑問をお持ちだろう。これは俺の尊敬するヒーローの一人である蝙蝠男さんから学んだことで「人は目に見えぬものを恐れる」なんだそうさ。要は正体がバレればそっち方面の人に四六時中狙われるだろうし、下手をすれば周りにまで被害が及ぶ。さらに正体を隠しつつ正義を名乗ることで悪党にプレッシャーを与える事ができる。闇から人を脅かす物がさらなる闇から逆に足を引っ張られるのだ、さぞ怖かるう。

「お帰りキドー」

用意をしていると欠伸をしながらフィリーが起きてきた。護衛を任したのにがつつり熟睡していたようだが、それでもフィリーは俺より格段に危機察知能力が高い。たとえ寝ていても危険が迫れば直ぐに感じ取って起きれるのだ。ヨルガの森では大変お世話になった。

「お土産は？」

「喜べ今日は大漁だ」

準備を終えるとまず朝飯を取り、女将さんに宿を出ることを告げる。一週間予定で前払いしていたが手間賃として残りの分は貰ってもらった。そしてまず生産ギルドに行き証明カードを受理する。なんか色々言われたり絡まれそうになったが華麗にスルー。忙しいんだ今度にしてくれ。

そんでもってボライアズ家に訪れジーニーさんに予定を聞く。ちょうど午前中は開いていたらしいので銀行での手続きをしてもらう。口座を開くだけならいいのだが、そんな開いたばかりの人が28万という大金をいきなり得るというのは理由を聞かれかねない。そこでしっかりジーニーさんから受け取ったという確認をもらった方がいい、とジーニーさんが助言してもらっていたからだ。

こちらがなるべく目立ちたくないという事への配慮だろう。ほんとこのひと出来る人だわ。まああの時、もしあの話が世間に広まりだしても俺の名は出さずにジーニーさんが考え付いた事にしといてって言ったしね。

「それでは28万デイクス確かに納めさして頂きました」

どうやら国に属した証明である市民カードがギルド証明カードは銀行カードの替りになるようでカードさえあれば金銭のやり取りができるらしい。もちろん盗難防止のため登録者本人にしか使えないそうだ。

「また何かありましたら是非我がボライアズ商家をご利用ください」

「あつ早速それじゃあいいですか？　今回は販売じゃなく単純に相談なんですけど？」

「はいもちろん。キドー様には大変有意義な商談をさせて頂きまし

たので」

「それじゃ

」

結局頼みごとになってしまった相談を終えた俺は次に商店に向かい手で引く荷車を購入。武具の購入で更に増えた俺の荷物は街中ではさすがに背負うわけにはいかない。荷車を買った雑貨屋で力仕事兼雑用係のゴーレム、ミスターハニエスをお勧めされてかなり心を揺らしたが今は金が入り様なのでぐつと我慢した。宿へと帰宅した頃には昼前といったところだ。

「おい、起きろリッキー起きろゝ家に帰りますよゝ」

「むゝ」

寝起き悪いのかこいつ？

「フー」

必殺桃色吐息！ 耳に優しく息を吹きかけることで相手は死ぬ！
いやびつくりするだけだね。

「ひよわあああああああああああああああああああああああ

ああああああ

書いて字の如く飛び起きる。50センチは浮いたか？　どうやら耳は弱点のようだった。今度から起きなかつたら攻撃してやろう。耳への衝撃と見慣れない場所で起きたためか部屋の隅に張り付いてキヨロキヨロをあたりを見回している。……………涙目で戸惑う姿はなんかこう……くるものがあるな。

「ほれ家族の元に帰るんだろ？」

手を伸ばしてリッキーを起き上がらせる。

荷車の余ったスペースへできるだけ多くの食料を買い込む。調理器具がないので出来合いの物を色々買ってみた。

「いやーお待たせお待たせ」

荷物を引いて俺はリッキー達の一応の家である廃屋へとたどり着いた。

「リッキー！」

「みんな！！！！……トウカ？」

いち早くこちらに気付いたトウカがリッキーに駆け寄っていくが、
なんだかリッキーが戸惑っている。

「私よりリッキー！ トウカよ」

おいしい。

「トウカってそんなに美人だったんだ」

おっと惚れるなよ？ それはおれんだ。

感動の熱い抱擁を交わす子供たち。でも34人の抱擁は多いよ！
なんだか胴上げの光景を思い出す。

「リッキーがキドー様を呼んできてくれたのね！？ こんなにも強い人がリッキーの知り合いにいたなんて」

「ええ！？ 兄ちゃんがゲドロスぶっ倒したの！？」

やっべ。なにも事情を説明してなかったなそつえば。

買ってきたお昼ごはんを食べながら積もる話に華を咲かせる。リッキーは俺がどれだけ優しくかったかを語り、トウカは俺がどれだけ

強かったかを語った。俺はというと拍手喝采、英雄伝のように口々に褒められてそこにあまりの気恥ずかしさを空の雲を数えて耐え忍んでいた。

「あの雲はイカに見えるな」

褒められる事は今まで無くも無かったが、ここまで感情むき出しで喜ばれるというのはなんだかむず痒い。

「それでキドー様はこんなにも荷物を持ってどうしてここへ？」

やっと話題が途切れた。それにしても様付けとかその呼び方は背中が痒いよトウ力ちゃん。地球でも君とか、さん付けだって恥ずかしかったのに。

「様付けは恥ずかしいんでやめてくれるとありがたい、気軽にキドーでいいよ。ここに来たのはまだ心配だったのとリッキーを送るため、それと」

「キドー殿――キドー殿はこちらに居らっしゃいますかー!？」

「俺もここに住もうと思ってね」

さあここからはじめようじゃないか、俺の幸せ家族計画を！

第一話 幸せ家族計画（後書き）

英文を日本語に直訳するととんでもない物になることってよくあるよね。

第二話 家と鍋と箱と笑顔

廃屋に俺を呼ぶ声を響かせていたのはジーニーさんの執事である、セバスチャンさんだ。セバスチャンは俺命名だぞ？ 本名知らないしね。さすがに執事でセバスチャンとか無いよ。

ありきたりすぎるわ！ でもこれの呼び名ってどこからきたんだろ
うね。

「キドー殿、こちらがご注文の権利書になりますぞ」

執事の爺ちゃんが持った封筒を受け取る。

「なんか予定よりも大分安くないですか？」

「そこは我が主の説得の賜物です」

説得という名の値切りなんですね。でも予定額から3割も引いてくるとか不動産屋は泣いてるんじゃないだろうか。

「ご心配せずともふっかけられた分を見破って正々堂々買い上げた
ものですから」

流石の手腕だ。これから俺の心の中では『流石のジーニー』と呼ぶことにしよう。値段を確認してカードから金銭をやり取りする。

「それと主から「いつかお茶で一緒にしましょう」と受けたわって
ございます」

「ありがとう。近々顔を出すって言つといて」

なんだか気に入られたな！。今のところ信用できそうだからいいけど。丁寧にお辞儀をしたセバスチャンは馬車に乗って帰っていった。

「あのー何をお買いになつたんですか？」

まだ敬語はやめられないらしい。ていうかストリートチルドレンのわりにはえらく教養あるよねトウカって。

「この場所、君たちの家の正式な権利書さ」

「え……」

「俺もここに住もうと思ってね」

俺が買ったのはリックやトウカ達が住んでいた廃屋とその土地である。廃屋はなんとか屋根が見て取れるが壁が崩れ、一部はすでに斜めに傾いている。建物の価値としてまったくの0

なので金銭的には土地の値段だ。これはかなり広く60×40メートルの敷地だ。立地としては一番端の方と言ってもスラム街にあるので価値が低くなるとは思ったが10万デイクスは

すると予想していたんだけど。

「六万八千デイクスカあやつすいなあ」

このちよつとした公園レベルの広さがこの値段が……いやこれが常識的なものかもしれない。日本は特別土地の値段が高かったから余計に感じる。

手に入れた廃屋と敷地を見つめながら今後の予定を組み上げていく。取り敢えずあの廃屋がどこまで使えるかの点検と調査が必要だな。庭だったらしき広場も今では頭の高さまで伸び

た雑草で埋め尽くされているので刈り取らなきゃ。

「あの」

いきなり不法占拠していた土地を買い上げて一緒に住む宣言をした俺に呆気にとられて沈黙したままの子供を代表してトウ力が質問してきた。

「これを聞いてしまうのはきつと失礼な事なんでしょうけどあえて聞きます……なぜここまでしてくれるんですか？」

まあ戸惑って当たり前か。俺だってちよつとびっくりしているんだけどね、自分の行動力に。

「……俺は君が大切にしているものも大切にしたいと思ったんだ。

理由はそれで十分だ」

嘘偽りない本心なんですけど俺もあえて言おう！ クッサーー
—————！！！！ 自分で言っただけで一瞬
毛穴が三倍は広がった。なんとか自然な仕草で話す

ための集中力で百メートル全力疾走したくらいの体力が消耗された
よ！

でも顔を赤くして俯くトウカの姿を見れたからよしとしよう。う
む、大変良し！

「リッキー、リッキーおいでおいでー」

「おれはイヌか！」

あっているんだ犬。いやだって飯を食う仕草とか表情とか見てたら
ねえ。初めて見た時から思っていました。

「わかってる範囲でいいから家の中を案内してくれ」

「お、おう」

午後からの時間を全部使って有意義な廃屋の調査は完了した。時
間がかり過ぎて辺りが真っ暗になってしまった。街中なら幾らか
の灯りがあったものの、このスラム街はほとんど無

い。

「『ライトボール』」

ボールシリーズで唯一攻撃できない光魔法。そして最も簡単な魔法でもある。明るさを持った光の玉を頭の上に浮かべてみんなのところに戻る。

帰ってきたらみんなの視線は俺の荷台に釘付けになっていた。ああお腹がすいたのね。子供たちの興味の大半は食べ物に向いているだろうしな。環境的な意味でも本能的な意味でも。

「よしじゃあお兄さん頑張って晩ご飯作っちゃうぞ」

買っておいた大きな鍋を荷台から取り出す。中には野菜と肉が入っている。俺はそこまで料理はうまくはない、そこそこといった所だ。だから大漁簡単でおいしいパンに合う料理とい

えばシテユーでしょ。

「『ストーンウォール』」

ウォールシリーズはその名の如く壁を創りだす防御魔法だ。出力をかなり弱めて膝下ほどの石の壁を創りだす。俺はそれを三枚出して簡易のかまどを作り上げる。俺の無駄に注がれた

ストーンウォールなら一時間は余裕でもつだろう。そして薪を組み上げて出力最低にしてファイヤーボールで点火する。包丁で野菜と肉を切って鍋で若干炒め、そしてウォータボールを

そつと鍋にいれる。

「キドーって魔法も使えるんだね」

ランランと輝く目で料理風景を眺めるリツキー。てか全員近いよ！
危ないからちょっと下がってね。

聞いていてお気づきだろうがここで魔法について解説しよう。魔法は出力の調整ができる。ただし上限が決まっており出来るのは弱める事だけだ。それを利用してマジッククッキン

グをしてみせたのだ。さらに魔法で作った石や水などはその込められた魔力の密度に比例してしばらく経つと粒子状になって宙に消えてしまう。しかしだ、火の魔法で付いた木の火は消

えないし、少しだけ加工を加えれば水も消えなくなる。ウォーターボールの水は純粹に水だが、例えばそれに砂糖を加えれば砂糖水になる。なぜか出した時の状態から変化を全てに加え

ると世界に定着して消えなくなるらしい。出力の調整はイメージの問題で、魔力を注ぎ過ぎな俺だがその力の強弱には関係性は無いらしい。

なぜそうなるのかって？ 知らん！ そういうのはもっと偉い人に聞いて下さい！ 魔法初心者なめんなよ！ あれだあれ、その時不思議な事が起こった！ だよ、それでいいだろ。

鍋に入れた水が煮立ち火が通った後、塩コショウと宿の女将から教えてもらった調味料を加えて完成だ。更に主食に買ってきてあるフランスパンのような長いパンをを輪切りにして火

で炙る。フランスパンといってもその太さは首より太い一切れでもなかなかの大きさになる。

全員にシテューの入った皿を配り、大きなバスケットに焼いたパンを入れて配置完了！

「それではみなさんいただきまーす」

返答は無し。

「それは何の掛け声なんですか？」

おっとついテンションが上がって日本の挨拶を使ってしまった。

「これは俺の生まれた国の食事をする前の挨拶で食べ物を生み出した自然への感謝をあらわす為にするっていわれてる。最初にいただきます、最後にごちそうさまで一組の挨拶だ」

たしかそんな感じだったはず。当たり前のようにやってきたから詳細な話は忘れた。

「それはいいですね。普通は信仰する神に祈りを捧げるんですけど

私達はどの神の信仰していませんからね。じゃあみんないただきま
すってキドーさんに感謝して食べましようか」

いやいや自然に感謝だからね!?

「「「「いただきまーす」「」」」」

はい感謝されましたー。たくさんあるからおかわりもありますよ
ー。

「ねえキドー。もしかしてお土産ってこの子たちのことなの?」

「いまさら気付いたのかフィリー」

「ほんと変だよねキドーって。お土産までありえない」

「それこそ今更だぜ」

最高に決めたドヤ顔を向けたフィリーはクスクスと笑って俺のポ
ケットに入って眠っていった。

次の日、朝から全員の体を水洗いするところから始まった。敷地内にあった井戸が幸運にもまだ使えたので紐に水桶を付けて利用してもらった。リッキーやヤンチャ坊主のトマス、無口な

がら面倒見の良い少女のユーリにひよる長優男のロイなどの年長組に面倒を任せて俺とトウ力は空にした荷車を引いて街にくり出した。べっべつにデートだなんて思ってなんかいいんだ

からね。確かに胸は高なったけど。

買い物描写は省略して昼に差し掛かる前に自宅へと荷車に山のよきな荷物を引いて帰還する俺。背負ったり引いたり背負ったり引いたり、俺は馬か！　なんて思ってみたりなんかして

。

「はいそれでは身長順に並んでくださーい」

トウ力の指示で順番に並んでいく子供たち。サプライズを兼ねてトウ力以外には何をするのかは伝えていない。ニヤニヤするのを我慢出来ないでいる俺とトウ力は、荷車に積んできた

箱をそれぞれ一人に一個づつ目の前に置いていく。箱は膝くらいに高さがある正方形のなかなかに大きな箱だ。

「それでは合図で箱を一斉に開けましょう」

トウカが指揮して全員が箱に手をかける。

「いっせーのーで！」

懐かしい掛け声だ！？　なぜに地球と同じ掛け声が……いや違うな、これはナーブに貰った特典で脳内で自動変換してるな。

「うおおおおお」

「わあああああ」

「あわわわわわ」

「ふおー！ー！！」

歓声の中に奇声が聞こえた気がするがあえてつつこまない。喜ぶ人へのツッコミなど無粋の極み。

箱に入っているのは全員分の服と靴だ。上の服とズボン、そして下着のセットが5。靴は一足つつ見繕ってある。大きさはトウカに選んでもらったがあとで俺が調節してやろうと思う

てる。

あまりに興奮しすぎた男の子がその場で着替えようとしたのをトマスがゲンコツで止めていたほどにみんな喜んでくれているようだ。無理もないだろうとは思ふよ。全員服はボロボロ

で一着しか持ってなかったし、足なんて裸足だった。みんなを引っ張って来たというトウカだって服選びをしている時の全身から溢れ出る輝きは凄まじかった。

「うんうんやっぱり子供はこうでなくっちゃ」

「どうしたんですか？ キドーさん」

「ここに一緒に住むといった理由の一つに俺は無類の子供好きなんだ。そもでもって勝手なことかもしれないけど俺は子供は笑っているべきだと思ってる。だから笑ってない子供をみる

と無性に笑わせなくなるんだよね」

やっぱり子供は笑顔が一番だ！ 異論は断じて認めない！

「はい」

でも俺の一番はトウカの笑顔だけだな！ 一万デイクス払ったかいがあるぜその笑顔には。よろこぶ子供たちを尻目に人生最大の勇気を振り絞ってトウカの手を握る。

「……フフ」

それに優しく笑ってみせたトウカは手を繋いだまま、はしゃぐ子供たちを俺と一緒にしばらく一緒に眺めていてくれた。

「……」

正直動悸がヤバ過ぎて心臓止まりそうでした。

第三話 リフォームリフォーム

三十五人家族になって二日目も無事終了。なんだか人数を言葉にしてみるとんでもないな、それを養っていくと言いだしたんだからなおさらだ。

そして朝飯を頂いた庭では元気を取り戻した子供がフィリーと遊んでいた。初日の夜にフィリーにこいつらとは家族になったことを説明してからは二日目の夜まで沈黙したままだったのだが、今日の朝になって。

「キドーの家族ならいいよね。許可します」

と言って急に子供たち全員がフィリーを認識できるようにして、朝食を食べる俺らの前で自己紹介を始めたのだ。神様関連のことはごまかしてくれたが妖精が人に憑いてるなんてのはとんでもないことらしいので、その挨拶を見た俺は朝飯を吹き出しかけた。

しかし世間からある意味はずれた子供たちは「ヘー」とか「すごい」なんて感想で終わってしまった。そして子供の持つ適応能力を発揮して朝飯が終わったそばから一緒に遊び出したのだ。

ブローナスに来てからは慌ただしくて俺と遊ぶ機会が少なくなっていたフィリーは子供たちと同じくらい楽しそうにしていたので、俺としてもこれでいいかな。いやかなり良かったね。

食後の休憩を終えて俺は気合を入れて立ち上がった。せっかう買

った男性の夢の一つであるマイホームだ、このまま廃屋ではちよつとまずいし嫌だ。今でも多少の雨なら防げそうだが嵐がきでもしたら崩れてしまいそうな勢いだ。

昨日は広い空間で全員でブランケットだけ被って雑魚寝した。起きた時におれを枕替わりにした奴が6人もいて大変だった。あれはあれで楽しいがいつまでもこのままというわけにはいけない。

それにこんなボロ屋に住むというのも職人のプライド的な意味でもいただけない。

幸いな事に家は主な部分の柱や土台は石造りになっていて朽ちた木の壁を取り替えれば充分住めそうなのだ。傾いた部分は流石に専門知識が要りそうだが応急処置だけなら俺でもできそうだ。

自分の家を自分で作るってのは男にとってはなんとも心躍る響きではないだろうか？ 少なくとも俺はこの計画を立てた時から興奮で胸が高鳴りつぱなしだ。早速木材屋から資材を調達してマイホームを改造せねば！

木材と大工道具一式を荷車に買い込んでミスターハニエスに引いてもらう俺。釈明しておくが決して我慢できなくなつてハニワを買ってしまったわけではない。これから家を作るといふ労働作業とか予定している力仕事は今の栄養失調気味に衰弱している子供たちに手伝ってもらうのはとてもじゃないが無理がある。かといってやつ

ぱり人手は欲しいわけで、かといってあんまり関わる人を無闇に増やすのも問題がありそうな気もする。わざわざこれだけの人数のストリートチルドレンを養おうとしている俺はこの世間では変人どころか狂人扱いだろうと予想されるからだ。１７歳の成年が三四人もの人を養うとか言い出したら地球でだって頭おかしいんじゃないかと俺でも思う。やりたいと思っても出来ないのが普通なのだが、今の俺は普通とは程遠い存在になっているのでそことはまあいいだろう。

そこで単純労働力であり絶対に情報が漏れない運搬担当のミスターハニエスと家事担当のミセスハニーウェイトを二組購入した。買ってびつくりしたがなんと同型でもそれぞれデザインに若干の違いがある。店員さん曰く開発者の趣味らしい。作品に対しての愛を感じるぜ。

土というか頑丈な陶器っぽい材質で出来たこいつがなんで動くのか分からない。分かっているのはこいつの燃料は魔力ってことだ。大体一般の成人が持つ魔力一日分で半日ほど動くそうだ。魔法は下手だが魔力の量だけはい俺には四体同時に一日中動かすくらいの魔力を与えても何の問題もない。いつかこいつらの構造とかを学んでみたいものだな。

「リッキー！ トマス！ ロイ！ 手伝ってくれ」

子供たちの中の男年長組だけは手伝ってもらう。彼等はすでにかなり血色が良くなっている。もちろん俺の作った飯で回復してはいるが二日で六食いや今日の朝飯を合わせて七食程度で直ぐに長年の

不摂生な体が回復するわけではない。実はスープやらシチューなどの水物には栄養剤でもある疲労回復剤を混ぜてあるのだ。枯れたスポンジのようになってしまっていた子供たちも一週間服用を続ければ健康児までは全員いけないうちもかもしれないが、力を取り戻すくらいはできるはずだ。

ちなみにこの三人は二日目の朝には既に走り回るほど元気になっていた。いやー若いね！

「はい」

「おうよー！」

「ちょっとまって」

手伝うといっても近くに置いた道具屋釘を取ってもらっただけなんだが、将来を考えて作業を見てもらうのは彼等の為になるんじゃないかと思つての判断だ。いずれは元気になった人から順次手伝いを増やすつもりだ。

さてまずはみんなの寢床からだな。その次は風呂、そう風呂だ！

この世界には湯浴み場は合つてもどうやら風呂という文化そのものがないらしい。うかつに地球での文化や知識の持ち込みは目立つという危険が伴うとは思つが自分の家で使う分にはいいだろう。もしもバレたらジーニーさんに薬草の時みたいに売り込んでみよう。

一週間経過。なんとか寝床の床と壁、そして天井の修復を完了した。なんとも早く終わったが、そもそも建築構造の知識は少しあったのでちよつとアレンジして直ぐに出来た。ただそれでも一ヶ月は掛ると俺も思ってたんだが、なんとミスターハニエスの説明書きに釘打ち可能という文字を発見した。場所さえ指定すればハニエス二体が次々に釘を打ってくれたので作業効率が段違いにアップした。しかも見た目からは想像できないくらいに器用さがあって、俺より釘打ちがうまかった。お礼に一体にはハチマキを巻いてハツピを着せてあげて、もう一体には付け髭をプレゼントした。そして建築をするのにすごく便利なものがあったのだ。それは隙間などを埋める粘土なのだが、これがアスファルト程ではないが固まるとかなりの硬さをほこり、しかも通気性、保温性、耐久性にも優れている品で、木の板と板の間に挟んで乾かせば直ぐに壁が完成出来たのだ。最近の開発されたもので今の建築物にはほとんど全てに使われているようだ。

更に強度を上げるための俺的工夫も施した。生産ギルドを通して幅一センチほどの長い鉄の棒を発注して、その粘土を埋め込む場所に部屋の四角い形に対して斜めに固定して配置した。現代建築によくある補強の構造ではあるが、この時代としては抜群の頑丈さを手に入れただろう。全面石か、鉄のほうか頑丈ではあるだろうが金がかかりすぎるので知恵を絞ったわけなんだが。

さらに一ヶ月経過。ここまでやればかなり手馴れてきたので作業スピードはかなりアップ。子供たちも殆どの子が手伝えるまでに元氣になっていたので尚更だ。

出来上がったのは一階の部屋が三つと一階の床、二階への階段と二階の床と屋根だった。いやゝ我ながらよくやってるんじゃないかと思うよ。最近余裕が出てきて装飾を付けたりしてるしね。

しかし問題だったのは風呂だ。床と壁は粘土を見つけた時点で決めた方法があるのでそれを試した。磨き石といって丸い石をただ磨いただけの石だが、それを更にガラスでコーティングして、なるべく平たく壁一面に粘土を使って組み合わせた。石のコーティングは武具を買った店の爺さんに全部頼んだ。

「ガラス加工は皿とか防具に使ったことはあるが、なんで唯の石にそこまでするんだ？」

という全力の疑問をぶつけられたが。

「趣味です」

とだけ返しておいた。嘘ではないしね。

しかし資材ではこれが一番高かった。なんせ風呂場は家族の人数から考えてものすごく広い仕様になっていたため、石の総数は一万個に届いていたからだ。一個あたり加工料で3デイクス、さらに粘土が全部で一萬デイクスかったたので合わせて四万デイクスもかった。普通の部屋の三倍はかった計算だ。たっけー、しかし後悔はしていない。

問題は湯船にあった。俺的こだわりで檜ではないがどうしても木造にしたかったのだ。しかし唯でさえ難しい木造の湯船を巨大に作ったため何度やっても水漏れが出てしまったのだ。補強をしたら見栄えが悪くなるので何度も何度も作りなおした。正直これに一ヶ月のうちの半分はかけていた。

これ以上俺には無理！　ってとこまでやってみたがチョロチョロと流れる程度だが少しだけ水漏れがあった。しかし现阶段の俺の技量ではそこが限界と判断してハチマキが似合うミスターハニエス一号に頼ることにした。

「これが後にいう『溢れるのなら足せばいいじゃない作戦』である」

風呂の外側にタンクを設置、そこから溢れる量と同じだけの水を湯船に足していく作戦である。ハニエス一号君の役目は水を送るために延々と歯車を回し続ける重大な役割だ。なんともハニエス頼みの力技だがこれ意外おもしろいじゃないよ。がんばれハニエス超がんばれ！

そんなこんなで風呂場は完成へとなんとか漕ぎ着けた。装飾などの一切ない簡素なもので、もちろん後でそのあたりは足して行く気満々なのだが、どうしても今は手も金も足りないので今回はパス。

風呂に初めて入った時のことだ。完成を喜ぶ俺と子供たちはその日に早速入浴することになったが、初めて俺は家族の一員になってワガママを申しました。

「一番風呂に入りたいです」

俺が俺が状態の子供たちに先んじて一人湯船に入るのは多大な罪悪感があつたのだが、風呂はおれの待望でもあつたのでそこは譲れなかった。

子供たちの視線に後ろ髪を引かれながら脱衣所へと向かい、湯気に覆われた風呂場へと足を踏み入れた。まだ不完全ながらもそこはこの西洋っぽい異世界で唯一、純和風な空間だった。銭湯を意識したような、加工した石と固めた粘土でできた床。完全木製の大きな湯船に、木製の手桶と小さな椅子。

それでは背を流し髪や顔を洗い、心を沈めていざ入浴！

「はあ~~~~~~~~」

あまりの気持ちよさに腰が抜けてしまいそうになった。てかちよつと抜けてたと思う。その湯の温もり、木の香りが俺の全身を溶かしていった。

涙が出た。こんなに風呂というのは気持ちいいものだったのか、

素っ裸の子供たちが風呂場へとなだれ込んでくる。

「おおお！　なんだこれ！？　なんだこれ！？」

「すっげー……！！！」

目の輝かせようが半端ない。目から光線でも出るんじゃないだろうかという勢いだな。今まで楽しいなんて事を経験したことのないやつたこの子達にいろんな事を教えていくとその分子供らしい元気を取り戻していき、今では暴走してしまいがちになってきた。小学生ほどの年齢ならあたり前と言えばあたり前のことなただけ。

「オラ！　走るなよ！　滑ってすっ転ぶぞ！」

俺は取り敢えず湯船から出て子供たちを統制する。脱衣所から服を来た優男のロイがひよっこり顔を出していた。

「スイマセン……僕じゃもう抑えるの限界で……」

「いいよいいよ、時間を守れなかったのは俺なわけだしね」

「じゃあお願いしますね」

ロイは脱衣所から退場していく。なぜ一緒に入らないかと申しますと、ここにいる子供たちはもちろん全員では無い。十五×十五メートルと無駄にだだっ広く作った風呂場だが、流石に35名全員が同時に入ることはできない。せいぜい入れて多くて十人ちよつとあったところだ。なので厳正なクジを引き組み分けを行い年長者を誰か付けて入るといふ形になった。

ついでなので説明しておくが、我が大家族の男女構成は男二十四、女十一人の割合になっている。

今回は男八人づつと女性組に別れてみた。まだ湯が入っていない状態の時に年長者組には風呂の説明はしておいたがなにぶん入るのも見るのも初めてのことなので俺の受け持つ第一組が入り終わっても脱衣所で待機しておくつもりだ。

女性組の時まで脱衣所にいるのかって？ 居れるか恥ずかしい！ 流石に廊下で待つよ！ えっ？ 覗き穴は勿論作っただろうないだって？ 覗き？ トウカの入浴シーンを……………ヒッヒーロ―がそんな事出来るかあ！ べっ別に一瞬迷ったわけじゃないんだからね！

騒がしく元気にはしゃげるようになった子供たちに苦勞はさせられてはいるが、何とも幸せを感じる毎日が続いていた。でも何もかもが順調に進むわけがないのが世の常。

俺の足元には決定的で致命的な大きな問題が差し迫って来ていたのだった……………。

そろそろ金が無い。

第三話 リフォームリフォーム（後書き）

風呂は日本の心ですなんて言葉を噛み締める時がたまにあります。

第四話　こんにちわ御仕事

大体家を改築し出して一ヶ月経った頃から問題には気付いてたんだ。どれぐらいで俺の貯蓄が底をつくのかどうかは。底と言ってももちろん無一文に成るわけではない。食い物とかを買ったりする生活費はもちろん残しているのだが、このままではこれ以上家の改築資材が買えなさそうにないのだ。

現在は三十万デイクスあった俺の残高は五万デイクスを切るところまで減少してしまった。日本円にして五百万円もあるのならまだまだ余裕があるじゃないかと御思いだろうが、この国では、もしもなにかあっても俺たちは全員市民権を持っていないので支援も助けも国からは期待できない。そう考えればこれだけあってもむしろ不安なぐらいだ。

もちろんとても有意義に使うことが出来たので微塵も後悔はしていないのだが、いかんせんおれは三十五人家族の家長で、唯一の稼ぎ頭だ。子供たちには今までやっていたスリや盗難の類は一切やめてもらっている。働きに出れそうな人もいるにはいるが、そうなる子供たちの面倒を見る人がいなくなる。俺でさえ外出は最小限に抑えて子守を手伝うほどだからとてもじゃないが無理だ。

なにより今外に働きに出ること自体も不安が残る。どうせならその労働環境も俺が作り出してみるのもいいと思っではいるし、案もなくはない。だがそれにもやっぱり大量の金がいる。

まだまだ色んな問題を抱える家族だが、やっぱり何をするにもまず金だ。

だが商売の知識なんて大して持ち合わせて居ない俺が頭をひねった所で「近所で出来て早く大きな金に成る」なんて都合の良い金稼ぎの方法なんて思いつくわけがない。

「というわけなんだがいい仕事ない？」

「何がというわけなのか全然わからん」

まったく考えつかないから誰かに相談してみた。相談相手は最近特に仲良くなつた武具屋の主人であるガナド爺さん。買い物に出た時は毎回寄つてだべってます。

「いやだから、街で出来て早くて稼げる仕事はないかって聞いてるんだけど」

これに『簡単な』って付けば完全にダメ人間です。

「あのなあそんな都合の良い仕事がそうそう転がるとるはずないじやろ」

「ですよ〜」

「街の外でつて条件ならそれなりにはあるんじゃないかな。希少な素材の確保、名前付きの魔獣の討伐、盗賊団の捕獲や、危険地の調査とかな」

それは最初のほうに考え付いたけど、街を離れる必要性がある上に日にちがかかりそうなので却下。主に子供たちの心配の為に。

「今言つたのは全部冒険者ギルド発注の依頼だし冒険者ギルドに顔

出してみたらどうだ？」

冒険してお金を稼ぐ？ いやいや完全にそれじゃ道楽だな。冒険者ギルドはいわば危険性のある依頼を請負い金銭を得る荒くれを紹介しまとめ上げる組織だ。命がけの物も多々依頼の中にはあるが、危険が増せば増すほどの報酬金額は馬鹿高い。頑張れば一週間で一万デイクスを稼ぐのも夢じゃないので今の俺にはうってつけなんだけど……。

あとギルドは調べたところによると俺が登録している生産ギルド、調理ギルド、医療ギルド、錬金術ギルドに魔法ギルド、そももつて冒険者ギルドの六つだ。なんでも噂では調査ギルドという謎のギルドが存在するなんて噂もあったが実態を掴めることはできていないな。ありそうなギルドだけだね、日本でも情報屋は実在したらしいし。

なんでもギルドを複数重複して登録することは可能なんだとか。おすすめはできないなんて言われたが可能なこと自体がちよつと意外。あまりやる人はいないらしく、いてもどこか自分の実用的部分がかぶるように二つだけ登録するのが普通なんだとか。

なぜ登録したらお得なことがあるギルドになぜ重複登録したがいけないかというと、生産ギルドの査定のようなものはどのギルドにも存在し、それをクリアしていくのは大変な労力のようなのだ。下の方のランクの査定なら簡単そうだが、ギルドを有用に使うためには最低でも五段階中三まではあげる必要があり、そこからはあがるのも維持するのも格段に難しいようだ。しかも途中でランクダウンどころか除名なんて不名誉を被るとあつという間に悪い噂は広がってしまう。そうなりや他の街にでも移動しなけりや商売上がったりののだ。

「ほんとに生産ギルドの仕事して稼ぎたいけどまだ仕事場すらないしね。仕方ないちよつと覗いてきますか」

そうだとウチ連れていこう！ 最近煮詰まり気味だし久しぶりにデートもいいかもしれないな。グフフ。

「それならもう一ついい稼ぎになるものがありますよ」

午後からの予定を決めた俺の背後から爺さんの娘さんであるマリナおばさんが話しに入ってくる。

「いいのかマリナ」

「フフツ。キドーさんは信頼するには充分な程にお人良しみたいですから」

何の話だろうか。

「私は武器屋の店員ですけど、調査ギルドの構成員でもあるんですよ」

な、謎のギルドキターーーーーー！！ あれか！？ コードネームは酒の名前だったりするのか！？

「そこで私に情報売ってみませんか？ キドーさんはちょっと変わった視点をお持ちのようですからいい取引ができると思いますの」

「……」

いや商才すらない俺に情報の価値とかわからんから。情報収集に余念はないが、あれは基本俺の為と目的のものにしてるだけで他の使い道使えるとは思わないしな。

「なんでもキドー様は人から情報を聞き出すが得意とか……」

ヒィ！ 俺の情報収集活動が筒抜けだー！！ 壁に耳あり障子に目あり、いやそこは同じ穴のムジナか？ どっちにしても専門家にはかないません。

「なにかお金になりそうな、今求めてる情報ってありますか？」

ダメもとで聞くだけ聞か。もしかしたら日々の活動の中で小耳に挟むぐらいしてるかもしれないし。

「そうですね……。今ですとジーニー・ボライアズ様のこれからの動向。汚職役人情報。正体不明の窃盗団。あとは一月前に起こった旧ナーブ神殿で起こった惨状に関しての情報でしょうか」

おっと二つも引っかかりましたよ。ジーニーさんとはあれから数回お茶に招かれている。なんだか友人のように接してくれているジーニーさんとの会話はすごく為になり楽しいものだったし、一緒に連れてったトウカヤリッキーがガッチガチに固まっていたのはとても面白かった。世間話をしたりしてるのでもしかしたらその会話を売れるかも知れない。まっ個人的にこれはパスだな。恩人を売るとかマジ勘弁。

あと一つは……。

「ゲイロス一味が全員逮捕されたのって街で有名話じゃないですか」

あれだけ悪評を振りまいていた一味があっさり全員御用となったあの事件は街中がその噂でしばらく持ちきりだったはず。

「はい、そうなのですが……。ここまで話題になったこの一年以内に屈指の事件なのに詳細な情報がありませんでてこないんですよ。なぜ今まで放置していた一味が突然逮捕されたのか？ 現行犯逮捕との知らせはありますが罪状不明。近辺に住んでいた人の話では捕まった日の夜中にすごい物音が神殿内から鳴り続けていたという話もあります。しかし警備兵や騎士団が踏み込む前の話だと聞きますし……。単純なはずの事件なのにとっても謎が多いんですよ。つまりこれは隠したい事があるんじゃないかという推測が成り立っているんですね」

なーるほど・ザ・世界。

たしかあの連中に絡んでいた役人はいたはずだし、現場の惨状はともじやないが説明しても信じられない。それにおそらくあの連中を締め上げればゴロゴロ余罪が浮かんだはずだ。そうなたら今まで放置していた警備隊や国に批判が向かう。だから臭いものには蓋をしたか……。政治的判断ってのはどこの国でも変わらないな。

「それについてなら一個だけ知ってる事がありますよ」

「えっ！？ どつどれについて!？」

なぜにびっくりした。

「ゲイロス一味が逮捕された罪状ですよ。あれは確か誘拐罪です」

「……証拠は出せる？」

「実際に行方不明なっていてその日取り下げられた人が複数いると思います。あとは直接そっちに聞けば分かるかと」

「……………」

やばかったか？

「すごいわ、期待していたのは事実だけどいきなりこんな大物を出してくるなんて……」

よかった感心してくれてただけだったようだ。セフセフ。

「報酬は裏付けが済んでからになるから、受け渡しはこの店の奥で行いましょう」

「いくらぐらいになりそうですか？」

なんだが業突く張りな話だけど、今は切実に一デイクスでも多く金が欲しい。

「そうね……低くても一万、高ければ四万にも届くんじゃないかしら？」

「高っ！？ 噂話を確定させてだけなのになんでそんなに高額なことに！？」

「ふふ情報っていうのは使う人によってはすごいお金に変わるのよ」

あつそついえばジーニーさんここで俺も変えたな大金に。完全に運要素が百パーセントだったけど。

「それとキドー君、情報ギルドに登録する気ないかしら？」

「はい？」

本当にこの世界は俺をどれだけ驚かせれば気が済むんだよ。知り合いが実は謎のギルド構成員でしただけでもかなりの衝撃だったのに、更にその場でスカウトしてくるとかとんでもないよ。……受けただけど。

なんでも情報ギルドは査定制度がないらしく別に仕事に励む必要がないらしい。気が向いた時に売り込みにきてくれるだけでいいそうだ。そんな制度でダイジョブか？ とマリナおばさんに聞いたところ。

「いいのよ、この道は信頼こそ最も必要なものだからね」

だそうだ。よくわからん。

さて現在、一応の稼ぎは出したと思うがこれからのことも見据えて冒険者ギルドへの訪問は実行に移した。もちろんトウカと手を繋いでである。ヌフグフムフフ、何度握ってもトウカの手は俺を満たしてくれるな。

一月もあつたんだからなにか進展したと思った？ 残念私にそんな度胸はない！ 今だに手を握るだけで精一杯であります！ これより先は即昏倒の可能性のある危険ゾーンです！ もっと偵察をし

て現状把握する必要があるであります！！！！
すごいヘタレとも言っけど。

「あれが冒険者ギルドですよ」

道案内を任せていたトウカが指をさす先に大きな建物が見えてきた。黒鉄で一面を覆った生産ギルドと対称的に冒険者ギルドは支柱を除けばほぼ木製だ。カーペットや壁紙すら貼っていない木目調。なんというか荒くれ集う場所としてはらしいっちゃらしいね。それにしても

「でかいなあ」

そうでかいのだ。今までこの街でみた建築物の中では城に継いで二番目にでかい。地球でいうなら学校の敷地を二つ繋いで全部が建物だと言ったら分かりやすいと思う。

「なんでも色んな店や酒場、あと登録者専門でお貸しする安い宿屋も経営しているらしいですよ」

「なるほど冒険者たちからすればここにいれば全部揃えていくことが出来る施設なわけだ」

すごく至れり尽くせりな場所だな、それでもちよつとデカすぎると思うけど。ドアさえないあけっぴろげな正面の場所から中へと入場、目の前には受付っぽいカウンター、右側は武器屋などの店が並び左は酒屋のようだ。昼間だけかなりの賑わいが見て取れる。まあこの街すっごく人が多いしデカイもんね。

とにかく広くて自分ではあくすることすらできていないのだが、一度総人口がどれぐらいかガナド爺さんに聞いてみたが。

「五百万はいるんじゃないか？」

だってさ。多いしそれが全部入りきる街ってどんだけだよ。

さて今日は今後の参考にするために見学してきたけどどんな依頼があるのかだけみようかな。その後はトウカと店でもブラブラしますか。

「キドーさん。冒険者ギルドにお入りになるんですか？」

「いや、今のところはその予定はないな」

「せっかくあれだけお強いのに……」

「ハハハ、アレはあんまり人前では見せたくないからね」

「フフ、そうでしたね」

恋人の関係のはずだけどお互い緊張してか、今だに敬語っぽい会話になってしまう。

トオウカ談笑しながら依頼の貼られた掲示板へと向かう。するとなにやら受付カウンター前で言い合いになっているグループが目についた。

「チームで仕事したんだから報酬は均等に山分けだろ!？」

「ハッてめえ等みたいなガキのひよっこなんて二人で一人分で充分だろうが! わざわざ俺が駆け出しんみ付き合ってやったんだそれぐらいは感謝してもらいたいぜ」

新人とロートルがどうやら成功報酬の分け前について揉めているようだった。新人側は俺より年下に見える男と女のコンビ、ロートルは剣士っぽいのが二人に槍を背負ったのが一人の構成だ。ロートルといっても全く強そうではないが。

「そんなバカな話があるか！ 薬草の採取にだってミミルの知識に頼ってばっかだったくせにどこが付き合ってただよ！ むしろそっちが付いてきてたって言ったほうが正しいじゃないか！」

おうおう猛々しいね少年。嫌いじゃないよそういうの。

「テツメエ！ ほざきやがったな、表に出ろ！ ぶちのめしてやる」

おいおいどう見ても少年は弓使い、それに盾持ちの剣士が決闘を仕掛けるとか有利すぎんだろ。ボコりたいだけだなあのオッサン。

「受けてやるよオッサン！」

「駄目だよおジョイ。怪我しちゃう……」

熱くなりすぎて自分の状況がよくわかっていないご様子です。若いね。少年の裾を引っ張って制止しようとしている女の子の方が冷静みたいだな。

「あれは、ジョイとミミル？」

「え？ あの喧嘩しそうな二人って知り合い？」

「はい私達北西区とは別のスラムの子でちょっとした知り合いだったんですけど冒険者に……」

ほおストリートチルドレンから冒険者になるとは見上げたやつだな。

「キドーさん……助けてはあげられないでしょうか？」

トウカの上目遣いからの頼み事来たこれ！　こうかはばつぐんだ！　どっからみても理不尽な決闘だしな、助けるのもやぶさかではない。というかトウカの頼み事を断る気なんて全くないけどね！

第四話 こんにちはわ御仕事（後書き）

リアル求職中の私です

第五話 ジョイ&ミミル

「はいはい、そこまでそこまで」

今にも胸倉掴んで殴りあいそうな険悪な一団の中へと笑顔で乱入する俺。

「なんだテメエは！？ 関係ないやつはすっこんでろ！」

「いやゝそれがあつちの関係者なんだなゝこれが」

「「え」「

俺の言葉に少年少女の方が驚く。それに対して目でトウカのいる方へと視線を送ってもらう。

「あの傷はもしかして……トウカ？」

よかったよ気づいて貰えて。

「という事で見苦しい真似はやめて大人しく報酬支払っていただけませんか？ こんなこと評判が下がるだけですよ？」

ギルドで悪評上げたってなんの得にもならないでしょうに。しかも受付前とか正気の沙汰とは思えないな。

「へっ知ったこっちゃねえよ。そっちに一人分払って残りが俺らの配当が正当な報酬だよ」

やべえお話の通じない系統のお方でしたか。でも周りの反応が薄いな……受付のお姉ちゃんも苦い顔してるけど注意しないし……。もしかしてこいつらこいつことの常習犯か？

「ねえ、この依頼は誰の名前で受けたんだ？」

ジョイと呼ばれる少年に向き直って聞いてみる。

「えっ？ おっおれだけど……」

「じゃあ依頼の配当権は確かジョイ君が握ってるはずだよね？」

「だからなんだよ」

「では別に君たちの報酬が全くなけても誰にも文句言えないよね？」

男三人の眉間にシワが寄る。

「そんなことが通ると思ってんのか？ それともなにか？ この金を力づくで奪い取るってつもりでいるのか兄ちゃん」

手に持った金袋をこちらに見せ付けて薄ら笑いを浮かべるアホ。

「ホントにあんたら頭悪いんだな。今君らは強盗と同じ扱いなんだよ？ 力づくでその金をこっちが取り返しても法律的になんの問題も無いんだ」

受付のお姉ちゃんがあつと驚いている。気づけよギルド員。

「大人しく報酬を受け取ってお家に帰るか、何の報酬も受け取らず

に痛い目に合うか選べよゴロツキ」

「このガキィ……」

文句を言いながらも報酬を支払うロートル三人組。これだけ人のいる場所で強盗を証明されたて暴れようものなら即警備隊を呼ばれて牢屋行きは確実だ。流石にそこまでするアホでは

なかったようだ。ていうかそこまで救いようの無いアホだったら冒険者はやってられないだろう。

「覚えとけよ」

お決まりの台詞を吐いてゴロツキ共はその場から退場していった。いやいや覚えとけて悪いの完全にそっちだからね？

「ありがとうございました」

「……」

ミミルちゃんが頭を下げて俺に感謝を述べてくる。どうやらジョイ君は収まりが付かずに納得できていない様子。

「よかった、なんとか丸く収まって」

トウカが走り寄って来て胸をなで下ろしていた。

「余計な事すんなよな、ったく」

気が強いな〜ジョイ君は。

「ジョイ君のバカーーーーー！！！！」

その一言を聞いてミミルちゃんが手に持ったメイスを全力でジョイの頭に打ち付ける。

「何すんだよミミル！」

「あのまま決闘して三人がかりで来られたら私達ふたりじゃ絶対かてなかったよう」

怖いのを我慢していたのか涙目でジョイにいかに危なかったかを訴えるミミル。この子はなかなか頭が良さそうだな。

「そんなの気合でなんとかなる！」

それに比べてジョイ君は残念だな。

「なつりませーーーーん！！！！」

再び全力で振るわれたメイスがジョイの顔面にヒットしてその体をふっ飛ばしたのだった。

「あり……が……とつ……ございまして……た」

食事処に移動した後、顔面が腫れ上がった瀕死の状態のジョイ君がおれに息も絶え絶えに感謝してきた。いかに自分たちに危機が迫っていたのかを、その身を持ってミミルに説明され

た結果なんとかご理解できたようだ。

その後、色々な話を交えながら俺のおごりで昼飯を取ることにした。家の昼飯は最近メキメキと料理の頭角を現してきたユーリに作ってもらう事が多くなってきた。すでに味付けだけ

なら俺よりもうまくなっている。単純な作業はミセスハニーウェイトが手伝ってくれるのでとても楽チンだ。

なんでもトウ力が仲間を集めようと思ったきっかけは彼等だったらしく、ジョイとミミルも五人ほどの小さな子供の面倒を自分の稼ぎで面倒を見ているらしい。普段はジョイが獵師と

して、ミミルは光の神殿の巫女として働いており、時折自分たちにできそうな依頼を見つけては冒険者ギルドの依頼を受けているそうだ。

「君たちホント偉いね」

「いやキドーの兄ちゃんのほうがすごいだろ」

年齢を聞いたら一応一五歳のはずと返ってきた。俺と二つ下ですでに独立して子供を養ってるとかやっぱすごいよ。

「そついやさつきみたいなのはよくある事なのか？」

「報酬を奪うほどの事はないですが、組んだチーム内でトラブルはよくあります」

「あいつら俺らがストリートチルドレン上がりだつて知ってるから、いつも舐めてかかってきやがるんだ！ むかつくぜ！」

「ならどうしてチームを態々組むんだ？」

面倒事が起きる上に分け前が降る行為をなぜ毎回する必要があるのか疑問でしかたなかった。

「私達、神官と弓師のペアだからどうしても前衛で頑張ってくれる人が必要で……」

ああなるほどね。弓師も回復術主体の魔法使いである神官も接近されると困るもんね。接近戦に長けた人もいるらしいが、それは上位陣に限った話らしいし。

「とするとその弱みに漬け込んでくるやつが多いってほづが正解かもしれないな」

「……そうかも……しれません」

「元からそのつもりで近づいて来てるのかよあいつら……」

ここは他のギルドに比べてあらくれ物が多いからね。隙なんかみせたら骨までしゃぶられそうだ。

ん？ 待てよ？ …………… 良い事を思い付いたぞ！

「俺から一つ提案があるんだけど聞いてみる？」

トウカの話と今まで喋った感じからこの二人はかなり信頼できそうだ。なら、ギブアンドテイクでみんなでハッピーな関係だって築けるような気がしたんだ。

「俺らと兄ちゃんがチームを組むっ？」

「そう、ただし俺は冒険者ギルドには登録しないから毎回助っ人として参加する」

「強いんですか？ キドーさんって？」

「それはもうびっくりするぐらい強いわよ」

少し俺の思惑を感じ取ってくれたのかトウカが二人の説得に回ってくれている。

「その条件を飲んでくれるなら、俺からもそっちにしてあげられる事がある」

「……もし飲んだら？」

「俺んちで住める権利をやるっ」

聞いた話じゃ現在二人は借家住まいで、いつも子供五人にはお留守番をさせているらしい。俺と心配の種が似ているだけにこの条件はなかなかの妙案じゃないかと思うんだけど。

とりあえず家を見てもらうために二人を自宅へと案内する。

「うそ……だろ……」

「信じられない……」

何に對してそんなに驚いているのだ君たちは。ボロさ加減か？

おつかしいなあ、なんとか一階の部分の大半を改築してボロい壁は全部とっばらい。支柱は綺麗にして屋根は完成して

いる。いまだ柱しかない二階はともかく一階は見れるようにまでにはなっただけ。庭だって身の丈ほどに伸びてた雑草だつて子供たちが頑張つて整地してくれたので広さの分

かる綺麗な庭になっているし。

「これを一月ちよつとでしかも一人やったのか？」

「ああ、そこなんだ驚く所」

確かに早いとは思うけど今だにどこの部屋にも壁紙なんて貼って

いない角材丸出し状態だし、唯一寝ている広い居間にはカーペットを引いてはいるがそれでも色んな事を省略しての強

行だからこんなもんじゃないだろうか？

「ほんとにいいのか？ 俺たちがこんなとこに住んでも？」

「そつちが良ければいくらでも」

正直俺はこの二人がかなり気に入っている。トウカと同じように苦難の日々を過ごしながらもそれに負けない目の輝きを持った彼等と一緒に過ごしてみたい、家族になってみたいとお

もったのだ。

「あつでもミミルちゃんは神殿勤めだから光の神殿まではここからは遠いか」

この広すぎる街中にあるといっても光の神殿までは定期的に大通りを回っている馬車を利用して一時間くらいかかる。往復毎日二時間は俺も嫌だなあ。

「いえゝ巫女と言いましてもお私は下っ端もいいとこなので。直接神殿ではお勤めしているわけではないんですよ」

なんだか緩いなゝこの子は。

「ですからあ住まいが代わったと申請すればあ近場の奉仕先を斡旋してくれるとおもいます」

「問題はないのか。じゃあどうするよ？　今すぐなんて話じゃないから返答を急がなくてもいいんだけど」

「一つだけいいですか？」

どうしたなぜ急にかしこまったんだジョイ君

「いくらでもどうぞ」

「キドー兄ちゃんの実力を見せて欲しい……です」

おっとそれは重要だよな。

「じゃあ軽く組手でもしてみるか」

その後存分に組手をしたジョイは元の口調に戻って家族の一員に加わることを了承した。

第五話 ジョイ&ミミル（後書き）

前から思ってたけどなんで洗剤のジョイは関西弁なんだろうね。

第五話 外伝 トウカの驚愕

ご飯が三食毎回食べられて、綺麗な服を着て、温かい毛布に包まって眠れる。今までは考えられないような生活を私達は送れるようになった。いまだに信じられないこの光景を作り出してくれたのは、その存在感が凄すぎて信じられないキドーという男の人です。

そもそも私とキドーさんの初めての出会いだつて人に言っても信じては貰えないようなものでしたし。

あの時、私は何もかもが終わってしまうんだなつて思っていました。分厚くて私じゃとても壊せない大きな壁に囲まれてこれからの人生を過ごすんだなつて。でも空から現れたキドーさんはあつという間にその壁をなんと拳で叩き割ってしまったんです。驚きましたよ、驚きますよ普通。ゲイロス一味は警備隊でも迂闊に手を出せないほどの実力を持っていると聞いていたのに、それをたった一人で圧倒してしまつたんですから。私はその戦う姿を見て、火と武の神バーダグノミス様の使いなのではないのかと思いましたもの。

そして私達全てを見事救出して下さいました。心配だから一緒にいてくださると言ってくれるこの御方は本当に優しい方なんだと心から思いました。

そんな中で周りが騒がしくなり、夜が明けだすずっと座っていたキドーさんは静かに立ち上がりました。私はもしかしたらここでお別れになるんじゃないか、もうあえないんじゃないかと思って

勇気を振り絞ってお礼を言いに駆け寄りました。

「あ、あのありがとうございました。本当にあなたは命の……いえ心の恩人です」

「いや……勝手にやったことだ気に

」

そんな私の言葉を聞いたキドーさんは目を見開いてしばらく固まっ
てしまわれました。なにか気に障るような事をしてしまったんでは
無いかと思い、私もそのまま見つめたままで立ち止まっています。
すると顔を隠していたマスクを外して私に問いかけて来た。その
顔はなんでだろう、始めて目にした時からイメージしていたその
もののお顔だった。

「俺はキドーと言います。改めてあなたのお名前を聞いてもいいだ
ろうか？」

「えっ？ あっはい！ 私はトウカといいます」

正体不明、ここまで名前も明かさなかった人が突然私に名前を教
えてくれて、なぜか私の名前を尋ねてらっしゃったので本当に私は
この時焦ってしまってちゃんと喋れていたんでしょうか。

するとキドーさんは私の目の前まで近づき、その膝を付いて私に
手を指し伸ばしてこられました。これはもしかして物語なんかで聞
いたことがあるような……。いやそんなはずはない、私なんかに
。

「いきなりですまないと思う。でももう俺には止められないんだ。
どうか俺の愛を君に送らせてもらえないだろうか？」

そう心の中で否定したのにあつという間にそれを覆されてしまった。

「……………え？ え？ へえ！？」

そのあまりの唐突さ、予想外の出来事にひどく狼狽してしまいましたよ。無理もないじゃないですか、だって私はストリートチルドレンでこんな貧相な体をしていて、顔にだって大きな傷を負ってる女なんですよ？ そんな私にこんな凄い方があ、あ、愛のここ、告白をするなんて……。思い出すだけでも顔が赤くなってきます。

でもその真剣なキドーさんの雰囲気はその言葉が心の底からの真実なんだと物語っていました。

私は嬉しくって嬉しくって、心に花咲いたように嬉しかった。でもちよつと「ずるい」とも思いました。だってきつと私のほうが先だったから。空から現れてその手を差し伸べてくれた彼と初めて目を合した時から私の心は彼に向かっていたから……。

「……………はい」

喜んで心からその愛を頂きます。その代り、私の全てをあなたに送りたいと願います。

初めての驚きの出会いからも、キドーさんは私の心に大きな大きな驚きを送り続けました。

まず、次の日にはあそこから逃げ出したリッキーを連れて来てくれて、しかも私達が住んでいた場所を購入してしまったなんて言うて。

「俺もここに住もうと思ってね」

なんて言い出すんですもの。あまりの驚きにきつと頭が麻痺していたんでしょ、今考えるととっても失礼ですけどその訳を聞いてしまいました。

そしたら。

「……俺は君が大切にしているものも大切にしたいと思ったんだ。理由はそれで十分だ」

私の為とおっしゃいましたよこの方！　あまりにストレートでわかり易い理由に私はしばらく耳まで真っ赤にして俯いて固まってしまいました。

その後も驚きの連続でした。全員分のご飯を魔法を駆使して作ってくれたり、全員分の衣服を買ってくれたり、なんと家は自分で作り上げるなんてもおっしゃいましたし。この人の凄さがどこまでいくのか測ることを諦めそうになりましたよ。

でも衣服に喜ぶ子供たちを二人で見守っていた時、静かに私の手を握って来られました。ちょっとビツクリして見たキドーさんは見るからに緊張して額に汗までかいていました。

ここまでの凄さを見せたキドーさんの初心^{うぶ}さというか純情さをみて私はなんだか「かわいいな」なんて思っていました。

「……フフ」

でもそれが私に向けられてるって思うと嬉しくて自然と顔が綻んでしまいました。

それから驚きを絶やすことなくキドーさんの日々は続きました。あまりにもおどろかしてくれるものだから。

「キドーさんってまるで体中がビツクリ箱みたいですね！」

って言うてみたらなんだか少し悩んでいたようでした。……これだけ色んな事をしてきたのに自覚が無かったようですね。鋭いのか、鈍いのか、ほんと面白い人です。

そんなある日、冒険者ギルドに案内を頼まれてキドーさんと二人で行くことになりました。二人つきりでどこかに出かける時は手を繋いで歩くのが最近の決まりみたいになっていたので、勿論この日も手を繋いでゆっくりと歩いていました。家から冒険者ギルドまでは徒歩で一時間以上かかるので、もちろん市内の大通りを回る大型馬車を利用しましたがけどね。

そして人気の少ない通りを歩いている時、ふとある事を思い付いたんです。いつもいつも、驚かされてばかりのキドーさんをいつか驚かえてみたいと思っていた私は今までしたことのない恋人っぽい話題を振ってみました。

「キドーさんって私のどこが良かったんですか？」

初みなキドーさんならこういう質問は苦手なんじゃないかなうって思ってみたんですけど。苦手だけど嫌いじゃないはずですし。

「どこがって……全部だけど？」

素面で返しましたよこの人！ たまにこういう事をさらっというから私も気が抜けませんよ。

「でも、私って孤児でしたし、あの時初めてお会いしたばかりでしたし、それに……私の顔には大きな傷がありますし………」

この時、ちょっと焦ってしまっていたんでしょう。いままで疑問に思ってた心にしまっていたことが漏れ出してしまいました。

「孤児である事は好きになれない理由にはならないし、なにより一目惚れだったしね」

私も一目惚れでしたけどね。恥ずかしくて言いませんけど。

「それにその傷の経緯はユーリから聞いたよ？」

いつもは一言二言しか喋らないユーリですが、二人っきりになると凄くしゃべりだす上にすごく口が軽くなるんです。キドーさん

にも慣れてくれたのかお喋りするのはいいんですが、彼女とは仲間を集めたした時からのなかなか長い付き合いですから、どんな事を喋ってしまっているのか気になる所です。

「それはトウ力の……そのなんだ……美しさに何の陰りも見せないし。むしろトウ力だっていう魅力が際立つよ」

驚かさないうまでも動揺してもらうつくりのつもりで質問したのに、逆に私が驚かされてしまいました。

私が子供たちを守ると決めた時。私の持てる全てを投げうってでも守って見せると決意しました。それは自分の幸せだったり、将来だったり、女としての自分だったり、そしてこの顔の傷もその為の一つでした。

手を差し伸べてくれるだけではなく、今まで捨ててきたモノをキドーさんは簡単に拾い集めてきてくれるんです。ああなんて、なんて愛おしい人だろうか。

その嬉しさの余り、私は唐突にキドーさんの腕を抱きしめるように腕を組んでみたのです。

「ト、トウ力さん！？ どとどと、どうしましたか！？」

どうやら急な事に驚いてくれているようです。質問作戦は失敗だったようですが結果としては作戦成功のようです。驚きのあまりに口調まで変わってしまったていますからね。今度からこういうふうな物理的アタックを心がけてみましょうか。

「フッフ、なんとなくこうやっていたい気分なんです」

ガチガチに固まった体を何とか動かしているキドーさんにとってはもおかしかったですね。頑張ったかいがあったというものです。そ

して私はその腕の力強さと暖かさからとてもとても幸せな気分を堪能させて頂きました。

でもなんだかチラチラと視線をこちらに、というよりどこか一点を気にして見ているような？

「あつ」

しまった！ この形で腕に抱きついたら、胸を押し付けるような形に！！ かなり時間が経ってから気付いた私は真っ赤になってしまったのですが、自分から仕掛けておいて離すに離せず二人共無言のままで歩くことになってしまいました。

長い沈黙であたふたした二人だったんですが、偶然にも視線が一瞬重なつて見つめ合う形になってしまいました。頭が真っ白になっていた私は視線を逸らす事も出来ずに。 。 っという最高に甘い雰囲気を作り出す真横をかなりの勢いで馬車が通り過ぎてその空気を壊されてしまいました。

おしいっ！

何が惜しかったのかは、ご想像にお任せしますが、その後改めて

腕に抱きつくことは出来ずにまた手を繋いで歩くことになりました。よくあそこまで男性に対して恐怖を抱いていた私がここまで変わったなと自分ながらに思いますね。これもキドーさんのせいに間違いありませんけど。

そんな幸せ気分で冒険者ギルドに行くと、そこで私の知る友人に再会することになったんです。

ジョイとミミル。子供たちを守ろうと決心したところに男性に襲われそうになっていた所を助けて貰ったことがあつたんですけど、その時に話してくれた彼等の話から思い付いてみんなを集めることになった始まりの人。

ジョイとミミルは私の滞在していた北西区とは逆の南東区にあるスラムを拠点にしていたストリートチルドレンだったそうです。でも偶然にも光の神殿の神官にミミルの才能を認められてそこで勉強しながら働くことになり、その賃金で年下の子供たちとジョイを養っていけるようになったらしい。もちろんジョイも負けじと働き口を安い賃金なりにも見つけ出して必死に働いているそうだ。そのうちお金が貯まったら冒険者になりたいなんて夢も持っている立派な男の子だ。

その二人を冒険者ギルドで見た時は夢が叶ったんだと思えて嬉しくて、でも同時に少しだけの罪悪感も感じていた。

彼等が私達同様苦勞してきたストリートチルドレンなのはわかっていて。願うことならキドーさんの救いの手がジョイとミミルにも差し伸べられたらどれだけ良い事だろうかと思つた事は何度もあつた。彼等もまた、私の仲間であつたから。

でもそれは出来ない。私達にこれだけの事をしてくれているキドーさんに我俣に等しいお願ひをするなんて事はとてもじゃないけどできつこなかつた。

だからせめてもと思つてジョイ達が揉めている所だけでも思つたのに……。

なぜかジョイとミミルと一緒に住む事にトントン拍子に話が決まつてしまつていた。

もしかして心を読まれてしまつたんじゃないだろうか疑つてしまつたけど、理由を聞くと確かにお互いにとつていいお話になつてキドーさんにもメリツトがあるみたいだつた。

その時なんだか笑顔で確信してしまつたの。きっと私がキドーさんに驚かされない日々はこないんだろうなつて。

第五話 外伝 トウカの驚愕（後書き）

だいたい最初からここまで勢いに任せて二日で書いた。自分でもドン引きするほどの集中力でしたよ。

第六話 明日のために

そんなこんなで今後の方針はだいぶ固めることが出来た。まず家の完成を目指す事を基本としていき、ジョイとミミルの仕事をたまに手伝い、貯蓄金額が五万デイクスを切ったら家の建造を一旦停止して金を本格的に稼ぐ。それと平行して情報ギルドの仕事を行っていくのをこれからの活動プロセスにしていこうと決めた。

家は不完全なところもいいところなので早く完成させたいので当然最優先、ジョイ達を手伝うのは当たり前だし、五万デイクスを切ったらキツイのは前に述べた通りだ。そして情報収集活動については積極的にしていくつもりだ。

元から悪党を見つけるためには必要な行為ではあったし、ここには情報ギルドというものがあり、その話によつてはかなりの金額を得る事が出来る。しかも信頼度を上げていけば逆に向こうからの情報提供にも期待が持てるはずだ。証拠にゲイロス一味の情報報酬を受取りに行った時、マリナおばさんに詳細を少しだけ聞いてみるとどうやら犯罪に対する情報の金額は他の情報に比べればやや高かったので、情報ギルドがその系統に対して力を入れているのがよく分かった。結局俺の売った情報の金額だつて三万五千デイクスにもなったのでかなりのものだろう。

あまりに高い気もしたのでマリナさんに聞いてみたが。

「一つの情報を確定することで色んな情報が手に入ることもあるのよ。キドー君が売ってくれた情報もそんな類の情報だったわけ。おかげで面白いことが色々わかって助かったわ」

だそうだ。情報の活用方法なんてのはてんで分からないのでそこらへんのことは専門家にお任せする方がこちらの都合としてもいい。まさに渡りに船とはこういうことだろう。いや、実際その規模と実

力からすれば渡りに軍艦かな？ 本当にラッキーな出会いだったな。情報収集に関してはちょっとした自信がある。なんせ地球で俺の生きた世は情報という名が付いた時代だったので、情報の有用性はその身に感じるほどに理解している。機械の勉強に邁進していた俺の学習速度も、図書館、専門誌、インターネットの情報媒介が安易に利用で来たことでその速さは飛躍的に伸びていたことは確定的に明らかだった。

こちらでいう生まれた時からもつ魔力の感覚の代わりに、俺は情報の感覚を持ち合わせていると言えるだろう。使いこなせてはいないけど。

そういえば忘れられているかもしれないが、ヨルガの森で獲得していた熊の皮などは全て販売した。全部をジーニーさんのところに売るのは流石に目立つので他の五商家にそれぞれ分けて販売した。

五商家はボライアズ家の他には建築のナルバ家、食品のノイエリス家、武具のグライス家、貿易のロナイホーン家というのがあ。それぞれ得意分野で活躍しつつ手広く商売をしているそうだ。ちなみにボライアズ家は資材販売を得意としていて、なんでも石切場と鉄鉱石採掘所がほぼ同時期に取り尽くしにより閉鎖してしまっただために家が傾いたとジーニーさんが苦笑しながら説明してくれた。そこでジーニーさんが新しく色んな販売ルートを開発してなんとか持ち直したそうだ。

まあボライアズ家に持ち込んだ時のように頭首クラスどころか一族の一員が対応することは一度もなかった。失礼に見えるかもしれないが、お得意様ならともかく有象無象の相手を一々相手に出来る

ほど暇ではないから五商家なのだ。

どっちかと度々俺と会ってくれるジーニーさんのほうが異端であるのだよ。ジーニーさんもかなりの変わり者なんだろうね。アレだアレ、「類は友を呼ぶ」ってやつなんだろう。

そして今回は本当に金欠が大変だったので遂にアレを売ろうと決断したのだ。

「キドーさんは体が全部ビックリ箱で出来て居るのかもしれませんがね」

俺の持ち込んだサーベルタイガー、正式名称ワイルドキャターの毛皮を鑑定し終えて俺と午後のお茶を楽しんでいたジーニーさんが偉く失礼な事を言い出した。でもこないだトウカにもおんなじような事言われたな。……おかしい俺的にはまだまだ自重しているつもりなのだが。

「そっぴえばサーベルの部分はどうされました？」

「あれは加工してから自分で使おうかと思ってるそうです」

「一応この魔物達の素材は知り合いの人が集めてきたという設定なのですが、ホントは自分で使う気満々です。」

「なるほど、あれは鉄すら切り裂くと言われる素材ですからね」

ジョーンさんとは大体週一ペースでお茶に招かれてこうやって談笑している。今回はついでに商談も行った次第だ。

「それでお願ひがあるんですけど。この商品の販売を依頼した方は前も言った通りあまりこちらでは有名に成りたくない事情がありまして。なのでまだワイルドカッターの懸賞金は受け取って居ないのですよ」

「なるほど、それを私が受け取ってこれば良いのですね？」

「報酬の方は折半で構いませんので」

「いやいやこの魔獣を倒したことの労力は相当なものはず。代わりに受け取るだけの行為にそこまでの報酬を頂くわけには行きませんよ。割合はそちらが九、こちらが一で結構ですよ」

商人って業突く張りなイメージなんだけど、ホントこの人いい人だわー。なんでここまで気に入られているのは大いに謎だが。

「どうです最近は？」

「いやー新しい事業はやつと軌道に乗ってほつとしているんですが、不景気な話もあつて困っていますね」

「何かあつたんですか？」

「実は家が管理している鉄鉱所の近くで魔獣が出没して作業効率が激減してしましてほとんど動いてないも同然なんですよ」

「冒険者ギルドに依頼は？」

「それがこの魔獣はかなり多い上に凄く逃げ足が早くて。何匹かは討伐したもののその度に学習しているらしく、今では冒険者が近寄ると全く出てこなくなってしまうました。しかし労働者だけになると狙って出てくるという厄介なヤツらでして難航していますね」

ふむ、あのベアーハッグも連携してたし多少頭の良いリーダー格が統率している群れがいるんだったらそれくらいはするのかな、魔獣って。

そうだ。試しをしてみるのにはこれは都合がいいんじゃないだろうか？

「どうでしょう。このワイルドカッターを倒したチームに依頼してみるのは？ チームの一員には獵師を生業にする者がいたはずなので逃げた先を追跡して巣を直接叩くなんてことも出来ると思うんですけど？」

チームを組んで一週間経過していたが、その間に二度ほど既に依頼をこなしてジョイの獵にも一度同行させてもらっていた。猪突猛进タイプのジョイに隠密性の重要な獵師が出来るのかと不安であったが、思いの外獵師としての才能はかなりのものだった。知識はまだそこそこしかないが、とてつもなく感覚が鋭いので気配察知や探索行動などがとても上手かった。それに身の軽さにかけてはかなりの者で、弓師としてはすでになかなか良い線をいっていると言えるだろう。それがどこまで通用する高さにあるのかを一度限界まで

測っておきたかったのだ。

なんせ今俺はジョイの戦闘技術の指導を頼まれている師匠的位置にいた。空手以外はとてもしゃないが教えることができないと一度は断ったのだがその熱心さに負けて色々と強くなるための方策を検討中だった。

「なるほど……獵師ですか……。問題の魔獣は犬型で今まで逃げていく先は森の中だった為にその機動力に振り回されていたようです。しかし痕跡から後を終える森の専門家といえる獵師ならばもしかするかもしれませんね。戦闘能力においてもワイルドカッターを倒せるほどの力があれば申し分ないですし」

ふむふむと言いながら思考の海に入って呟いているジーニーさん。冒険者の仕事なんて完全に範囲外のことなのによく頭がそんなに回るな。

「いいですねそれ。是非お願いしたいです」

「わかりました。それでは俺が直接お願いしておくますのでそこらは冒険者ギルドにジョイというこの街所属のソード級の冒険者宛に指名して依頼を出しておいてください」

ソード級とは冒険者ギルドのランクで下から、ダガー、ソード、クレイモア、ハルバード、セイントソードの五段階になっている。

「了解です」

ジョイについてのツツコミは無し。ほんと空気も読んでくれるわこの人。

さあ人を助けながら、少女二人の可能性を確かめて、俺の戦

いの手札も試しつつ、しっかりと働こうじゃないか。

第七話 いっぱいイッパイ

ジーニーさんからの依頼を早速ジョイとミミルに説明して準備を整えて次の日には鉄鉱所の近くにある村であるウインストンへと出発した。今回の依頼は初めて数日間かかるであろう依頼だったのでフリーリーにはお留守番してもらうことにした。子供たちだけの場所であり、スラム街にあるあの家がゴロツキに襲われないとも限らない。前の状態ならあまり心配はいらないが改修が進んだ今ではそれなりに良い見栄えになってきたので危険性は大きいにある。

食料なんかの買い出しはマリナさんをお願いしておいた。これから情報ギルドには大いに協力していく所存を伝えると快く引き受けてくれた。どう考えても武具屋での働きより情報ギルドへの献身度の方が上回っている気がするが大丈夫なんだろうか……。

留守番についてフリーリーは猛然と不満をブー垂れていた。

「そんな面白そうな事に私を置いていくの!？」

俺とトウカによる懸命の説得によってなんとか納得してもらったが、代わりに一個3デイクスもする特別性の飴を一袋も買う約束をするはめになってしまった。そして俺は見た……その約束を交わした一瞬にフリーリーの見せたしてやったり顔を、実に悪そうな顔だったよ。まさか一時間に及ぶ抗議は飴を買わすための策略だったのか？ まさに計画通り、に運ばれた事に気づいたが既に時遅しである。ウインストンはブローナスから北にある山岳地帯の手前にあり、歩いて三日といった距離だ。当然そんなに時間をかけたくない俺は馬を一頭レンタルしてミミルとジョイを乗せて走らせる。もちろん俺は自分で走りましたとも。そして更に早くかつ効率的にするため俺と馬には『ウインドコート』の魔法を常時かけながら進んでいた。

対象をその効果を宿すコートシリーズなのだがその効果はちょっと他とは変わっている。火と水はそのまんまだがウインドはその対象に風で包んで軽くし、ストーンコートは石で包むことはないがその対象を若干硬くする効果を発揮する。ライトコートについてはミルに聞くとなんでもほんのり光る膜ができて闇への耐性がつくのかなんとか。

つまりウインドコートをかけることによって俺と馬さんはより軽快により疲れずに走ることが可能なのだ。

道のりを順調に進み、無事ウインストンにたどり着く。なんだかジョイとミミルが道中口数が凄く少なかったが馬は苦手だったんだろっか？

「……………キドーって強い人じゃなくて化物じみた人に入る人だったんですね」

「え？　なんで？」

ずっと走り続けてはいたが、ウインドコートをかけた状態の一端の冒険者なら不自然ではなかったはずだが。

「これだけ長い時間、ウインドコートを維持できる魔力量を持った人なんて居るもんなんですねえ……………」

「あ」

しまった。魔法に関しては大した才能もないので忘れがちだが、魔力量に関しては尋常でない量が保有している事は把握していた。なにせ今までどれだけ使い込んでも今だに底を感じたことすらないからな。魔力はその消費量にしたがって倦怠感とか精神的鬱屈感が現れ出すらしいけど、道中魔法を使い続けてきた今も、そんなの毛ほども感じない。

「ごめん、これも黙っというてね」

すでに二人には俺が強さをなるべく隠したい旨は伝えてあるのでこれも口止めしておこう。

「こんな話しても誰も信じてくれませんよう」

そこまで荒唐無稽なキャラなのか俺は？ さてとりあえず村人達や鉦夫の人に話でも聞いて回りますか。

朝早くに出発し、ウインストンにはお昼前に到着しておりそこから始めた聞き込み捜査も無事に終了。少し遅いお昼ご飯をジョイとミミルと食べながら情報をまとめる作業に入った。あまり常識的と

はいえないしこの世界の知識量はまだまだ乏しい俺だけで情報から何かを導き出しても間違いつか勘違いが起こる可能性が高いので秘密にしたい事柄以外は常に誰かに聞いてもらうようにしていた。情報の価値もあがるし、俺の足りてない常識も埋まっていって一石二鳥なのだ。

「まず分かった事は、対象はグレイウルフという狼種の魔獣で坑道へと近づく、もしくはその方向に近い山道を歩いている時に襲われることがほとんどらしい」

坑道付近の地図を広げて過去に襲われた場所に印を書いていく。

「かなり分かりやすいね」

「一目瞭然ですう」

その襲われた場所の印を見れば大体どのあたりがグレイウルフ達の生息圏なのかは誰にでもわかるくらいわかり易かった。

「ジーニさんは単なる大量発生だと思っていたらしく、俺らの前にだした依頼は五匹倒したらいくら追加でも報酬を出す、なんていう形をとってその数を減らそうとしたらしい」

「結局それで何匹減ったの？」

「一回目こそ七匹討伐出来たらしいけど、それ以降のチームは三日かけて一匹が関の山だったらしい」

傾斜のきつい山にある森で四足獣と追いかけてこしても捕まえられるはずもない。

「最初の被害から学習したんですかねえ。すつごく賢いワンちゃんなんでしょうか？」

狼ですよミミルさん。

「冒険者もその用心深さを警戒して森の奥にまでは足を踏み入れてはいないそうだ」

グレイウルフはかなりの群れを成す種族で、過去最大記録では125匹とぶち当たってしまった冒険者がいるそうだ。しかもこいつらは歳を重ねていくと魔法に近い力を駆使する物が現れるらしく、数と魔法なんていうかなりの厄介さを持ち合わせている。

「冒険者の鉄則に『群れとは正面から当たってはいけない。当たるとなら用意周到な準備をしてからにせよ』なんてものがあるくらいだしな」

何やら思うところがあるのかジョイが椅子を後ろに傾けながら空を見出した。

「でも、わたしたちの任務って壊滅なんですよね？」

ああなんだかミミルと会話すると力が抜けるな。

「こんな状況じゃかなり難しいのは分かってる。だからこそその高額支払いだ」

グレイウルフは単体ではそこまでの脅威ではない。普通のやつが数匹相手でもやりようによってはジョイ一人でなんとかなるだろう。

魔法を使う強化型でもジョイとミミルならなんとか勝てるそうだな。
15歳の駆け出しでもなんとかなる程度の魔獣なのだが今回の依頼報酬はなんと三万デイクス。通常のグレイウルフ討伐に比べればおよそ十倍近い。

なんでも既に鉄鉱所は二十日ほど稼動しておらず、そのための損害はすでに二十万デイクスを超えているという。今はなんとか在庫を売りさばいて販売契約は保たれているが、もしも足りなくなりその信用を失うような事があれば以前のお家没落騒動の二の舞になりかねない。つまりボライアズ家にとっては早急に片を付けたい案件なのだ。

「明日の明朝から森に入ってこの襲われた辺りを搜索して群れまたは巢を見つけ出す。最終的に全滅させられなくてもボスを仕留める事ができればここから追い出すことは可能はずだ。もし見つからなくても暗くなる前には撤退してこの村まで帰ってくる。この人数で夜中にグレイウルフとやり合うなんてのは御免被りたいからね」

「なかなかしんどそうだな」

「えええゝわたし体力には全然自信ないですよ」

「それに問題に対してもちゃんと用意はしてあるから大丈夫だよ。なので探索は明日からだな」

「了解」

ああ素直。本当に助かるよこの子達は。

「兄ちゃん一ついい？」

「なんだジョイ？ 今晚の飯でも気になるか？」

「ちげえよ。明日の探索っておれのスキル便りなんだよな」

「ああ、ジョイの探知力があつたからこそ受けた仕事だからな」

「おれが便り……又フフフフ……からこそとか……ムフツムフフ」

なんだかジョイが気持ち悪い笑みをこぼし出した。

「ジョイくんとわたしは、今まで利用されても、頼られることなんてなかったからね」

ああなるほど。しかし俺から言わせれば頼らないでどうすると物申したい。ジョイの探知力はもちろんのこと、ミミルの神官として学んでいる薬学の知識はなかなかの物だ。小さい頃に魔法の才能を見初められて神殿に仕えて以来今までベンきようしてきたから当然と言っていたけどそれでも凄いのは凄い。おまけに光属性の治療術も使え、ファイヤーボールやストーンウォールなんてもの習得している。ジョイの身体能力もほとんどが平均以下ではなく、その身軽さにおいてはちょっとした体操選手並のものだった。今まで散々この二人を利用してきたのは足したこと無い奴らばかりだったんだろうが、利用するよりチームとして引き入れた方がよっぽどお得だったと思うんだが。

世の中見る目の無い奴が多いもんなんだな。

「便り頼られてこそチームだぜ！」

親指を立ててドヤ顔で決めてみたが、それを見た二人は吹き出した拳句にしばらく笑いが止まらなかった。

あれ〜？ かつこ良く決めたつもりだったんだけどな〜。

次の日は予定通りまだ明るくなり始めた頃に出発。ちなみに俺は武具の類はカバンに詰めて運んで、村を出てから装着した。もちろん怪しいマスク付きで。正体を隠すならやはり徹底的にね。

「ほんと変わってるね〜キドー兄ちゃんって」

褒めんなよ恥ずかしい。

一番最近ウルフは目撃された場所へと向かい、そこからジョイに任せて痕跡を追っていく。なるべく気づかれないように忍びでの移動だったが、速度はそれなりだった。一時間もしないうちに山の高配にミミルが根を上げていたが、あらかじめ疲労回復薬を混ぜた水筒を渡してあり。休憩の度にそれを飲ませることなどでなんとか耐えて貰った。

というか冒険者稼業しててその持久力のなさはどうなのよ？

「結構な数がいんのかもしれない」

痕跡を追っているなかで狼の気配を遠目に感じる事が度々あったようだ。

「もしやばそうな数に出くわしたら俺が時間稼ぎはするから一目散に逃げろよ」

「もちろんそうするよ」

あれ？　そこは仲間を置いて逃げられるかって台詞を期待していたんですけど。

探索を開始して六時間が経過した。

「なあジョイ……………俺さすつごく嫌な事が思いつきそうなんだけどさ」

「気が合うね兄ちゃん……………おれも実はさっきからそんな気持ちが浮かんできた」

苦虫を噛み潰したような顔になる。正直頭痛がしてきそうだった。それはなぜかというと、これだけ探索したのにグレイウルフの気配を感じてもその姿を見ることは一回もなく、それでも巢と思わしき場所まで辿り着いてはいたのだ。なぜか三箇所も。野生に生きる魔獣が巣を転々としている？　いやいや、ここに来る前に冒険者ギルドにあつた魔獣図鑑にはそんなこと書いていませんでしたよ。

近づくと消え、有り得ない行動をしているのに縄張りに入る鉱夫だけを襲う？　……………盛大な違和感しか感じないですよ。

「そついや昨日会った人で、討伐に付き添った村人に聞いた事を今思い出したんだけど、なんでも「狼の群れにかち合った時、狼たちは一斉に違う方向に逃げた」らしいぜ」

「……決まっただけで欲しくないけど決まりだな」

普通逃げるなら同じ方向に全員で逃げる。だが違う方向に逃げて見せればどれを追えばいいか迷ってしまい。結局追いつけなくなってしまう。

つまり狼は危険を犯してまで逃げきる事を優先したわけだ。……ねえよ。有り得ないだろ、獣が本能を置き去りにした行動を取るか。

本能を抑えこむ事が出来る力は世界でたった一つ『理性』だ。そしてそれを持ち合わせているのは。

「人間相手は想定外にもほどがあるぜ……確か魔獣使役は『ギフト』保持者が可能に出来たっけか……。これは三万デイクスでも安かったかもしれないな………」

神からの加護であり贈り物、大いなる力『ギフト』。そんなありがたい力をこんな事に使う奴を相手にしなきゃいけないとはね。

燃えてきた。

第八話 狼の遠吠え

新事実を発見してまった俺らは長い休憩をとりつつ昼飯を食べていた。これまで魔獣の仕業と思っていた被害が人によるものだとかかったならこれは事件だ。昼食をとりつつも元から集めていた情報を踏まえて改めて状況を整理していく。

「まずは……目的だな」

強盗の線はない。襲われた被害者にも近場の村にもそういった痕跡は見当たらなかったようだし。

「むむむ、とすると……」

ジョイと一緒に印を付けた地図と睨めっこをする俺。

「ワンちゃんの餌が欲しかったとか？」

「いや、わざわざ人間を襲うとか面倒くさいでしょうに」

カニバリズムな狼を人間が操ってるとかギャグすぎるだろ。

「誰かを狙ってたなんてのは？」

「ありえそうだけな話だけどな。でもそれなら今逃走なんて手段を取ってるのがちょっと不自然だな。最初に亡くなった人が狙いの人だったら今頃とんずらしてるだろうし」

「やっぱり採掘の妨害なんじゃないの？」

「それが妥当なとこなんだけどねえ……」

人も物資も被害を受けているのは鉱山関係だけだ。妨害としてやっているのなら一応は辻褃は合うといえは合うのだが。

「ここまでする？ 普通？」

数ある鉱山の一角を妨害するために人を殺して、冒険者まで相手取ってなんてのはハイリスクすぎると思うんだよね。いくなればご飯を食べるのを妨害するために手に取った茶碗を一々叩き割るような難しく面倒くさい方法を使っている。妨害が目的ならもっと穏便かつ気付かれないようにやり方などいくらでもあるように思える。その中でもこれはほぼ最高な程に目立つ部類に入るだろう。

「じゃあさ、例えばさ、どこかに近づいて欲しくなかったとかってどう？」

なるほどなるほど、襲っていたのは人払いのためか……。それなら最初だけとはいえ冒険者にまで手を出した経緯にも説明がつかないじゃあどこに近づいて欲しくないか考えればもしかすると。

「えっと、一回目の討伐以来をこなした場所って聞いているか？」

「あつそれならわたし知ってますよ」

話を聞いていたミミルが地図に指をさす。そこは鉄鉱所に続く道に続く最も人が襲われた場所でもあった。

「オーケーオーケーなんとなく分かるような気がする」

推理なんてのはあまりやったことはないが、元からあるものを組み立てて答えを導き出すのは職人柄得意だぜ。

「よく見れば被害を被った場所はその辺りが中心地になっている。たぶんその先に目標の場所があるな」

「兄ちゃんの予想が当たりかもしれない。こんな山越えさえ出来ない道なのに最近馬が走った後がある」

「やつぱりこれはデカそうな山にあたったのかもしれないな」

相手が相手だけに危険だと判断はしたものの、個人的にギフト保持者とは今後の為に是非一戦交えておきたかったので任務は続行した。もちろんジョイとミミルには村に帰っておいてといったのだが。

「キドー兄ちゃんだけじゃ奥に行ったら帰って来れないだろうから付いて行つてやるよ！」「」

「えーっと敵さんが強いならー治療術が必要だと思つのでえー」

と言つて俺の指示を全く聞かなかった。いい子だよホント君達はい！ 帰ったら存分にハグしてあげよう！ たとえ嫌がってもな！

正直かなりの我俣で依頼を続行して、危険度は最初の想定を大きく超えているので心配なのだが……。まあこの一ヶ月、俺も鍛錬を怠らずに強くなる術も磨いてきた。相手が獣を操る力を持った人だと分かつていればいくらかの予想を立ててる事ができるのでなんとかなるとは思うんだけどね。

そして俺の予想が当たっているようなので、あとはこの馬の蹄の後を追えば目標まで辿り着ける。

「じゃああとは作戦通りにな。重要なのは落ち着く事だ。どんなに危機的状態になったとしてもな」

俺たちは人の知恵にて蠢く狼たちの群れの場所へと足を踏み入れていった。

「兄ちゃん……」

「ああ……これは凄いな……」

狼達の気配を察知したジョイが俺に小声で合図を送る。しかしそ

の数が膨大なため俺にもなんとなくわかってしまっていた。二人は耳に手をあて、俺は吸えるだけの限界まで息を吸い込んだ。

「出てこいよ魔獣使い！！！！！！ 近くにいるのはわかってるぞ！！！！」

なぜ分かるか？ それはこいつらが人を襲ってまで秘密にしたかった遺跡の入り口が既に見える場所まで俺たちが来ていたからだ。いくら冒険者を避けていてもそれを発見されて生きて返す訳には行かないはずだからだ。その為には全力を持って事に当たる、そんな予想を俺は立てていた。

数秒の沈黙の後、周囲を取り囲むように狼達が姿を見せ、その中に一人の男が大きな狼に跨って現れた。狼たちの数はパツと見ただけでも四十を超えていそうだった。

「なぜ貴様私の存在に気付いたのだ？」

手足と顔を包帯で巻いたような不気味な男が俺に質問してきた。

「あんたはなかなか几帳面なようだけど、狼までそんな動きを見せれば獣としておかしいって気付くさそりゃ」

んゝふゝん、完璧にこなしてみたのが逆効果だったわけだよワトソン君。ジョイが居なきや絶対気付かなかったけどね。

「なるほど、獵師を欺くことまで考えて使役をしてはいなかったかな。今後のいい参考になったよ」

男が手を挙げる。

「では、死ね」

男が手を振り下げると、少し離れた位置でこちらを囲んでいた狼たちが一斉にこちらに跳びかかって来た。

「想定通りなんだよマヌケ！」

「ストーンウォール」

俺とミミルが三人で固まっていた場所の後方百八十度に石の壁を作り上げる。元からこういうふうに襲ってくるとは予想済みだったのだ。なぜなら複数であることを有効活用するならこれが最善の手であるからだ。人間なんて必ず死角なんて呼ばれる隙つてのがあるもんで、それをつくなら全ての方向から襲いかかるのが手っ取り早く確実なのだ。

これで攻撃は前方だけに集中すればいい。まあそれでも10匹近くが絶賛俺に向かってきてるわけですけどね。なので今回の俺のビツクリドッキリの必殺技の出番なわけですよ！

「『ウインドーボール』アクトテンー！！」

俺の詠唱と共にファイヤーボールが十個、空中に出現する。ちなみにアクトテンはまったく必要ではなかったけどカッコイイかと思つて気分で付け足した。

「はあ！？」

「ええ！？」

味方のミミルとジョイが驚きの声を後ろで上げている。ストーン

ウォールを作ったあとは俺がなんとかするとしか言っていなかった
のでビックリしたようだ。

魔法を複数同時に出すことはイメージ次第で直ぐに可能だということ
はわかっていた。しかし目標に飛ばすために一々指定していかなければ
ならなかったたので脳内の操作だけではとてもじゃないけど無理だ
ったのでお蔵入りしていた。しかしそこは発想の転換。「飛ばせない
なら飛ばさなければいいじゃない」とね。

狼たちは浮かび上がった風の玉にも動じずに俺へと牙を突き立てる
為に迫って来た。よく訓練されたワンちゃんだぜ、感心するよ。
ただし今回はそれが駄目なんだけだな。

側に近寄った狼達へと浮かび上がった風の玉が次々に飛び出して
いき、狼達を吹き飛ばしていった。

俺は全部の球に一つの指定を下していた、それは『俺の5メートル
以内に入った物へと飛んで行く』である。発動した時から入っている
ジョイとミミルは対象とはならないが、襲ってきた狼達は見事に
それに引っかかってくれたのだ。もちろん一匹に付き一個ずつ飛ぶ
ようにも設定してある。

「！！？ 貴様あ！ なんだそれは！？」

狼達が同時に十匹もやられて動揺したのか魔獣使いが俺に質問を
飛ばしてきた。

「何って魔法ですけど？」

ウインドボールの数以上に迫っている狼を拳で打ち据えながら質
問に答える。

「そんなウインドボールなぞ見たことも聞いたこともないわ！」

「じゃあ俺の特有の使い方って事になるのかあゝへえゝ」

いい事聞いたな、オートメーションって名付けるか。後ろから襲えない狼が迂回してきて徐々に前に回ってきているが、俺が拳で、遠目にいるのをジョイがどんどん矢で迎撃していく。いいよいよいよジョイ、君は土壇場でこそ本領を発揮するタイプなのかもしれないね。

「まずい！？ 集まれお前たち！」

既にかかなりの数の狼が動けなくなったのを見て男の側にいた大きめのヤツらを自分の周りに呼び寄せ始める魔獣使い。

「放てえ！！！」

グレイウルフの上位種が使う『切り裂く風』を5匹ほどがまとめてこちらに放ってくる。見事に統率された狼がその射線上を空けて風の刃が俺に向かってきた。

「『ストーンウォール』アクトスリー！！！」

それを三枚重ねにした石の壁で止めてみせた。強靱さだけなら一級品の俺の壁でも一枚半ほどまで切り裂いていた。これは脅威的だな。

「なんだとお！？」

どうやら今のが奥の手かな。

「投降する気はないか？ ギフト保持者なんだ死刑にならずに済む

かもしれないぞ？」

ギフトの保有率はなんと全員が持っているらしいのだが、発現させることが出来るのは千人で二、三人。さらに使いこなすのがそこから100人に一人。極める事が出来るのが一世代に一人いるかどうかだそう。そんな希少なギフト使いならばここまでのことをやったとしても死刑を免れる仮想性がある。といっても人生の大半を無償労働にあてられるだろうけど。

「……ふん。もう勝った気が小僧が」

おや？ 既に勝負は見えてると思うんだけど……。

「来い！ ゴリアス！」

その呼び声に答えるように地面を揺らす轟音がこちらへと向かってくる。

「でけえ……」

「うそぉ……」

「なんだよアレ……」

現れたそれは、一見は二足四腕の変わった成りをしているが牙の生えたゴリラだった。問題はその巨体がハメートルを超えるほどあったことだ。

ヤバイ。これは俺一人でも勝てるかどうか疑わしいのに、今はジョイとミミルがいる。

「ハハハハハハ！ 貴様が奥の手を持つように私にも当然切り札は用意してあるのよ！ さあここからがほん　　」

おそらく俺の苦々しい表情にいい気分になった魔獣使いの語りが最後まで言い終わる前に　　。

「ぐぎゃあああああああ」

ゴリラが森の彼方に吹っ飛ばされた。

「「「「は？」「」「」」

その場にいた全員が呆気に取られてしまった。

「見つけた。ついに見つけたぞルド・バリアック！！！！」

静まり返った場に響いたその声の主は純白に輝く大狼に跨った若い少女だった。

第八話 狼の遠吠え（後書き）

張り詰めタア

弓ノオ
ー

第九話 会話の価値

魔獣使いが乗っている灰色の狼と退避するように現れた大きな狼。しかしその威圧感、高潔さ、存在の大きさは段違いのものだった。

あまりの気高さに自然と畏怖を抱いてしまいそうになるほどだ。あれも魔獣というのだろうか？ なにか……こう……違うもののような……。てかそんな狼の背中に乗ってるあのちびっ子は誰ですか？

「貴様が妾に与えた三年前に与えた屈辱ここできっちり利息を付けて返してくれるわ！」

なんだか幼女のくせに口が荒いな。おまけに何だか物騒な雰囲気。気が……俺の子供好きさはあれを許容できるんだろうか？

「そ、その狼っ！？ 三年前だっつー！！ お前まさかりンバーグの関係者か！？」

「わかっておるなら話が早い、その素っ首貰い受けるとうしょうか！」

あれ？ なんか蚊帳の外へといきなり放り投げられた感が……。

「ヒイツ！ お前らのような化物に付きあつてられるか！ 行けお前たち！ 時間を稼ぐのだ！」

なんだか幼女の素性が分かった途端に魔獣使いのルドと呼ばれた男は逃走を始めようとした。

「逃すものか！ ボーゼ！ こいつら全部沈めてしまえ！」

そんな声が上がると草木の生えていた筈の地面が泥のように溶けてその場にいた全員の足を絡めだした。ちよつと俺らも対象になつてますけどー！ー！！ ストーンウォールを地面に横たわらせるように出現させてその上へと三人で避難する。

その謎の現象の中心の地面から体中に泥を塗りたくり、水苔がそこかしこに張り付いていて何本もの牙を口から生やしたイノシシが現れた。

「よくやったぞボーゼ！ ナンフよ雑魚を頼むぞ、妾とコウジンはあの痴れ者にとどめをさしてくる！」

「クワツ！」

何やら任されて、泥を逃れて迫つてきていた狼の群れの前に躍り出たのは立派な黄色のトサカをした、もとい黄金色したモヒカンをしたアヒルだった。すると自分の目の前に幅広の水の壁を作り出して、それをそのまま狼達へと押し出した。突然起こった濁流に狼達は為す術もなく飲み込まれていった。凄い……すつごく凄いんだけどツツコムよ。

「モヒカンでけえよ！」

ファンシーなアヒルがかいモヒカンつけてるとかマジでロツクだぜ。

「うわああああああああ」

なんてアヒルさんの雄姿を見ている間に足を取られていた魔獣使いの周りに居た一回り大きな狼達も全て幼女の白い狼に全てやられていた。開戦一分と経たない内に全滅とか圧倒的にも程があるだろ。

そして幼女は腰にぶら下げた短剣を引き抜き、男へと差し向ける。

「言い残すことはあるか下郎」

「クソツクソツ！ たかが獣を何匹か売ろうとしただけじゃないかよ！ 三年も前の話でここまで追って来やがって！」

大気が震え、いや森全体が震えたように思えた。なんて殺気だよ、俺がゲイロス一味で放ったものが可愛く思えてくるよ。

「たかが獣？ 妾の家族と言うべき友人達を誘拐しようとしておいて、た・か・がだと？ いいだろう、今直ぐ死ねえええ！！！」

男の頭上へと短刀が全力で振るわれる。

「何のつもりだ貴様」

なんとかギリギリ俺はその腕を男が殺される前に掴んで止めて見せた。

「いやいやいやいや、後から乱入して来てその言い草はないでしょ。この男には聞かなきゃいけないことがあるんでまだ死んでもらっては困る」

「……妾は三年前からこやつを追って来たのだ。妾から言わせればお主達の方が後だ」

こわっ！ この幼女怖いよ！ なんてメンチ切ってくるんだこの子！ 不良と喧嘩は何回かしたことあるでど、見ただけで逃げ出したくなるメンチなんて初めて見たよ！ っていうか力強いな、かな

り本気じゃないと押さえられないのはなぜだ？

見た目のころ10歳で髪はどうやら銀髪で三つ編みに結ってからさらに肩より上へ括り上げている。眼の色が黄色というより金色？銀に金とか派手だなあ。幼いながらに美しいと言える容姿なんだろうけど今は迫力満点な恐ろしさしか感じません。

「でもさ、こいつの後ろには黒幕がいると思うから話して貰わないと困るんだよね。さっきの話聞いている限りじゃそっちの誘拐だっけか？ それにも黒幕がいるかもしれないけどそっちの犯人は捕まってるのか？」

「……！！」

おつと今気が付いたのが丸分かりの顔をしているぞ。三年間の間に一回も思いつかなかったのか……。

「こいつ殺しちゃったらそこに辿り着くのは無理だと思うけど？」

説得なんてやったこと無かったけど上手くいきそうかも。

「ウムムムム……しかしここまで来て諦めよというのか……」

「こいつを締め上げるか、その他の奴を見逃すのかを選ぶのは君次第だ」

「その黒幕やらとへは貴様なら辿り着くことは出来るのか？」

「確実とは言わないけど、絶対に見逃してやるつもりはない」

裏で糸を操っている悪党ほど質の悪い輩は居ない。ならばその糸

を見つけたのなら全力でその先を手繰らなければいけない。そういう奴は生きてる限り害悪をまき散らせ続けるからな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった。しかし！」

どうやら懐はなかなか広いのか少し考えて俺の提案に承諾してくれた。了承の意を示した少女は短刀を手から離して魔獣使いへと拳を振り抜く。哀れにもゴムボールが跳ねるように男は森を跳ね回って飛んでいった。

「これぐらいでは妾の怒り欠片も収まらんが、今はお前……名前はなんと申すのだ男？」

「俺？」

「以外に誰がおるか」

すつごく偉そうな喋り方するなあこの子は。いいとこ出のお嬢様だったりするんだろうか？ まさか貴族とか上級階級のお方だったりするのかな、その割にはいささか野性味溢れすぎてると思うが。今の格好であまり名乗りを上げたくはないが下ろしかけた拳がまた上がってしまったとはとてもまずい。なぜならこの少女に従う獣達相手では全く勝てる気がしないからだ。中級魔法並の力を振るった先の二匹もそうだけど、今日の前にいる純白の狼にいたってはいい勝負するイメージすら沸かないと来たもんだ。上には上がいるのは重々承知だったんだが、こいつは上は上でも空の上って感じがする。

「俺はキドーだ。ゆえあつて正義のヒーローをやっている」

「ヒーローとやらはよくわからんが、キドーよこの件は貸しにして

おくぞ」

え？ いやいや、そっちにもメリットあったよね？　なんで俺への貸しになるんだよ！

「尋問なぞはやったこともないし、この国にはまだ来たばかりで土地勘もない。あそこで転がって男の後始末はまかせろぞ」

文句を言いたかったのだが、それを発する間もなく少女は狼に跨った。

「妾はビルマイア・リーンである！　また会おう！」

唐突に現れ颯爽と風のように去っていった少女。

「なんなんだアレは……まあでも苦戦しそうになった所を助けて貰ったという見方もあるか」

その後スタボロになった魔獣使いと、泥沼からストーンウォールに飛び乗って脱出していたジョイとミミルを回収して下山していた。

村まで降りた俺はまず依頼を達成したことを鉦夫の人達に教え、ジヨイとミミルにはジーニーさんに連絡してもらったため先に街まで帰らせた。

俺はというとその日の夜になって再び森へと半死半生ではあったがミミルの治療術と俺の傷薬の効果でなんとか喋るくらいには回復していた魔獣使いことルド・バリアックと一緒に森に入っていた。もちろん尋問するためだ。

「さて、聞きたい事は三つ。誰から頼まれたのか？ お前のような裏の仕事を請け負う奴は他にいるのか？ そしてなぜあの場所だったのか、だ」

「喋るんでも思ってるのかお前？ へっ！ どれだけ頼まれようと脅されようと何も教えてやるつもりはないね！」

がんじがら
雁字搦めに縛られた状態でよくも強気に出れるもんだ。それなりに修羅場をくぐって来たのだろう。

「なにか勘違いしているようだけど、今から頑張るのは俺じゃなくてあんただよ？」

「……………どういう意味だ？」

「今から……………そうだね。夜明けまでにあんたが俺に信用されるかどうかであんたの運命が変わってくる」

「……………」

「信用できたら警備隊に、もしも信用出来ないと思ったら……………あの

狼少女に引き渡す」

狼少女という言葉に少しだけ反応を見せる。

「選ぶのはあんただ。俺はここから何もしないし何もしゃべらない」

ていうより俺も尋問なんてできませんよ！ 話術で相手を突き崩すなんて繊細な作業は無理だし、拷問なんてもつての外。なら素直に警備隊に付き出してしまう方がいいのだが、こいつの上がもしかしたらもしかしてしまうのかもしれないのであるべく自分で情報を手に入れておきたい。

たった一つ、俺の持ってきたランプだけが灯り、静寂な夜の森に俺と魔獣使いは押し黙ったまま鎮座していた。沈黙つてのは人間にとつては度が過ぎると体に毒だ。おまけに暗闇で、なにも喋らないままでは確実な死が待つ狼少女という選択肢をブレッシャーに晒されれば何か一つくらいは喋るんじゃないかな？ という計算だ。

「……」

「……」

長い長い沈黙の時間が続く。しまった！ この作戦すつごい欠点がある！ それは俺もこの沈黙が辛いつてとこだ！ 野郎と二人で静かな暗闇の中で待ち続けるとかどんな拷問だよ！ 仕方ないトウ力の笑顔でも思いだして何とか耐え忍ぶか……又フツ。

星の位置から詠んで、尋問開始から大体六時間が過ぎようとしていた。その間男は一言も喋らないままだった。俺はというと妄想でしばらくは頑張っていたが、沈黙との戦いから次第に眠気との戦いへとシフトしていった。ねじ切れるほどに太ももを抓って頑張っていたが、その甲斐あつてもうすぐ朝を迎えようとしている。ふと魔獣使いの方を見ると冷や汗だらうか顔中に汗が吹き出していた。死というプレッシャーをここまで耐えられるのは感心する物があつたが、逆になぜここまでの精神力を持ち合わせておいて悪党なのかという疑問も抱き出した。

「もう直ぐ夜が明けるな……」

最後通知のつもりで俺は呟く。どうやらその意図を感じ取ったらしくビクツと肩を震わせる魔獣使い。

「どこまで喋れば信用してくれるのだ？」

ここに来て初めて男が喋りだす。そういえば裏稼業だったら喋っただけで殺されるような情報もあるかもしれないのかあ。

「さっき聞いた三つを出来る限りで詳細に説明してくれ」

命に関わるような話は無くてもいいよと、暗にお情けをかけてみる。俺だって人死はなるべくならして欲しくはない。

「……………まず誰から頼まれたかどうかは俺には分からない。こういったやばい仕事を斡旋する組織があるらしく、どこから嗅ぎつけるのか俺らみたいな奴に間接的に話を回してくる。だから依頼主本人に会ったことは一度だつてない」

うつわあ 厄介な話がいきなり出てきたぞお。

「俺のような裏の仕事をしている奴はごまんというはずだ。何度か数名でチームを組んで仕事をしたこともある」

組織力の高い犯罪組織か……。

「なぜあの場所かという質問はあんたわかってるんじゃないのか？」

「あれバレてた？」

「あの場所を嗅ぎつけた時点で予想はつく」

「じゃあやつぱり新しく発見した遺跡があるんだな？」

この世界の遺跡には滅びた文明の遺物や歴史を示す物、時には魔法を帯びた強力な道具なども発見される宝の山だ。しかし危険な物や厄災を封印されたような場所も多々発見されているので、そういった遺跡はその場所にある国に管理され、許可された物ただ探索を許されるものなのだ。

つまりこいつが隠していたのは盗掘。多大なリスクを伴う行為だが、それに見合う金額が手に入れられる事は確実だ。

「他にも仲間がいるんだな？」

「仲間っていうより、あっちの方から派遣されてきた野郎で詳細は知らねえよ。俺の担当は人払いだったもんでね」

業務分担まできっちり管理してるとかマジでしっかりしてる組織だな。

「そいつらはまた来る予定はあったのか？」

「本当ならあさってくるはずだが……俺からの定期連絡が途絶えた時点でもう来ないだろうな」

わあ、ほんとしっかりしすぎてウザいわあ。

「俺のポケットに大きめのコインが入ってる。それを出してくれ」

男の腰のポケットをまさぐるとか嫌すぎるが、ここは我慢して言われたとおりにコインを取り出す。この世界の硬貨は基本丸い形なんだが、取り出した硬貨は六つ角形になっていて色は銀色だった。絵柄は……たぶん何かに髑髏だろうけどなんの動物なのかはわからない。

「それはその組織からお墨付きを貰った奴に渡しているコインだそうだ。その絵は牛の頭蓋骨だって話だがなんでそれなのかは知らないな。仲介として派遣されてくる奴もそのコインか同じ文様の刺青なんかどこかに入ってる。全容なんて全くもって掴める物じゃないかったが、今まで十以上の国で仕事してきたんだよほどのそしきなんだろうよ。」

聞けば聞くほどその規模と体勢の整い方に驚きを隠せない。はっ

きり言ってまだまだ文明の進歩としては元の世界に比べれば四段階は遅い、年数で言えば五百年といったところか。そんな中で組織として機能しているのは国という母体意外には基本無かった。商会という物もあるのだが、基本的にはワンマン企業といった一番上の実力次第といったものだ。それを考えるとこの組織はどれほどに根が深く、強大な力を持っているのか想像すら出来ないでいる。

「これ以上は俺の知ってる事はないが……いや、もう一つあったな」

「なんでもいいぞ、とにかくその組織の情報はなんでも欲しい」

「名前だ。組織の名前は『ルドラの右手』と言っていた」

俺はその名を胸に刻みこむ。確実に近い将来この名を背負う者たちとの熾烈な戦いが起こるといふ確信を持っていたからだ。もちろん俺の正義感から言って放っておけない奴等なのは確かなのだが、予想すら立てれないほどの大規模な犯罪組織が世界でも三本の指に入ると言われるブローナスで活動していない訳が無い。俺の故郷である地球で言うなれば、ここは日本の東京、アメリカのニューヨークやロサンゼルスに匹敵すると言っていていいだろう場所なのだ。

「よくここまで喋るきになったな」

「俺だって死にたくは無い。それに好きで裏稼業をしてきた訳じゃないんでな」

どうなるのか俺へと窺う視線を送る魔獣使い。まあ脅しはしましたけど最初から警備隊にする予定でしたしね。じゃないとあんな怖い狼と少女の間に入ってなんていきませんから！ 思い出しただけで股間が縮み上がるほど怖かったんだぞマジで！

それから俺は無事に魔獣使いを冒険者ギルドに引渡し、報酬を受け取る。その事情を説明した結果、ジーニーさんからは更に一万デイクスの追加報酬を頂けた。そこからマリナおばさんの所へ直行し、この事件の顛末と謎の犯罪組織、そして犯人がギフト能力者である話を情報ギルドに売っぱらった。謎の犯罪組織については知っていたらしいので大した額にはならなかったが、合計で一万八千デイクスになった。どうやら新しい遺跡とギフト能力者の情報はかなり高額になったようだ。

もちろん冒険者ギルドの報酬はジョイとミミルで均等に分けようとしたが、家の改築代ですと俺が多めに貰うことになってしまった。そんなこんなで金策を初めて一週間の出来事で俺は七万二千デイクスを手に入れたのだった。これでしばらくまた大工仕事ができる。やったねハニワちゃん！

第九話 会話の価値（後書き）

文明的にそんな組織力を持った犯罪組織が居るか？　なんて思うかも知れませんが日本でいうと実際に居た忍者なんかは一つの国なんかよりも組織力があつたと思われるので有り得なくは無いかなど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7690w/>

正にその義は煌く拳

2011年10月14日21時02分発行